英雄のいない世界で生まれた俺は

ルナチクス

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この世には正義なんてものは存在しない。だから見てみたいんだ。本物の英雄ってやつを。

なるべく原作順守でかつ他作品の要素を出さないようにします
ウルトラマンｚ本編を主軸にしばらくは書いていきたいと思います
オリジナル要素が多く含まれますので苦手な方はブラウザバックをお願いします
駄文でもよろしければご一読ください

目次

1話 …… 1
2話 …… 6
3話 …… 11
4話 …… 15
5話 …… 23
6話 …… 32
7話 …… 40
8話 …… 47
9話 …… 55
10話 …… 61
11話 …… 70
12話 …… 81
13話 …… 86
14話 …… 95
15話 …… 109
16話 …… 126
17話 …… 141
18話 …… 149
19話 …… 165
20話 …… 179
21話 …… 188
22話 …… 198
23話 …… 208
24話 …… 219
25話 …… 230

1話

チャリンチャリンという入店音が響く
この音を聴くと仕事が終わったと感じられて心地がいい
「マスター、ツインテールのフライとメトロンサンライズをお願い出来るか？」
「了解。今回はどこに行っていたんだい？」
そう言うと念力を使い、器用に酒を作り注文した酒をカウンターに置いた
「Y星付近のデビルスプリンター怪獣の駆除」
「本来の目的はなんだ？」
「デビルスプリンターの採取と宇宙ケシの密輸、あとは一部の宇宙人の暗殺」
「なるほどねぇ。そういえば僕から依頼があるんだけどいいかな？」
「仕事終わって早々依頼ですか…。」
「それに関しては本当に申し訳ないんだけどその分報酬は弾ませてもらうからさぁ」
マスターはいつの間にか作り終えられた料理をカウンターに置き、独特な形状の手を合わせお願いしてくる
「とりあえず話だけ聞きますよ」

「君には地球に行ってもらいたいんだ」
「地球…ですか…」
　地球…俺の生まれ故郷であり、いい思い出があまりない土地だ
　しかし、マスターが言っている地球というはおそらく俺の生まれた地球ではないのであろう
「おや？地球はお気に召さないのかな？かなりの侵略者が手に入れようとするほど環境の良い星なのに」
「あまりいい思い出がないだけですよ。話を続けてください」
「その地球にとある寄生生命体が侵入する可能性があってねぇ」
「寄生生命体…」
　寄生生命体と言えば俺が最後に見たウルトラ作品にチュレーザとかいう懐古厨みたいなやつが出てきた記憶がある
　この姿になって数百年経つ為記憶は少々不安だが一応あれの効果もあるし合ってはいるだろう
　ということはルーブの宇宙に飛ばされるのだろうか？
「セレブロっていうやつなんだが、知的生命体の存在する惑星の対怪獣兵器のレベルを上げさせて、最終的に自らがその兵器を使って文明を破壊し、見かけ上その惑星の住人

が自滅したかのように見せかけるっていう行為を繰り返しているらしい」
「胸糞悪いやつですね」
俺の記憶にそんなやつは存在していない
ついに俺の記憶にある原作より後の作品になってしまったか…
「いくつかの宇宙人連盟や組織なんかもこいつの始末に躍起になっている。しかし、住人に寄生しているため見つけづらい上に下手な手の出し方をすれば光の勢力に目を付けられる。そこで知的生命体の存在する惑星に雇った星人を監視させる手段をとることにした。勿論その惑星での戸籍や住居、金銭などについては用意してあるし、可能な限り必要なものも準備しよう。それに前に君が欲しがっていた巨大モルフォ蝶も生息している。行ってくれないか?」
「わかりました。ただし、いくつか用意してもらいたい怪獣と道具がありますのでよろしく」
「わかった用意しよう。ちなみに欲しい物資は何だい?できる限りは用意するが」
「宇宙同化獣ガディバ、縮小光線銃、宇宙植物ルグスの花粉あたりですかね。できれば光の国の固形の命とライザーも欲しいところですがそれは聞き流してもらって大丈夫です」
俺がそう言うとマスターは少し考えるような姿勢をとって言葉を紡いだ

「最近はデビルスプリンター騒動や謎の勢力からの襲撃で警備が手薄なようだから用意できなくはないと思うけどこちらもリスクは負いたくないものでねぇ。ルグスと縮小光線銃はすぐに用意できるんだが、ガディバは少々時間がかかりそうだ」
　謎の勢力?またしても聞きなれないワードだ
「わかりました。用意できましたら連絡ください。ところで謎の勢力とやらは?」
「ウルトラの星近辺の惑星や外交先にかなり強力な怪獣が転送されてるらしい。しかも別宇宙から」
　またしても知らない情報だ。原作の情報を知らない以上は警戒する必要がありそうだ
「犯人は判明しているんですか?」
「この件はまだ調査中でねぇ。しかも出てくる怪獣が軒並み強力で、なおかつ腕の立つ者はセレブロの件に向かってもらっているから情報が入りづらいんだよ」
　これ以上は聞いても何も得られなさそうだ
「わかりました。警戒しておきます。今日は失礼します」
　金貨をカウンターに置き店を後にする。
　それからひと月ほどが経ち、物資を受け取って俺は地球に向かう
　丁度いいことに地球にかなり接近すると思われる彗星を発見しそれに乗って地球に

向かうことにした
「流石に氷でできているだけあって寒いな。ん?」
腕を擦りながら周囲を見渡すと氷塊の上に６０㎝程の卵が置かれていた
「彗星に卵…。なるほどねぇ、地球の軍事力を図りつつセレブロをあぶりだすには丁度いい土産になりそうだ」
手をかざしてエネルギーを送ると、卵は光を放ち、点滅を始めた
「どうせ何もしなくてもそのうち孵化するんだ。誰も気づくまい」
生命エネルギーが一気に増幅した卵にはひびが入り、中からは光があふれ出し巨大な怪獣の姿を現した
「彗星怪獣ドラコ…。生で見るのは初めてだな。彗星が地球に接近するまであと数時間。そのタイミングで地球に降りるぞ」
俺がそう言うと返事をするように咆哮をあげた

2話

彗星は巨大な尾をひき地球へと接近していった
「そろそろかねぇ、ドラコ地球に降りるぞ」
俺がドラコの背中に飛び乗ると、昆虫のような美しい羽根を広げ、大気圏へと突入した
「文明レベルは俺の住んでいた場所とあまり変わっていないようだな…。暴れさせても被害の少なそうな場所はないものか…」
降りる場所を探していると奇妙な物体を発見した
「あれはセブンガー?」
なんとセブンガーと思しきロボットががれきの撤去作業を行っていた
「あれはウルトラの星の兵器のはず、なぜここでがれきの撤去作業なんかしているんだ?まあいい。あの状態ならば周囲への被害も少なそうだ。ドラコ、標的はあそこだ。俺が飛び降りたらあそこに向かって暴れてこい」
俺は同化したネロンガの力を起動し、透明化したのちにドラコから降りた
するとドラコはセブンガーに向かって急降下し、その鋭い鎌状の腕で攻撃を始めた

「さてと、ここからは高みの見物だな。あれがここの地球の兵器ならばこの戦いで力がある程度図れるだろう」
俺は近くのビルの頂上に降りると透明化を解除し、戦闘を見ることにした
セブンガーはドラコの不意打ちによって倒れたが、すぐに体制を起こし、独特な機械音とともにタックルを仕掛ける
その攻撃により倒されたドラコの上にセブンガーが乗り、その頑丈な鉄拳により攻撃を仕掛けた
ドラコはかなりのダメージを負ったようだ
「意外とやるねえ。でもドラコの武器は腕だけじゃない」
グロッキー状態になったかと思われたドラコは口から火炎弾を吐き、馬乗り状態から脱出
その後上空へと飛び上がると数発の火炎弾をセブンガーへと放ち、それによりセブンガーは動かなくなった
「この程度の力ってことは光の国の兵器ではなさそうだな。とりあえずドラコの回収にいくか」
俺が回収へ向かおうとしたとき、突然ドラコの目の前に光の巨人が現れた
「ウルトラマン…。この星にもいやがるのか…」

青と赤が主体の光の巨人。その頭部には宇宙ブーメランがついている
「ゼロに似ているな…。ライザーを使っているのか?」
ゼロに酷似したウルトラマンは宇宙拳法を駆使し、連続の回し蹴りでドラコを追い詰める
ドラコはその攻撃をさばくのに精一杯のようだ
「強力な攻撃だが動きが単調だな、他のウルトラマンの力で実力を補っているのか?」
しばらくウルトラマンのラッシュが続くとドラコはさばくのに慣れてきたようで隙をみて火炎弾反撃を開始した
連続の火炎弾による攻撃でウルトラマンはたじろぐ
ドラコは宇宙怪獣の中では強くはない
あの力を持ちながら苦戦をしているということはやはり新人なのだろうか
「様子をみて参戦するか?うまくいけば光の国のアイテムを奪うことができる」
暫くするとウルトラマンの体が光始め、全身赤色の姿に変わった
「タイプチェンジか。趣味の悪い姿だ」
その真っ赤な姿はレッド星出身の赤い通り魔を髣髴とさせる
ウルトラマンは雄たけびを上げるとドラコにドロップキックをかまし、掴みかかる
そして、羽に手をかけたかと思うとそれをむしり取った

「マジでレッドマンじゃねえか…。ドラコが不憫に思えてきたぞ…」
むしり取った羽を掲げたのちに投げ捨て、今度はタックルをしてくる
ドラコは完全にグロッキー状態になっていた
「しゃあない、助けてやるか。ガディバ、俺が奴を引き付けるからお前はドラコの本体と羽を取り込んで回収しろ」
手のひらから現れたガス状のヘビのような姿をしたガディバは俺の話を聞き頷いた
「じゃあ行くぞ」
全身の生命エネルギーを増幅させ巨大化
同化したエレキングの力を使い、戦いに臨む
「エレキングカッター!!」
三日月状の波状光線をウルトラマンに浴びせる
こちらに気が付いたウルトラマンは腕を十字にクロスして光線を放つ
バリアで攻撃を防ぎながらウルトラマンへ接近する
どんどん光線の勢いがなくなっていき、完全に止まった
するとウルトラマンの胸部の結晶が赤く点滅を始める
「満身創痍なようだなぁ、ここでプレゼントをくれてやるよ」
俺はウルトラマンの頭を掴み放電をした

暫くもがいていたがいずれ動きが止まり、放電をやめた
「さてと、そろそろ変身が解除されるころだろう。とどめだ」
俺はエネルギーを腕に集中させ、赤黒いオーラをまとわせた
「ガイスティウム光線‼」
光線を放とうとしたその時どこからともなく槍のようなものが現れ、肩にぶつかってきた
それにより照準がずれた光線は空へと放たれ不発に終わる
その後槍は何とか起き上がったウルトラマンの手のもとに収まり、先端部分に炎をまとった
そして空中にZの文字を描きこちらに飛ばしてきた
「やっべ」
とっさに球状のバリアを張ったが失敗だった
面積の広いバリアは耐久性が弱く、威力の高い炎の攻撃によって割れてしまった
バリアである程度緩和したとはいえかなりのダメージを食らってしまったがなんとか耐えた
その姿に驚いたしぐさを見せたウルトラマンは力なく光の粒子となって消えた

3話

「ようやく堕ちたか。ガディバ、回収は終わったか？戻ってこい」
ドラコのいた方を向くと、そこにはドラコの姿はなく、ガディバがふよふよと浮いていた
俺の声を聴いたガディバはこちらに向かってきた
「とりあえず巨大化を解除するか」
体を小さくするように念じると見る見るうちに縮小していき、元の姿に戻った
「変身者を探すか…」
がれきの中を歩いて3分ほどでそれらしき人物を見つけた
つなぎ姿の青年が地面に倒れ伏していた
手には変身アイテムと思しき機械が握りしめられている
「悪いな、それちょっと借りるぞ」
俺が変身アイテムを奪いとると青年はかすれたこえで囁いた
「返せ…ゼットライザーを返せ…」
「もちろん返すよ。その前にこいつのデータを取らせてもらう。ガディバ」

ガディバはゼットライザーに入り込みデータの解析に入った、構造、特性、すべてをコピーし、ゼットライザーの中から戻ってきた
「なるほど。ウルトラマンの力の込められたメダルを三つ読み込むことでその性質を反映させ、力の増強や補填を行っているわけか。カプセルのように戦況を大きく覆す能力はなさそうだな」
おそらく実力の足りていないウルトラマンの力の補填をおこなって人員を増加させたり、既存の戦士の増強に使われるのだろう
量産されているのか、はたまた試作品なのかはわからないが、固形の命といい光の国というのはとんでもない科学力を持っているようだ
「こいつは返すよ」
俺が青年の手の近くにゼットライザーを置くと、青年が声をかけてきた
「待て…。お前はいったい何者だ…。何が目的なんだ…」
「俺の名前はガイスト。宇宙でいわゆる何でも屋ってやつをやってる。この地球にはとある依頼で来た。君たちに危害を加える気はない」
「じゃあなんで街に現れた…。怪獣も暴れさせていただろ！」
「君たちの防衛能力を確かめたかったんだよ。わざわざ人のいない場所を選んでね。まさかウルトラマンまで現れるとは思わなかったがね」

「ふざげるな！ここはお前の実験場じゃない！この星から出ていけ！」
「おいおい、大怪我してるくせに威勢がいいなwどうせそのうち協力することになるんだ。仲良くしようぜ」
「ふざけるな！」
　青年がそう叫ぶと、まるで電池が切れたかのように意識を失いしゃべらなくなった
「治しといてやるか」
　俺は青年に手をかざし、エネルギーを送り込む
　すると見る見るうちに傷や打撲跡などがなくなっていく
「他人に対しては初めてやったが案外うまくいくものだな」
　青年の傷を治し、俺はその場を去った
「とりあえず、マスターに指定されたアパートに向かうか」
　指定された場所へと歩みを進めると、呻き声のような奇怪な音とともに物陰から赤黒い三日月型の斬撃が飛んできた
　とっさにバックステップで回避すると、背後から日本刀と首筋に当てられた
「よう。確かガイストとか言ったっけな？」
「名前を知っていていただけるなんて光栄ですね。ジャグラスジャグラーさん」
　ジャグラスジャグラー…

かつてＯ５０に挑み、光に選ばれず、闇に魅入られた者
劇場版のジードに登場したのを最後に本編では姿を見せていなかったはずだがどうしてここに…
「てめえの目的はなんだ?返答次第ではここでたたき切ってやる」
緑色の眼を光らせ刀を押し付けてくる
「酒場で依頼されたんだ。こちらの宇宙に来ていると思われる生命体の抹殺を。別にあんたに害を及ぼすわけでもない。依頼が完了すればおとなしく帰る」
俺がそう言うと、暫くこちらを睨んだのちに刀を下した
「わかった。今日のところは見逃しておいてやる。だが、これ以上俺の縄張りを荒らすようなら容赦はしねぇ」
そう言うと魔人態を解除し俺の進行方向とは反対側へと歩いて行った
「さっきの青年と同じつなぎ…。縄張りというのはそういうことか。これ以上は防衛隊へのちょっかいはやめておいた方がよさそうだ」
俺はその場を後にした

4話

「アチいな」
鬱蒼と茂る草をかぎ分ける
ここは南米のアマゾン
湿度と気温がとにかく高く蒸し焼きになりそうだ
「どこだ？巨大モルフォ蝶は」
俺は巨大モルフォ蝶を探していた
巨大モルフォ蝶はウルトラQで登場した翼蝶が２ｍほどもある昆虫怪獣だ
その翼の鱗粉には生物を巨大化させる因子を含んでいる
「あれだけでかいんだからすぐに見つかると思ったんだがなぁ」
ジャングルの奥地に入って約５時間、いまだに蝶を見つけることはできていなかった
少し休憩をするかと考えていたその時、奥の方から悲鳴とパァンという銃声が響いた
「なんだ？」
ぬかるんだ土を踏みしめ、音のなった方へと向かう
すると少し開けたところに銃を握りしめた男性と巨大な黒猫が倒れていた

お互いに血を流していて、男はすでに息がなかった
恐る恐る巨大な黒猫へと近づき、体に触れるとビクンと黒猫の体が震えた
どうやらまだ息があるようだ
「この近くに巨大モルフォ蝶がいるようだな」
俺はリュックからミクロ化機を取り出し猫に照射する
すると見る見るうちに小さくなっていって元の大きさになった
「おとなしくしててくれよ」
俺は念力を使い、傷口が開かないように銃弾を取り出した
何か所も撃たれていたようで、とにかく慎重にすべての弾丸を摘出した
その後、自身の生命エネルギーを送り込み、治療をした
みるみるうちに傷口がふさがってゆく
「よし、終わったな」
治療が完了した
猫は自分を助けたのが俺だとわかっているようで足にすり寄ってきた
「かわいいもんだな。ちょっと頭をのぞかせてもらうぞ」
俺は猫の頭に手を置き記憶を読み取った
どうやらここよりもさらに奥に行くと、花畑があるようで、そこに巨大モルフォ蝶が

生息しているようだ
「ありがとな」
俺が立ち上がり、花畑の方へと向かおうとすると猫が進行方向へと駆け出し、こちらへと振り向いた
ついてこいと言っているようだ
「じゃあ道案内頼むぞ」
猫に導かれて1時間ほど経っただろうか
花畑に到着した
そこには色とりどりの花々が咲き乱れており、その上空を無数の巨大モルフォ蝶が飛んでいた
「すげえな」
俺はその美しい光景に息をのんだ
その光景を少し楽しみ怪人態へと変身する
「悪いが採取させてもらう」
俺は土を蹴り、人知を超えるスピードで蝶へと飛びかかる
俺に気が付いた蝶は必死に逃げようとするが遅かった
ミクロ化機を取り出し動きを止め、縮小させ、カラス状の容器に入れた

「とりあえず目的は達成したな。帰るか」
　来た道に戻ろうと振り返るとまだ猫がそこにいた
「どうした?帰らないのか?」
　猫に問いかけるも、俺のもとから離れない
「しかたない」
　俺は猫を抱き上げて言った
「いつ死ねかもわからない。それでもついてくるか?」
　猫がうなづいた気がした
　はたから見ればひどい一人芝居に見えるかもしれないが俺はそれを了承したと解釈し、連れて帰ることにした
「ちょっと狭いが我慢してくれよ」
　俺はミクロ化機を使い、蝶と同じ要領でガラス容器へと猫を入れた
「あのアパート動物大丈夫だったかな…。まあ何とかなるか」
　俺は再度怪人態へと変身して巨大化する
「とっとと帰りたいしあれを使うか」
　かつて同化した怪獣の能力を体に反映させる
　すると体は赤と青を基調とした色合いへと変化し、両肩にパルス孔ができた

「宇宙有翼怪獣アリゲラ、力を借りるぞ」
俺は空中へと飛び上がり、高速で日本へと向かった
「やっぱ速いな、アリゲラは」
アリゲラは戦闘機を凌駕するほどの飛行速度を誇り、耐久力こそないもののなかなかの戦闘能力を誇る
暫く飛び続けると日本列島が見えてきた
「そろそろ解除して見つからないように降りるか」
そう思っていた時、激しい振動をパルス孔がキャッチした
「なんだ?結構な衝撃破だったぞ」
アリゲラは超音波を感知する能力にたけている
こういった振動などを感知するにはもってこいの能力だ
「ここまでとなると結構レベルの高い怪獣の可能性もあり得るな。こないだのウルトラマンが戦闘しているのか?」
振動の中心点へと向かった
アリゲラのおかげで大して時間はかからない
「あれはギルバリス!?ジードが倒したはずなのにどうして…」
そこには巨大人工頭脳ギルバリスとその強さに翻弄されるセブンガーとウィンダム

の姿があった
「やべえな。俺も参戦してやるか」
その時セブンガーがギルバリスによりハッキングされ、テントの方へと腕を射出した
「あぶねぇ‼」
とっさにテントにシールドを張ることで事なきを得た
「ロボットだとあいつ相手には相当相性が悪いようだな。正直勝てる気はしないがやるしかねぇな」
「オラァ」
パルス孔から電磁気光線をギルバリスにお見舞いし、こちらに注意を向かせた
思ったよりも攻撃が通っていない
ギルバリスはこちらを向き、エネルギーを溜め、胸部から光線を放った
「やべぇ。ガイスティウム光線‼」
俺もすぐさま光線を放つ
光線はぶつかり合い、暫く拮抗したがギルバリスの方が押し勝っている
「完全に押し負けているな…まずい」
パルス孔からの攻撃もおこなって何とか相殺しようとするもかなわず、ギルバリスの光線により吹き飛ばされてしまった

再度エネルギーを溜め光線が放たれようとしたその時だった
上空から強い生命エネルギーを放たれ、紫色の光とともに青い吊り上がった目のウルトラマンが現れた
全身が鎧で纏われたような姿をしている
「ウルトラマン…ジード…」
ジードはギルバリスに向かって飛び掛かり攻撃を開始する
それに対してギルバリスは掴みかかり動きを封じようとした
しかし、すぐに振りほどかれる
ジードは腕にエネルギーを纏わせギルバリスを何度も切りつけた
するとギルバリスは全身の砲門から無数の砲撃を発射した
「シールド」
俺は力を振り絞り周囲への影響を抑えるためにシールドを張った
なんとかテントへの被害は防げたようだ
するとギルバリスとジードは互いにエネルギーを溜め、光線の打ち合いになった
ジードの光線はギルバリスの光線を上回り、ギルバリスを破壊することに成功した
「とんでもねえ強さだな」
煙が晴れるとギルバリスのコアが現れ、上空へと逃亡していく

コアを破壊しない限りギルバリスは復活する
ジードはそれを追いかけるために飛び上がっていく
「俺も追いかけるか」
少し体が癒え、動けるようになっていたため、飛び上がり俺はジードを追いかけた

5話

「チッ、思ったより速い」
ギルバリスのコアは想像を超えるスピードで逃走を続ける
ジードは活動限界が近づき、タイマーがなり始めている
俺も先ほどの戦闘の影響で正直体が悲鳴を上げている
その時だったコアは急加速し、消えてしまった
「見逃しちまったか…」
俺は体のサイズを等身大に戻し、裏路地へと降りた
ジードも変身を解除したようだ
「ペガ…ペガ!やっぱり応答はなしかぁ…。早くあいつを見つけないとなのに…」
変身を解除した朝倉リクは仲間への連絡を試みるが返事が返ってこないようだ
俺は物陰から様子を見ているとリクの背後につなぎ姿の男が現れ、肩に顎を乗せた
「久しぶりィ」
ジャグラーだ
「ジャ…ジャグラーさん⁉どうしてこの地球に?」

ジャグラーは朝倉リクから変身器具を奪いとる
「へ～、お前さんもZライザー使えるのか」
あの器具はZライザーというようだ
俺もあの話に入るべきだろうか？
正直ギルバリスは俺にも新人ウルトラマンにも対処できない
上手く協力関係を築ければギルバリスを倒し、あわよくば同化できるかもしれない
「よし」
意を決して俺は物陰から現れた
「俺も混ぜてくれないか？」
朝倉リクはジャグラーからZライザーを奪い返すとこちらを向いた
「あなたは誰ですか？」
「奴の名はガイスト。とある依頼でこの地球に来ているらしい。さっきギルバリスにやられてたやつだよ」
「先ほどはギルバリスを撃退してくれてありがとう。足掻いたつもりだが俺には手も足も出なかった」
「ジャグラーさん、この人信用しても大丈夫なんですか？」
「少なくとも敵対の意思はないようだ。それにさっきの戦闘を見ただろうがギルバリス

でそれどころではないんだろう」
「なるほど、わかりました。じゃあ話していきますね」
「なぁ、ギルバリス復活の裏にあるのはやはり…」
「はい…、デビルスプリンターで復活したギルバリスは再び知的生命体を排除するために行動を始めました」
　話を要約すると惑星アインでの戦闘でライザーが破損、ヒカリから届けられたZライザーで再度戦闘を開始
　今回のようにコアに逃げられ続けているうちに仲間とはぐれ、地球にたどり着いたようだ
「で、俺と感動の再開ってわけだ」
「コアを破壊しない限り、やつは何度でも蘇ります」
「やつ相手じゃ俺たちストレイジはお手上げだな」
「俺たちストレイジ？」
「俺、この地球の防衛軍のロボット部隊、ストレイジの体調だったりするんだよなぁ。似合うだろ？」
　背中の「ＳＴＲＡＧＥ」を指差してそう言った
「さっきは俺の部下を守ってくれて感謝するぜガイスト。あのバリアがなければ最悪死

傷者がでていた」
「なんで隊長やってるんですか?」
「正義に目覚めたって言ったら信じるか?」
怪しい笑みを浮かべながらそう言うとジャグラーは去っていった
正直朝倉リクからしてみればジャグラーは沖縄でともにギルバリスを倒した仲間だと思っているだろう
だが、俺には何かを企んでいるようにしか見えない
底知れない闇の波動をあいつからは感じるからだ
「ええっと」
「とりあえずいったん解散するか。ギルバリスは各々で探し破壊。それができず、実体化するようであれば協力して討伐ってことで。俺が戦力になるかはわからないができることはやる」
「わかりました。それでは」
そういって朝倉リクは去っていった
「とりあえず回復するか…」
俺は小さな時空の裂け目を作りそこに手をいれ、ボトルを取り出した
ガラスのボトルに入った液体は琥珀色にきらめいている

それに口をつけ、飲むと非常に独特な味わいが口へと広がり、体の疲労感や傷が徐々に消えていった
「やっぱりマンダリンの治癒効果は偉大だな」
俺は口についた液体を手で拭い、ギルバリスの捜索を開始した
「見つからねぇな…」
ギルバリスをやみくもに探していると上空に巨大なロボットがいた
「ウィンダム…、ストレイジのロボがいるってことは近くにいるのか?」
俺は怪人態へと姿を変える
「機械生命体相手だからなぁ、どいつで行くべきか…、エレキングか…?」
どの怪獣の力を使用するか悩んでいると近くの建物からコアが現れ、それをウィンダムが捕まえていた
捕まえられたコアはすぐさま形を形成し、ウィンダムと戦闘を開始した
「よし、レッドキングにしよう。レッドキング、お前の力借りさせてもらうぞ」
以前に同化したレッドキングの力を身にまとう
体は固いうろこに覆われ、体全体の筋肉が盛り上がる
「よし行くか!」
俺は巨大化し、ギルバリスを思い切り殴りつける

ギルバリスは大きくのけぞる
ウィンダムもそれに続き蹴りやチョップを繰り返す
しかし、ギルバリスの装甲ではウィンダム程度の火力にはびくともせず、逆に弾き飛ばされる
俺はギルバリスを羽交い絞めしようとするがほどかれ、無数の砲撃で吹き飛ばされてしまった
「イッテェ‼あっまずい‼」
弾き飛ばされたウィンダムにギルバリスが迫る
今にも無数の砲門から砲撃を開始しようとしていた
「クソが‼」
俺はすぐさま起き上がり、地面を蹴った
すると突然目の前に白い魔方陣が現れ、ギャラクトロンｍｋ２が現れた
「足止めする気か⁉」
ギャラクトロンｍｋ２は右手の指先からビームを放出する
俺は何とかバリアを展開し、攻撃を防いだ
ウィンダムの方を見るとどうやら２人のウルトラマンがなんとか守ったようだ
「こっちは俺が片付ける。お前らはギルバリスをやってくれ‼」

「わかりました」
ジードがうなづきながら反応した
Ｚの方は状況が理解できていない様子だったが二人でギルバリスへ攻撃を開始したようだ
「俺はこいつとの戦いに集中するか…」
ギャラクトロンｍｋ２はコーラスのような鳴き声を発すると背中からギャラクトロンベイルを切り離し、手持ち武器として装備した
「単純にリーチの差が生まれるのはめんどいな」
俺はレッドキングの力を解除した
「レイキュバス、頼んだぞ」
宇宙怪獣レイキュバスの力を身にまとう
体が赤くかたい鎧のような姿に変化し、指先がかぎ爪のように鋭くとがり、瞳が青くなった
俺はすぐさま冷気を使い氷の刀を生成する
「これでリーチは互角だ。行くぞ」
ギャラクトロンとの戦闘が開始する
互いに斧と刀を打ち付け合い、隙を見ては光線を撃ちあう

「レイキュバスの力を使っているとはいえ、思ったよりも戦えているな」
ギャラクトロンｍｋ２はジード、オーブ、ゼロを相手にし互角かそれ以上の力を発揮していた過去がある
もしかすると復活の過程でかなり弱体化しているのかもしれない
「だとしたらいける」
俺はいったんギャラクトロンから距離をとった
「一気に決める‼いけぇ‼」
冷却ガスを一気に吹き付ける
魔方陣状のシールドを前方に張るが、あらゆる方向から吹き付けるガスを防ぎきれず、下半身が凍り付いて動きが止まった
「ガイスティウム光線‼」
俺は光線を放ちながらギャラクトロンに一気に詰め寄る
ギャラクトロンと俺との距離はゼロになり、ゼロ距離で光線を浴びせ続けた
固い装甲を持つギャラクトロンといえどもゼロ距離でこれだけの威力の光線を浴び続ければひとたまりもない
装甲にひびが入り始め、光線が完全に貫通したのと同時にギャラクトロンの活動は完全に停止した

「ほとんど完全な状態で倒せたことを喜ぶべきか、はたまた全力を出しても完全に破壊できないことを悲しむべきか…」
俺はギャラクトロンｍｋ２の残骸に手を触れる
すると、その体は粒子状になっていき俺の体に吸収された
完全に体になじむまでに時間はかかるがこれで同化は完了だ
「さて、向こうはどうなってるかな?」
俺がギルバリスの方を向くと、ジードの必殺技で半壊したギルバリスにＺがとどめを刺しているところだった
Ｚランスファイヤーを撃ち込まれたギルバリスはコアもろとも爆発四散した
「こりゃあギルバリスとの同化は無理だな。まあ思わぬ収穫もあったし結果オーライか」
Ｚとジードは飛び上がり姿を消した
「俺も帰るか…」
サイズを戻し、人間態へと姿を戻す
「うちに帰ったらマンダリンジュースをあいつに分けてやるか。ん?猫にマンダリン草って大丈夫なのか…?」
俺は猫缶を土産に帰路につくことにした

6話

「買い物にでも行くかな」
　ギルバリス騒動から数日が経った
　疲労感も完全に消え、街も平和そのものだった
「そういえばこの猫に名前をつけていなかったな」
　俺は黒く、艶のある体毛を撫でた
　不意にウルトラマンの懐古厨野郎の存在を思い出し、名前を思いついた
「お前の名前はノワールだ」
　頭をひと撫ぜすると了承するかのように鳴いた
「じゃあ買い物に行ってくるからこの空間でおとなしくしててくれよ」
　俺は次元の歪を作り、そこにノワールを入れた
「よし、行くか」
　今日はかなりの猛暑日だ
　ジリジリとした日差しが差し込み、アスファルトでは陽炎が起こり空間が行かんで見える

「アチいな…。バレないようにレイキュバスの力を使うか…？」
そんなことを考えていた矢先、どこかから悲鳴が聞こえてきた
「なんだ？」
俺は悲鳴の聞こえた方向へと走った
そこは小さな公園だった
中をのぞくとクソ暑いというのに黒いスーツを着た男性が女の子に掴みかかっていた
俺はその男に見覚えがあった
「何をやっているんだ、イカルス星人ムスカリ」
「よぉガイストじゃねえか‼ダダ星からのご依頼でよぉ、地球人の幼児を集めるように言われてんだ。お前も手伝え」
彼は女の子に手を当て気絶させた
「てっきりお前がロリコンに目覚めたとかと思っちまったぜ。残念だがその誘いは断らせてもらう。あいにく別の依頼でこの星の文明に手を出さないように言われててね」
「そりゃあ残念だ。じゃあ俺はとんずらさせてもらうぜ」
「待て。そいつを置いてけ。この星での宇宙人に対するあたりが強くなると俺に支障がでる」

「そいつはできねえ約束だな」
「じゃあ戦闘で決着をつけようじゃないか」
　俺は怪人態へと姿を変える
「望むところだ」
　彼も本来の姿であるイカルス星人へと姿を変えた
「オラァ!!」
　先に仕掛けたのはムスカリだった
　ムスカリは走ってこちらにその青い腕で殴り掛かってきた
　それを左腕でガードし、右腕でみぞおちを狙う
　しかしそれを読んだムスカリは俺の足を払い体勢を崩し一度距離をとった
「やるねぇ」
「そっちもな」
　ムスカリの言葉に俺は返した
　近接戦に関してはオリジナルの状態だとかなり拮抗している
　だが怪獣の力を使うには一瞬の隙が生まれる
　ムスカリはそれを逃さないだろう
　さて、どうやって倒すか…

「これで終わらせてやるよ」
ムスカリは全身から無数の白い針のような光線を出した
アロー光線だ
俺は周りへの被害を抑えるために大きめにバリアを張る
しかし数本の光線がバリアを外れ、公園の樹木に当たる
樹木はたちまち灰へと変わってしまった
「周囲を気にするなんて正義の味方のつもりかぁ？なら好都合だ。こうすりゃいいんだからよぉ!!」
ムスカリの全身が白く光る
「全方向に放射するつもりか!?」
「さあ今回はどう対応する？喰らえ！」
ムスカリはアロー光線を放射した
俺は咄嗟にムスカリの周りに半休状のバリアを張った
ムスカリはバリアを割るために光線の威力を上げる
「チェックメイトだ」
バリアを割ることに集中しているうちにギャラクトロンｍｋ２の力を纏う
身体が白い鎧が構成される

「喰らえ!!」
　俺はヒビの入り始めたバリア内に複数の魔法陣を展開し光線を放った
「カ”イ”ス”ト”オ”オ”オ”オ”オ”」
　ムスカリの断末魔が聞こえ数秒後に聞こえなくなった
　俺がバリアを解くとアロー光線によって焦げた地面に蜂の巣のように穴の空いたムスカリが倒れていた
「ガディバ、回収しろ」
　手のひらからガディバを召喚し、ムスカリと同化させた
「さて、この娘をどうするか…」
　地面に倒れている女の子を抱き上げ、土をはらう
　そしてベンチに寝かせた
「流石に放置は出来ねぇよな…」
　俺は女の子の横に座った
　しばらくすると1人の青年が公園に入ってきた
「アオイ?そろそろ帰るぞぉ」
「この子のお兄さんですか?転んで泣いていたのでベンチであやしていたらそのまま寝てしまいまして…」

「そうでしたか。ありがとうございます」
青年と会話をしていると機械を持ったストレイジのつなぎを着た女性が入ってきた
以前に出会った宇宙人によく似ている
「あれ？クゼ君じゃん久しぶり‼何してるの？」
「久しぶりオオタさん。妹を迎えに来てたんだよ。そっちこそ何をしてるの？」
「この付近でエイリアン出現の反応があって調査してたところ。そういえばそちらの方は？」
「あぁ、妹の面倒を見てくれてたんだ」
「へえ。ところで宇宙人見なかった？見たなら情報提供してほしい」
「見れるものなら見てみたかったなぁ。少なくとも僕がここに来たときはいなかったよ」
「なるほど…。そちらの方は見られました？」
正直に話すべきだろうか？
ここでストレイジとやらと協力関係を築くことができればいち早く様々な情報が手に入る
しかし、あそこにはジャグラスジャグラーがいる
それに下手に監視下に置かれれば自由な行動ができなくなってしまう

ここはごまかすべきだろう
「申し訳ないが俺は見てない」
「そうですか…。あれ？地面が焦げてる？」
しまった
戦闘後の後始末をやるのを完全に忘れていた
オオタは焦げている箇所で機械で何かを調べ、クゼはその横でまじまじと見ていた
「仕方ない…。ガディバ」
小声でガディバを召喚する
「ムスカリに変身しろ…。あの女をうまくまいて、元の姿に戻って帰ってこい…」
「了解」
ガディバはムスカリと同化したことによって得た声帯で返事をし、物陰に隠れた
そしてイカルス星人の姿に変身して物陰から現れた
「あっ‼イカルス星人だ‼とっ捕まえて解剖しなきゃ‼じゃあねクゼ君‼」
オオタは逃げるイカルス星人のもとへ走っていった
「じゃあ僕もこれで。ありがとうございました」
クゼは女の子を負ぶって公園を出ていった
「大丈夫かなガディバ…」

オオタは目をきらめかせながらかなり物騒なことをつぶやいていた
自分の正体をさらさなかった過去の自分をほめてやりたい
二十分ほど待つとガディバが帰ってきた
「お疲れ。戻っていいぞ」
「もうこんな役回りはごめんだね。あの女怖すぎる…」
ガディバはそう呟いて俺の手のひらに消えていった
「とりあえず買い物にいくか…」
俺は近所のスーパーへと足を進めた

7話

「たまには散歩するのもいいものだな。なあノワール?」
ノワールはこちらの問いかけに答えるかのように鳴いた
もしかすると巨大モルフォ蝶の鱗粉には脳を活性化させる効果があるのだろうか?
なんてことを考えながら河川敷を一緒に歩いているとノワールが突然止まり、上空を見て鳴き始めた
「どうした?」
俺はノワールが見ていた方を見上げる
赤色と青色の光が地上に向かって落ちている
しばらく観察していると、青色の光は遥か彼方へ、赤色の光は近くの山へと落ちていった
「行ってみるか」
俺は時空の裂け目を生み出しそこにノワールを入れた
そして怪人態へと変身する
「ネロンガよ…お前の力使わせてもらうぞ」

俺はネロンガの力を纏う
額から角が形成され背中には黄色い突起物が出現する
そして透明化能力を使って全力で走り出した
山は人によって整備されているようで綺麗だった
「少し焦げ臭いな」
俺は焦げ臭い匂いを辿っていった
するとそこには３ｍ程のクレーターがあった
その中央には赤くボコボコとした直径３０センチ程の隕石が埋まっている
俺はこの隕石に見覚えがあった
「これは…ブルトン!?」
四次元怪獣ブルトン
フジツボやボウフラのようななんとも言えない見た目をしているが、その能力は計り知れない
体表の孔から出てくる四次元繊毛を用いて、我々の想像をはるかに超える四次元現象を起こす
いわゆるチート怪獣だ
「何故ここに降ってきたのかは分からないがどうかするまたとないチャンスだ」

俺は自力で別宇宙への移動ができない
これまではスターゲートを用いて移動していた
同化の能力は反動を極限まで抑えるために怪獣本来の力がセーブされるため、ブルトンの力を全て使うことは出来ないだろうが、スターゲートくらいなら開けることが出来るだろう
「そうと決まれば青色の方も回収しなくちゃな」
俺は赤色の隕石をガラス容器にしまい、先程青色の光が落ちた場所へと向かった
前回と同様に匂いを辿って隕石を探すとクレーター付近に3人の人影が見える
「なんだ?」
目を凝らして見ると両脇にはバリスレイダーがおり、その真ん中には防護服を着た人間が青色の隕石を持って笑っている
「キエテカレカレータ」
男がつぶやく
俺はそこへと足を進めた
俺が来たことで2体のバリスレイダーが戦闘体勢に入る
「お前が何者かわからんがそいつを譲ってくれないか?」
俺がそう言うと男は狂ったように笑いだした

男からは微弱だが宇宙生物の反応が感じられる
だがベースは人間だ
こいつがセレブロの可能性は高いが人間に危害は加えられない
厄介だ
「鴨が葱をしょってやって来たようだ。やれバリスレイダー！」
2体のバリスレイダーが俺に襲いかかる
しかし戦闘能力は低く、一体は男の方へと投げ飛ばし、もう一体は掴みかかってきたところにネロンガの電撃を浴びせて完全に再起不能にさせた
「もう何をやっても無駄だろう。さっさとその隕石を寄越せ」
俺がそういうと男はまた狂ったように笑いだした
「面白い！キエテカレカレーター！」
その笑いに俺は恐怖を感じた
一通り笑い終えると男はポケットからメダルを3枚取り出した
「これより実証実験に入る」
男はそういうと先程俺が投げ飛ばしたバリスレイダーにメダルを投げた
メダルはバリスレイダーの中に入っていく
すると身体がビクンと大きく震え、息を吹き返したかのように起き上がる

悶えるような動きをした後、バリスレイダーの動きはピタリと止まり、背中に無数の棘が生え、右腕にはモーニングスターが現れ、左腕は先端に針のようなものの付いたムチのような形状になった
「やれ」
男がそう言うと先程とは比べ物にならないスピードで飛びかかってきた
パワーも一気に上がっているようで俺は吹き飛ばされてしまう
「しまった」
吹き飛ばされた拍子に隕石の入ったガラス容器を落としてしまった
男はそれを拾い上げにやりと笑う
「返せ！そいつは俺のものだ！」
俺は男に飛びかかる
すると横からバリスレイダーが現れモーニングスターでぶん殴ってきた
俺はまた吹き飛ばされた
男の方を見ると既に姿はない
「クソが！」
俺はネロンガの姿を解除する
「こうなったら八つ当たりさせて貰うぞ」

俺はレイキュバスの力を纏う
赤色の鎧が全身に現れ瞳が赤く染まる
「オラァ」
俺は腕から炎を放射しながら走り出す
しかしバリスレイダーはそれに怯む様子もなく、モーニングスターとムチを振り回して攻撃してきた
俺はジャンプして攻撃をかわし、1度距離をとる
バリスレイダーの方を見ると先程炎で攻撃し、ダメージを受けた箇所が回復している
「ハンザギランの能力か?腕はバラバとキングクラブ?」
もし、ハンザギランであるならば弱点をつければ勝機はある
俺は再度炎で牽制し続ける
バリスレイダーには決定的なダメージは与えられない
「これで充分だな」
俺は瞳を青く変える
そして一気に冷気を浴びせると熱されたバリスレイダーに当たることで周囲が蒸気に包まれた
ハンザギランの驚異的な生命力は太陽光が当たることで起こる

それさえ遮ってしまえばどうとでもなる
俺は腕にエネルギーを溜め、十字に構える
霧が少し晴れ、俺を探すように周囲を見ているバリスレイダー見つかる
「ガイスティウム光線!」
俺は光線をバリスレイダーに叩き込んだ
ハンザギランの生命力を失ったバリスレイダーは光線に耐えられずに爆発した
「危なかった」
ふうと息を吐き、バリスレイダーの残骸に近づく
そこには予想通り、バラバ、ハンザギラン、キングクラブのメダルが散らばっていた
「前にZが使っていたウルトラメダルに酷似している。さしずめ怪獣メダルと言ったところか」
戦闘能力の低いバリスレイダーですらあれだけ強化されるのだ
強力な怪獣にこれが使われれば相当面倒なことになるだろう
「人間への寄生…、怪獣メダル…。さて、どうやって倒したものか…」
俺は3枚のメダルを拾い上げ、下山した

8話

「ブルトンを逃したのはかなりの痛手だな。おまけにそれが奴の手に渡ってしまった」
そのうち奴がブルトンを用いた何らかのアクションを起こすだろう
あの怪獣は相当厄介だ
「だが、このメダルはかなりの収穫だったな」
武装した人間でも倒せてしまうような戦闘力しかないバリスレイダーがあそこまで強くなるとは思わなかった
ガディバにZライザーのデータは読み込ませてあるからおそらく俺もこのメダルを使えるだろう
Zライザーは複数のウルトラマンや怪獣の力を安定して使うことができる
Zライザーという外部出力さえあれば同化した怪獣の力を同時に引き出すことも可能だろう
「そのうち実験が必要だな…」
セレブロへの対策やメダルの活用について考えていると廃工場から銃声が響いた
念のため怪人態に変身して近づくと、中ではストレイジの隊員がバリスレイダーとの

戦闘を行っていた
「バリスレイダーがいるってことはここはセレブロの拠点か？なら乗り込む価値はありそうだな」
　俺は乗り込んで手から出した光弾でバリスレイダーを攻撃する
　ティガスライサーをイメージして出した光弾はバリスレイダーの体を貫通し、行動不能にした
「やっぱバリスレイダーだと張り合いねぇな。とっとと片付けてブルトンを回収するか。ガディバ」
　俺が名前を呼ぶと俺の手のひらから姿を現した
「なんだい？」
「Ｚライザーに姿を変えろ。実験をしたい」
「あいよ」
　そう言うとガディバはＺライザーに姿を変えた
　トリガーを押し、インナースペースへと入る
　俺はアクセスカードをセットする
『Ｇｅｉｓｔ　ａｃｃｅｓｓ　ｇｒａｎｔｅｄ』
　俺はバラバのメダルをスリッドにセットし、スキャンさせる

『Ｂａｒａｂａ』
「なんか決め台詞みてえなの考えとくべきだったな…。まあいいか」
俺はトリガーを押す
するとバフォメットのようなまがまがしい姿へと体が変わり、腕にはモーニングスターが握られている
「同化した怪獣を纏ったときと大差はなさそうだな。とりあえずこいつらを片付けよう」
俺はモーニングサンダーを振り回し、ストレイジの連中に加勢する
「あなたは何者？」
女性隊員が銃を撃ちながら尋ねてきた
「とりあえず敵のせん滅が先だ。やるぞ」
バリスレイダーの弾丸を異次元の穴を使い、背後から出して自滅させる
「バラバの力はかなり勝手がいいな。力もあるしさすがは超獣といったところか」
バリスレイダーは俺とストレイジの協力によって次々と倒されていったが次々と現れてきりがない
ウルトラマンの器の隊員は投げ飛ばされ、女性隊員の方は球切れのようだ
俺は十数体のバリスレイダーに囲まれている

「まずいな。あっちのサポートをさせてくれねぇ」
俺が十数体をモーニングスターでまとめて蹴散らしたとき女性隊員に剣先が向けられる
間に合わないと思ったその時、後ろから二体のバリスレイダーに向かって光弾が放たれた
「Z様!!お会いできて光栄です!!」
女性隊員は起き上がるとZにお辞儀という名の頭突きをかました
「天然かよ…」
俺が小声で突っ込んでいると
「ごっごめんなさい。あぁどうしよう?天然だって誤解されちゃったら…。え?Z様小さくもなれるんですね!!」
「今更気づいたのかよ…。とにかくあいつら潰すぞ」
またバリスレイダーが複数現れる
Zと女性隊員は踊るようにバリスレイダーを撃破していく
「完全に向こうの世界に行ってやがるな。俺は最深部に向かうか…」
バリスレイダーをなぎ倒し奥へと進む
最深部を物陰から覗く

そこには拘束された朝倉リクとバリスレイダーを切り倒したジャグラスジャグラーの姿があった
ジャグラーは邪心剣で拘束を破壊し、目を覚ました朝倉リクに手を差し伸べる
二人の会話をまとめると、セレブロは朝倉リクの高純度なベリアル因子を用いてベリアルメダルを生成しようとしているようだ
普通の怪獣メダルでさえあれほどの力を引き出せるのにベリアルのものとなれば恐ろしい力となるのは目に見えている
「ベリアルの力…。なんとかして手に入れられないものか…」
そう考えているとジャグラーは人間態へと姿を変えどこかに去っていった
朝倉リクも入口へと向かう
俺は拘束器具に近づく
「こいつでベリアル因子を取り出していたのなら管に少し残っていてもおかしくはないはずだ」
俺は管を切り裂く
すると案の定血液が管に残っていた
「ビンゴ」
俺はガラス容器を取り出し、慎重に血液を流し込む

「ブルトン目当てだったが思わぬ収穫だったな。さて帰るか」
　俺が来た道を引き返していると、外から大きな音が聞こえた
「何だ？」
　急いで外に出ると、スカルゴモラとZとジードが戦闘していた
　スカル振動波を纏わせ突進し、Zとジードと格闘する
　パワータイプのゴモラとレッドキングの力を併せ持つだけあり、戦闘能力は高い
　Zとジードを圧倒する
　距離を取ったZとジードに対してショッキングヘルボールを食らわせる
　その流れ弾がこちらにも飛んできた
　流れ弾の進路にはうっとりとした目でウルトラマンを眺める女性隊員がいる
「ガイスティウム光線」
　俺は光線でそれを粉砕した
「大丈夫か？」
「は、はい。ありがとうございます」
「あの怪獣はかなり強い。あいつらが周囲を気にして戦闘出来ないほどに。だからとっとここを離れた方がいい」
「あなたは何者？Z様と戦ったと思ったら私達を助けるし…。何が目的なの？」

「目的ねぇ。別にこの星の文明や人類には手を出す気はない」
「この星に手を出さない確証がない。一緒に本部に来て貰える?」
彼女はこちらに銃口を向けてくる
「とても提案には聞こえないな。まあその程度の兵器なら俺にダメージは入らないだろうが」
「言うこと聞かないなら敵対したとみなさせてもらう」
彼女がそう言って脅しているとズドンという音が響いた
いつの間にかスカルゴモラがサンダーキラーに姿を変え、2人のウルトラマンを倒していた
立ち上がった2人はサンダーキラーから姿を変えたペダニウムゼットンの攻撃を受ける
「Z様!!」
「しゃあない…。手伝ってやるか…」
俺が巨大化しようとしたその時、もう一人のウルトラマンが降り立った
「ウルトラマンゼロ…」
ゼロはエメリウムスラッシュでペダニウムゼットンを牽制する
「こいつは俺の出る幕は無さそうだな」

そこからは圧倒的だった
次々と姿を変えるベリアル融合獣に巧みな連携で攻撃していく
ゼットランスアローによってペダニウムゼットンは氷漬けになり、動きを封じられた
そして3人のウルトラマンの光線によって倒された
「終わったみたいだな。こちらの条件さえ守ってくれるのならあんたについていくよ」
「条件？」
「監視やＧＰＳの取り付けをしない事と俺の邪魔をしない事」
「わかった。ついてきて」
俺は変身を解除し、女性隊員の後ろについて行った

9話

「へ～。ここがストレイジの本部か」
　俺は車に乗せられ、ストレイジの施設に連れてこられた
「そういえばあなた人間の姿に変身できるのね」
「宇宙ではいわゆる人間の姿をした種族が多い。だから人間の姿に変身するのはほぼ必須の能力だ。それに種族によってはかなり嫌われていたり、特殊な能力を持つが故に差別されるものもいる」
「そういうのは地球だけじゃないのね…」
　女性隊員は少し悲しそうな表情を見せた
「まあ、宇宙には様々な種族がいるから地球程はそういった事象は少ないがな」
　話しているうちに1つの扉に辿りついた
「ここが司令室よ」
　扉を開けると思ったよりも普通のオフィスのような部屋であった
　いくつかのデスクが置いてあり、資料が積み上げられている
「ヨウコ先輩お疲れ様です」

「お疲れ様」
「ハルキとユカもお疲れ。ハルキ、報告書は進んでる？」
「押忍。順調です。そういえばそちらの方は？」
「あれ？こないだクゼくんといた人じゃん。どうしてここに？」
　２人が質問をすると、先程俺たちが入ってきた扉からジャグラーが入ってきた
「みんなお疲れ。ヨウコ、そいつがさっき無線で報告していたやつか？」
　ジャグラーがこちらを向いて目配せしてくる
　おそらくジャグラーの正体は割れていないから話を合わせろということだろう
「はい。先日から度々私たちの前に現れていた宇宙人です」
「「宇宙人!?」」
　知らされていなかった２人は驚きの声を上げる
「ねぇヨウコ！それってホントなの!?サンプルを採取しなきゃ！」
　オオタさんはピンセットを構えながらこちらに迫ってくる
「ちょっと待ってくださいユカさん！ヨウコ先輩、そいつは危なくないんですか？」
「俺にあなたたちに敵対する意思はない。俺の条件を飲んでくれるならね」
「条件？」
「この姿ではあれだろう」

俺は怪人態へと姿を変える

するとハルキとオオタさんは驚いた

「本当に宇宙人なのね」

そう言いながらオオタさんは目を煌めかせ、俺の身体から皮膚のサンプルを取ろうとする

「多分無駄だぞ。俺は一応地球人だからな。こっちの地球人の身体の構造が向こうと違うなら話は別だが」

「地球人!?それに向こうの地球って?」

「宇宙ってのは無数に存在する。パラレルワールドって言った方がわかりやすいか?俺は別の宇宙からやってきた」

「じゃあ地球人って言うのはどう言う意味?そっちの地球人はそんな能力を持ってるの?でも構造は同じって…」

「そういう訳じゃない。ただ後天的にこの力を身につけただけだ。もういいだろう。条件を言わせてもらう。それは俺の監視をしない事と邪魔をしないことだ」

「邪魔?」

「俺はとある依頼でここを訪れた。それを完遂すればこの星を出ていく。もちろん君たち地球人へ危害を加えたりするつもりはない」

「本当に信用できるの？」
「こないだギルバリスの攻撃から守ってやったろ？それに今日だって朝倉リクの救出に協力したし、そっちのヨウコさん？も攻撃から守った。これらの事実は信頼に値しないかな？」
「でも、前にZ様に攻撃したのは…」
「別にこの星の文明に影響を与えたわけではないだろう？なんだったらあのウルトラマンの方がこの星に影響を与えていると言っても過言じゃない」
「どう言う意味？」
「あいつが来たことで本来ここに来ることのなかった怪獣が多数出現している。もちろん奴によってお前たちが救われて来たことは多いだろうが本当は地球人の手で乗り越えるべき相手だ。それをあいつは倒してるんだよ。ある意味じゃ文明の破壊者だろ」
「それは…」
　ハルキが言いよどむ。ウルトラマンと融合しているのだから少し思うところがあるのかもしれない
「そこまでだ。この件に関しては俺が何とかしておく。それとこの件は公表すればかなりの混乱を与える可能性があるから口外はなしだ。それじゃあ、みんなそれぞれの業務に戻れ」

「「了解」」

そういうとジャグラーは俺の耳元に近づいた

「ちょっとついてこい」

そう言うと俺を廊下に連れ出した

「お前何つかまってんだよ…」

「仕方ないだろう。確かにあの場から立ち去る方法はいくつかあったが変に目を付けられる方が厄介じゃないか？」

「それもそうか。そう言えばお前さんの出生について興味があるんだが、どうやってその力を得たんだ？正直サイコキノあたりの生まれだと思っていたから気になっちまってね」

「多分知ったところであんたが欲しい情報は得られないですよ。それよりもいい情報を教えますよ」

「なんだ？」

「近々ブルトンがこの地球に出現します」

「なぜわかる？」

「俺の追ってるやつにさっき奪われたんですよ。隕石は二つとも奴の手の内にある。できれば俺はブルトンを手に入れたい。協力してくれませんか？」

「そいつは多分無理だな。俺はここにいる限り自由には動けねぇし、Ｚ　の奴が協力するとは思えない」
「おい、わかってるのか？ブルトンを下手に倒したら…」
「わかってるよ。こっちにも考えがあるんだ。それにいざとなりゃあこいつで俺も加勢する。それにお前だってアレが出てきたらうれしいんじゃねぇのか？」
　ジャグラーは黒いＺライザーを取り出してそういった
「下手すりゃこの地球が滅ぶぞ。全くジャグラスジャグラーさんはさすがだねぇ。まあ今日のところはお暇させてもらうよ」
「じゃあな」
　俺はストレイジを後にした

10話

「やっぱり地球にいると体が鈍るな」
　こっちに来てまともな戦闘はあまり行っていない
「Zライザーを使った実験もやりたいしちょっと遠出するか」
　俺は怪人態に変身しネロンガの力を纏った
「せっかくあれもあることだし火星にでも行ってみるか」
　俺は透明化し火星へと飛び立った
「そろそろ大丈夫か」
　俺は大気圏から出たのを確認し、ネロンガの力を解除してアリゲラの力を纏う。そしてあっという間に火星へとたどり着いた
「やっぱ早えわ。じゃあ早速実験と行こうか」
　俺は空間に穴を開け、無数の金色の球体を取り出し、周囲にばらまいた
「よし、あとはレイキュバスの火炎で」
　俺はアリゲラの力を解除し、レイキュバスの力を纏う。そして先ほどばらまいた球体に向かって火炎を放った。すると球体はみるみるうちに大きくなり、なめくじのような

姿へ変形した
「火星怪獣ナメゴン…生で見ると思ったよりきしょいな…」
　数十匹のナメゴンがぶよぶよと体を揺らし、こちらに近づいてくる
「さて、Ｚライザーの力を試すか…。ガディバ」
「あいよ」
　ガディバはＺライザーに姿を変える。俺はそれを手に取りトリガーを押し、インナースペースへと入る。そしてアクセスカードをセットした
『Ｇｅｉｓｔ　ａｃｃｅｓｓ　ｇｒａｎｔｅｄ』
「バラバさん、キングクラブさん、ハンザギランさん」
『ｂａｒａｂａ　ｋｉｎｇｃｒａｂ　ｈａｎｚａｇｉｒａｎ』
「問題はここからだな。俺と同化した怪獣たちよ」
　俺はいつもの要領ででレッドキング、ベムスター、シーゴラスの力を呼び出し、スリッドへと力を注ぐ。すると怪獣メダルが生成された
「何とか成功したな」
『ｒｅｄｋｉｎｇ　ｂｅｍｓｔａｒ　ｓｅａｇｏｌａｓ』
「あとはイカルス星人の力だな。ガディバ、ムスカリの力をスリッドに集中させろ」
「了解」

そう言うとイカルス星人のメダルが生成される
『ａｌｉｅｎ　Ｉｃａｒｕｓ』
「じゃあやりますか。絆の力…お借りします‼」
『ｔｙｒａｎｔ』
「ほう、実験は成功のようだな」
俺の姿は暴君怪獣タイラントへと変身していた
「戦闘能力はどんなもんかな。食らえ‼」
俺は無数に迫りくるナメゴンに向かって冷気を放つ
「こりゃあすげえな」
数十匹いたナメゴンは全て凍り付いていた
「俺の同化とは違ってリミッターがない。怪獣本来の力がすべて引き出されている。我ながら恐ろしい力だ」
これまでは自身の実力に応じてリミッターがかかり、怪獣本来の力は引き出すことができていなかった。しかし、今回はライザーの力で制御し、なおかつ体を怪獣へと変異させることで負担がかなり少なくなっている。これまでの戦闘が馬鹿らしくなるほどの強さだ
「だがこれじゃあ実験としては物足りないな」

俺は耳からアロー光線を放ち凍り付いたナメゴンたちを粉砕した
「ベリアル因子を用いた検証もしたかったんだがなぁ…。とりあえず帰るか」
俺はタイラントの姿を解除し、アリゲラの力を纏う
「じゃあ帰りますか」
俺は火星を後にした
「よし、到着っと」
俺はばれないように地上に降り立った
「今度適当に怪獣でも買うかなぁ。前に狩ったプラズマソウルも手元に結構残ってるし資金としては十分だろう。ん？」
通りかかった屋敷から少し小さいが宇宙人の反応がする。しかも二人。
「ごあいさつに伺うとするかね。あわよくばライザーの実験素体に…」
俺は屋敷に侵入した。奥に進むとストレイジの女性隊員であるユカとヨウコが二人の女と戦っている
「なんだよファとシィじゃねえか」
４人の動きが止まる
「あー‼あんたは‼」
「あたしたちのエレキングを盗んだコソ泥‼」

「おいおいコソ泥呼ばわりかよ。同業者なんだから仲良くしようぜっ‼」
俺は怪人態へと変身し地面を蹴る。そして一気に距離を詰めてシィに腹パンを浴びせた。
「うわぁ…」
ヨウコがドン引きしているのをよそに、シィは力なく倒れピット星人の姿へと戻った
「ビンゴ～。やっぱり宇宙人だった。しかもピット星人‼」
「よくもシィを‼」
ファはすごい形相でこちらに飛び掛かってくる。流石はピット星人だけあってすごいスピードだ
「はい残念」
俺はファの顔面に手をかぶせて受け止め、ルグスの花粉を浴びせた。すると数秒藻掻き動かなくなる
「いっちょ上がりだな。さてこいつらをどうするか…」
「その処理はこっちでやっとくわ」
「解剖はやめといてやれよ。じゃあな」
俺は部屋を後にした。すると外からすごい轟音が響いた
「なんだ？」

急いで外に出るとウルトラマンＺと見たことのない怪獣が戦っている
「ファイブキングに似ているが腕にレイキュバスとガンＱがないな…。さしずめトライキングといったところか？」
Ｚはゼットランスで応戦する。すると突然怪獣の腕からレイキュバスとガンＱが生えた
「ファイブキングになった⁉あいつはセレブロなのか？」
Ｚはベータスマッシュにタイプチェンジをし、ファイブキングと戦うも、二体の怪獣の力を加え多彩さを増したファイブキングの猛攻に苦戦する
「加勢してもいいが、やつの自力を図るためにもう少し泳がせるか？」
暫く様子を見ていると、三本の光の筋がＺへと当たり、Ｚは新たなタイプチェンジをした。赤と紫が主体となり、胸部から肩にかけて、逆三角形のプロテクターのようなものがついている
「ＴＤＧの力か？」
「Ｚがまた変わった‼」
「今までで一番タイプかもぉ～」
いつの間にかストレイジの二人がファとシィを連れて外に出てきた
「とりあえずずらかるか。あいつがファイブキングを倒せばおこぼれにありつけるかも

しれないしな」
俺はここから去った。ファイブキングは新たな力を得たZに完全に押されている。フォトンエッジのような技で空中から叩き落され、ティガ、ダイナ、ガイアの幻影たちによる必殺光線で両腕と羽を失い、ティガフリーザーのような技で氷漬けにされた
「超能力を駆使して戦う感じか。随分と派手だな」
そして最後には等身大化してファイブキングの体内に侵入し、内部からの攻撃によってファイブキングは爆発四散した
「えげつねぇ…。とりあえず向こうに行くか」
俺は怪人態になりアリゲラの力を纏って高速で現場へ向かった
「見っけ」
作業着の青年が壁を伝いながら歩いている。するとその横からジャグラーが現れ、セレブロに剣を突き付ける
「みいつけた。俺とも遊ぼうぜ」
すると突如バリスレイダーが複数体出現しジャグラーに襲い掛かる
「俺も混ぜてくれよ」
俺はパルス孔から電磁ビームを照射し、一体を再起不能にし、高速でもう一体に迫る。ジャグラーもセレブロの銃による攻撃をいなしつつ、バリスレイダーを相手する

「オラァ」
　バリスレイダーの頭部に光弾を浴びせ吹き飛ばす。ジャグラーの方も終わったようだがすでにセレブロの姿はない
「あんたもセレブロ狙いかよ」
　ジャグラーはセレブロの落とした5枚のメダルを拾い上げる
「お前さんの依頼ってのはセレブロ関係なのか?」
「隠す必要もないな。俺の依頼はセレブロの抹殺だ。今回はそのメダルを奪えるかと思ってきてみたんだが…」
「残念だが俺がいただいていくぜ。お前さんはセレブロについてどれぐらい情報を持ってるんだ?」
「知的生命体に寄生して惑星の文明を破壊しまわっている厄介なやつってぐらいか?あとはその怪獣メダルとバリスレイダー、ブルトンを持ってる」
「奴は知的生命体に怪獣に対する恐怖を植え付け兵器を作らせる。そして人類の手に余る兵器を作ったときにそれを乗っ取り、その星の文明を壊滅させる。外から見れば文明が行き過ぎた科学によって自滅しているようにしか見えない。だから光の勢力は手を出せていない」
「なるほどねぇ。やはり危険な因子だとっとと潰さねぇと」

「まあ待て。もう少し泳がせてからにしてくれねぇか？」
「なぜだ？」
「ちょっと俺に考えがあってねぇ」
「まさか⁉」
「案外感がいいんだな。ウルトラマンすらも凌駕する兵器を手に入れる。これが俺の目的だ。別に勝手に行動してもらっても構わないがどうなるかはわかるよなぁ？」
ジャグラーの実力は計り知れない。下手をすれば等身大でも巨大化した俺を倒すことができるかもしれない。おまけにダークZライザーまで所持して、ファイブキングの素体となるメダルも向こうにある。こちらにはタイラントとベリアル因子というカードがあるとはいえ、危ない橋を渡る必要はないだろう
「わかった。あんたの意見に同意させてもらう。だが、やつを殺したり明らかな行動を邪魔しない程度にはメダルや怪獣の強奪はやってもいいか？」
「かまわない。これで交渉成立ってことで。じゃあな」
ジャグラーは手をひらひらと振り、ここを去った
「どうすっかねぇ。依頼がないとやることもないんだが」
俺はとぼとぼと帰宅した

１１話

「よう。時間通りだな」
　街外れの寂れた神社で座っているとスーツ姿にサングラスをかけた男が現れた
「約束の品はこれだ。お前が競り落とした怪獣はこのカプセルに入っている。あとこっちは強化パッチだ」
「高い金を出したんだ。品質は保証できるんだろうな？」
「量産個体じゃない調教師が一体一体にかなりの手間をかけて育えた個体だ。まんぞくしていただけると思うよ」
「なるほどね。お疲れさん。また頼むよ」
「これからも我々をごひいきに」
　男はテレポートでその場を去った
「強化パッチってのが胡散臭いが取り敢えずは手に入ったな」
　俺はオレンジ色の小さなカプセルを日にかざし眺める
「また火星に行ってみるか。強化パッチってのも気になるし」
　俺は怪人態へと姿を変え、飛び立とうとする。すると四つの飛行物体が上空を通り過

ぎた
「あれはキングジョー？誰が持ってきたかはわからんが面白そうだ。早速こいつを使うか」
俺はカプセルをキングジョーの進行方向に投げる。投げられたカプセルはオレンジ色の粒子となり、怪獣の形へと形成される
「行け‼ゼットン‼」
宇宙恐竜ゼットン。かつてウルトラマンを死に追いやり、そのほかの作品でも基本強敵として描かれている怪獣だ。怪獣兵器としても人気は高く、質の良いゼットンは高値で取引される
「火炎でこっちに注意をひけ‼」
ゼットンは4つの飛翔体に向かって火球を放つ。すると、ゼットンに向かって光線で応戦してきた。ゼットンはゼットンシャッターでこの攻撃をガードする。四つの飛翔体は合体し、キングジョーの姿になった
「火球で攻撃しつつ距離を取れ。キングジョーにお前を遠距離からダメージを与える攻撃はないはずだ」
ゼットンはテレポートで距離を取りつつ、火球を放つ。しかし、ペダニウムで構成された固い装甲には火球の攻撃は効いていないようだ

「このままじゃじり貧だな…。こいつを使ってみるか?」
俺は強化パッチと説明された青紫色の結晶体をゼットンに投げ込んだ。するとゼットンの腕が鎌状に変化し、紫色の鎧のようなものを纏った姿になった
「ゼットンバルタン星人⁉いや腕の形状が違うな。見た感じ近接戦に強化した感じか。やれゼットン‼」
ゼットンは鎌状の腕から三日月状の光弾を発射し牽制しつつテレポートでキングジョーの背後をとる。そして、キングジョーを羽生いじめにし至近距離からの連続の火球攻撃でダメージを与え続ける
「鈍足そうではあるが、テレポートと強力な遠距離攻撃でカバーできるわけか。うまいこと考えられてるな」
感心してみていると、キングジョーが体を分離させ、羽生いじめから抜け出し、逃亡した
「追うぞゼットン」
ゼットンと俺は追いかけようと飛行する。森の木々にうまいこと隠れられ、暫く探していると、山の近くでキングジョーがウィンダムと戦闘をしていた
「チッまたストレイジか。変に見つかったら厄介だ。向こうに注意がいってるうちに一回ひくか。戻れゼットン」

ゼットンは光の粒子となり、俺の手のひらにカプセルと結晶体になって戻ってきた
「あのキングジョー何が目的だ?」
暫く様子を見ていると、キングジョーは一台の車を追いかけていて、それをウィンダムが護衛しているようだ
「何かを輸送しているのか?宇宙人があそこまで執拗に追いかけまわすってことは相当価値のあるものなんだろうがストレイジの手元にあるものなら手を出しづらいな。キングジョーも欲しくないわけではないが手持ちにも余裕はあるからこれ以上は手を出さなくてもいいか…。火星に行ってゼットンのテストをしよう」
俺は火星に向かった
「ゼットンの回復は終わってるっぽいな。行けゼットン」
カプセルを投げ、ゼットンを召喚する
「そういえば強化パッチに関する説明を見てなかったな」
俺は空中にパネルを出し、説明を読む
「ゼットン・ファルクス。ゼットン本体の装甲とパワーを底上げし、腕に強力な鎌を装備することにより、近接戦において優位に立ち回れるように強化。装甲が厚くなったことにより通常の個体に比べやや速度は落ちるが、ゼットンが得意とする遠距離攻撃とテレポートによりその点はカバーすることができる。なるほどほとんど俺の解釈であって

そうだな。だが、ここまで強いと同化するか迷うな…」
　俺と完全に独立して戦えるという点ではガディバもいるが、メダルとZライザーを用いた戦闘を行う際にはそれはできない
「まあいいか。変に奪われたり殺されたりする方が面倒だしな。ガディバ」
　ガディバを召喚し、Zライザーを構える
「諸先輩方。闇の力お借りします‼」
『ｔｙｒａｎｔ』
「さあゼットン。殺す気でかかってこい」
　ゼットンは頷き、大量の火球をこちらに発射してくる。一部はベムスターの腹部により吸収したものの連続して襲い掛かる火球攻撃はさばききれない
「あっちぃ。流石はゼットンだな。反撃と行こうか」
　吸収をあきらめ、モーニングスターで火球を防ぎながら距離を詰める。しかしテレポートによってゼットンは俺の背後へと回る
「そのパターンは読んでるんだよ‼」
　キングクラブの尻尾でゼットンの体を締め上げ、近くの山に投げつける
「食らえ‼」
　アロー光線でゼットンを攻撃する。しかし、ゼットンシャッターによって防がれてし

まった
「流石に高値で買っただけのことはあるな。バリアもマックス個体と同様にちゃんとすべての方向を防げるようになってる。おまけに固いときたもんだ」
ゼットンシャッターはアロー光線の猛攻を受けたにも拘わらずひびすら入っていない
「ならば浴びせ続ければいいだけのこと」
俺は口から炎を吐き続け、接近する。その攻撃に対してもゼットンシャッターによって防いでいる
「オラァ!!」
モーニングスターでバリアを殴りつける。するとようやくひびが入り始めた
「貰ったぁ!!」
腕を振りかぶりもう一度殴り掛かろうとするとゼットンはゼットンシャッターを解除し火球で攻撃してきた。予想外の攻撃に思わずのけぞる。そのすきにゼットンはテレポートにより距離を取り火球の弾幕を放ってきた。俺は何とかモーニングスターでさばき、岩肌に隠れる
「状況による判断が的確過ぎる。技の取捨選択も完璧だ。こりゃあこのままじゃじり貧だな」

俺はインナースペースでＺライザーを構えなおす
「ゴモラよ力を借りるぞ」
俺はゴモラの力を現出させ、スリッドに集中させる。するとゴモラメダルが生成された
「本当はジェロニモンを使いたかったんだがねぇ」
俺はデビルスプリンターを体に撃ち込み。ゴモラのメダルを読み込む
『ｇｏｍｏｒａ　ｂｅｌｉａｌ』
「さあこれでエンドマークだ‼」
『ｓｔｒｏｎｇ　ｇｏｍｏｒａｎｔ』
体表がダークグレーと赤に統一され、ベムスターの翼が生える。さらに、腕はバラバのものからゴモラの腕へと変化し、ベリアルの要素が混じっている
「実験は成功だな…。しかし、破壊衝動があふれてくる…。この姿で長時間の活動は難しいかもな…」
俺はゴモラントの感覚を確かめる
「一気に畳みかけるか」
俺は放射される火炎の弾幕に飛び込む。ベリアルの力の影響か、ベムスターの吸収能力が向上し、自身に当たりそうな火球は全て吸収される

「ハイパーデスファイヤー!!」
俺は火炎放射で攻撃をする。ゼットンは攻撃を中断し、ゼットンシャッターで防御した。タイラントの状態ではヒビすら入らなかったバリアであったが、強化された火炎によって徐々に割れ始める
「バラバラバテール!!」
畳みかけるようにモーニングスターのついた尻尾でゼットンシャッターを攻撃する。それにより、バリアが完全に割れた
「グラビトロプレッシャー!!」
頭部の三本の角から重力波を発生させ、ゼットンを地面に押しつける
「まだ刺激が足んねぇなぁ」
強化パッチを重力波を受け続けるゼットンになげつける。するとゼットンファルクスの姿へと変化し重力波を火球で無理やり押しのける
「もっと俺を楽しませろよ!・アロー光線!!」
アロー光線をゼットンへと放つ。ゼットンはバリアをせずに、胸部で吸収し、そのエネルギーを使ってゼットンファイナルビームを放った
「面白れぇ。受けて立ってやるよ。ガイスティウム光線!!」
俺は口から光線を放ち波状光線と撃ちあう。威力は互角のようだ

「こんなもんか?とどめを刺してやる。食らえ!!」
　俺は光線の出力を上げる。波状光線は押し返され、相殺できないと悟ったゼットンは攻撃をやめ、ゼットンシャッターを張る。しかし、最大出力の光線により、バリアは割られ、ゼットンに直撃する
「はぁ…はぁ…。終わったな」
　俺はゴモラントの変身を解き、ゼットンに近づく。ゼットンをファルクスの状態から解除する
「お前と同化するのは少々惜しいが今後のためだ」
　俺はゼットンに手を当て、同化を開始する。ゼットンは光の粒子となり、俺の胸部の結晶体から吸収されてゆく
「ありがとな。これからも頼むぞ」
　完全にゼットンと同化した俺は地球へと帰った
「さてと地球についたわけだが…。何やってんだあれ…」
　地球に到着するとZと宇宙人が戦闘していた。宇宙人は土や岩を投げつけてZに攻撃している
「あれバロッサ星人だよな?何本か武器を奪っとくか」
　バロッサ星人は種族総出で海賊行為を行う迷惑な宇宙人だ。さらに一回の産卵で1

万個もの卵を産み、種族間での仲間意識が強いため、一人倒すと別の個体が因縁をつけて次々と襲ってくる。俺も昔、とある星の宝を護衛する際に一人倒して因縁を受けられたことがある。あいつ単体で見れば催眠能力以外は大したことはないが、どこからっさらってきたかわからない強力な武器を用いて攻撃してくるため油断ならない

「まああいつぐらいならZでもやれるだろ。暫く待つか」

バロッサ星人は土を投げたことで生まれた隙を使ってマグマ星人のサーベルを装着し、Zに襲い掛かる。しかし、難なくよけられてしまい、サーベルが建物に突き刺さって抜けないようだ

「完全にお笑いじゃねぇか…。隙を見て何個かいただくか」

サーベルを抜こうとしている隙にZが接近する。しかし、バロッサ星人得意の催眠術によって動きを封じられる。その間にサーベルを引っこ抜き、バロッサ星人は反撃を開始。形勢逆転した

「Z様!!これを使ってください!!」

声の主の方を見ると、ヨウコがZに向かって何かを投げていた。おそらくウルトラメダルだろう

「ということはバロッサ星人の目的はウルトラメダルか?」

Zは新たなメダルの力で必殺技を放つ。Zライザーから光の剣が生え、そこから竜巻

を生み出しバロッサ星人を吹き飛ばす。そして、巨大な八つ裂き光輪を放ちバロッサ星人は切り刻まれ爆発四散した

「さてと」

俺は怪人態へと変身し巨大化する。Ｚはこちらに気づいたようで身構える

「別にお前さんに用はねぇよ。あるのはこっちだ」

俺は星斬丸を地面から引っこ抜く

「どこから手に入れたのかは知らんがインペライザーを一刀両断するほどの切れ味の刀いただけるに越したことはないだろう?」

俺は星斬丸を亜空間に収納すると巨大化を解除した。Ｚは少々困惑した様子を見せたが飛び去って行った

「日本刀チックな武器前々から手に入れたいと思ってたんだよなぁ」

俺は高まる興奮を抑えきれず思わず笑いながら帰宅した

12話

「ノワール。久々に散歩に行くか」
寝転がっていたノワールはあくびをしながら体を伸ばしミャウと了承するように鳴いた
「お前実は俺の言葉を理解してるのか?」
ノワールを抱きかかえてそう問うと首を傾げまた鳴いた
「まあいいか。今日は遠出して深間市あたりまで行ってみるか。あそこには広い公園があったはずだ」
俺たちは深間市へと向かった
「偶にはのんびり日向ぼっこってのもいいもんだな」
俺とノワールは目的の公園に到着し、芝生に寝そべって日向ぼっこを始めた。周りでは小さな子供が遊具で遊んだり、親子でキャッチボールをしていたり、犬と戯れたりしていた
「平和そのものだ。ノワール、そろそろ飯にするか?ピクニック用にちょっと良い猫缶買っておいたんだ」

その時だった。ズドンと地響きがなり、レッドキングが出現した
「あらら一緒にランチはお預けだな。ノワールは空間で先に食べていてくれ」
俺は亜空間の穴をあけ、蓋を開けた猫缶とノワールを放り込む
「とりあえず適当に避難誘導でもしておくか。皆さん落ち着いて避難してください!!」
あらかた公園から人がいなくなった時だった
「マ〃マ〃ア〃ア〃」
親とはぐれたのであろう小さな女の子が転び泣いている。そして運悪くレッドキングが破壊した建物の破片がそちらへと飛んで行った
「しゃあない」
俺は怪人態へと変身し女の子を抱きかかえ、そこから離れた。かなりの速度で移動したからおそらく周りには俺は見えていないだろう
「大丈夫か?」
俺は変身を解除し女の子に問いかける
「グス…。うん…。ありがとう」
「じゃあ俺と一緒にお母さんを探すか」
俺は女の子とともに避難所へ向かった。避難所は人があふれており、簡単には見つけられそうにない

「俺が肩車するからお母さんを呼ぶんだ。いいね？」
　俺は女の子を肩車し、母親を探させる
「ルミ‼」
　母親が人をかき分けてこちらにやってきた
「ルミ心配したのよ‼」
「お兄ちゃんが変身して助けてくれたの‼すごくかっこよかった‼」
「あの状況でしたから多分テレビのヒーローか何かと勘違いしているんですよ。そんなかっこいい助け方はしてませんよ」
「本当にありがとうございました」
「いえ、大したことはしてませんよ。またなルミちゃん」
「バイバイ‼お兄ちゃん‼」
　俺は人ごみに紛れ、避難所から離れる。まだ地響きがなっているということはレッドキングは処理されていないのだろう
「ちょっくら様子を見に行くか」
　先ほどの公園へと向かっているとレッドキングのいた方向とは別の方向に巨大なロボットが飛んで行った
「あれはキングジョーか？回収したやつを改造したのか。しかしなぜ向こうに？」

気になった俺は予定を変更し、キングジョーの向かった先へ走る。そこには洞穴とその前に立つもう一体のレッドキングがいた。洞窟の中には卵がある
「あの洞穴はレッドキングの巣か？ということはさっきのレッドキングは巣穴から注意をひくために暴れてたってところか？」
レッドキングは巣穴を守るようにキングジョーと対峙する。改造により本来より力を抑えられているのか、それとも作って日が浅いため動作がうまくいっていないからかキングジョーはレッドキングに押され気味のようだ。キングジョーは備え付けられた銃を連射する。流れ弾が巣穴付近に当たり激怒したレッドキングはキングジョーにタックルをかました
「母は強しってやつかねぇ」
怪獣プロレスを観戦しているとレッドキングの目の前に魔方陣が現れ、Ｚが出現した。その様子を見るに先ほどのレッドキングは片付けたのだろう。Ｚは素早い身のこなしでレッドキングを翻弄し、光弾で攻撃した。しかし、Ｚは追撃をしない
「気づいたか？」
Ｚのカラータイマーが点滅し始める。そして起き上がったキングジョーがレッドキングに向かってとどめのビームを発射した。Ｚはレッドキングを守るようにして立ちふさがり、バリアを張ってビームを防いだ。キングジョーは反動で倒れる。レッドキン

グは巣穴へと帰り、姿をくらませた
「ありゃあ持たねぇな」
破壊が目的でも何でもない、ただ子供を、家族を守ろうとした生き物を殺してしまったのだ。高々２０年ちょっとしか生きてない人間にはきついだろう
「俺にもあんな時期があったんだろうねぇ」
自分の手のひらを眺める
「殺しの依頼なんていくつも受けてきたがなんとも思わなくなっちまったな」
自分がどれだけ血に汚れてしまったかを改めて理解する
「あの子に感謝されるような人間じゃ…というかもう人間ですらないのか」
Ｚが消えた方を眺める
「俺って結局なんなんだろうな」
俺は暫くその場から離れることができなかった

１３話

「あっぶね！」
　俺は攻撃を予期し岩肌に隠れる。俺のいた場所にあった岩は切り刻まれている
「完全初見でよくメビウスは倒したな…」
　宇宙斬鉄怪獣ディノゾール。硬い装甲と爆発性の高い融合ハイドロプロパルサーといった武器を持つ。そしてディノゾール最大の武器は断層スクープデイザーである。肉眼では目視することが出来ないほど細く長い舌を使い、あらゆるものを切り裂くことができる。本来はエネルギー源となる水素を効率的に取り込むための器官のようだが迷惑極まりない
「こいつが地球に行っちまったら大変なことになりそうだ」
　こいつとの戦闘はどうやっても周りへ被害が出てしまう。何とか火星で食い止めなければならない。どうやって対処するか、考えていると俺の隠れた岩肌にディノゾールが融合ハイドロプロパルサーを放つ
「ギャラクトロン！お前の力使わせて貰うぞ！」
　ギャラクトロンｍｋ２の力を纏う。そしてディノゾールの周囲に無数の魔法陣を召

喚し、そこからビームを放つ
「無傷かよ…」
ビームはディノゾールの硬い外骨格によって阻まれる。そしてディノゾールはスクープデイザーで攻撃してくる。俺は魔法陣バリアで何とかいなしながら接近し、ギャラクトロンクリンガーで攻撃する
「硬てえな」
何度も切りつけるが致命傷は与えられない。もたもたしているうちに2本の尻尾に捉えられ、締めへ叩きつけられる。さらに、ハイドロプロパルサーによる追い討ちをくらいかなりのダメージが与えられてしまった
「何とか早いとこ倒さねぇと…」
俺は魔法陣を召喚し、尻尾を攻撃して何とか脱出した
「外からの攻撃がダメなら内側から破壊してやるよ!」
俺はZライザーを取り出す
「ゴモラ、レッドキング!」
『ｇｏｍｏｒａ　ｒｅｄｋｉｎｇ』
そしてデビルスプリンターを取り出し、胸に打ち込む
『ｂｅｌｉａｌ』

「これでエンドマークだ！ってな」
『ｓｋｕｌｌｇｏｍｏｒａ』
「やっぱデビルスプリンターを使うと反動と破壊衝動がすげぇな…。とっとと倒さねぇと…」
俺はエネルギーを纏いディノゾールへ突進する。ディノゾールはハイドロプロパルサーで牽制するが、インフェルノマグマで相殺する
「スカル振動波ァ！」
ディノゾールの体に角を突き刺し、纏ったエネルギーを振動波として放出する。尻尾で叩きつけて抵抗してくるが振動波を放ち続ける。ディノゾールは力なく倒れた
「苦戦させやがって…」
俺はスカルゴモラの変身を解除し、ディノゾールの死体に手をかざす。死体は光の粒子へと変わり、体内へ吸収される
「ベリアル融合獣への変身の安定化を何とかしたいな。デビルスプリンターじゃ使い切りな上に反動がでかい」
濃度の高いベリアル因子は手に入れたが、メダルの製造方法と装置がない以上はどうしようもない。何とかしてセレブロからパクるか？
「それにしてもなんでディノゾールがこんなところに単体で現れたんだ？こいつは群れ

で行動するはず…。しかも本来なら比較的大人しい種族のはず」
　あれこれと考えていると何かが地上へと降ってきた
「なんだ？」
　恐る恐るクレーターへ近づくと、クレーターへと上空から光線が照射された。上を向くとそこには数体のキングジョーがいる。おそらく今落ちたものを攻撃したのだろう。再度クレーターを覗くと中央に半球形のバリアが張られ、その中に宇宙人がいた
「そんな攻撃じゃあ私は倒せないわよ」
「グリードか？」
「あらガイストくんじゃない。久しぶりね」
　グリードは片腕でバリアを維持して攻撃を防ぎつつこちらにひらひらと手を振る
「今回は何やらかしたんだ？」
「ちょっとペダンにちょっかいかけただけよ～」
「ちょっとってどのくらいだ？」
「機密情報の漏洩くらいかしら？」
「どこがちょっとだよ！」
「そうだ！このポンコツロボット倒すの手伝ってよ。1人だとちょっと面倒臭いからさ～」

「貸ひとつな」
「従順な子は好きよ。じゃあさっさと片付けて一緒にデートでもしましょうか？」
「あんたに関わるとろくな目に遭わねぇからだよ…。とりあえずやるか」
俺は構えで戦闘体制に入る。敵は３体。一体はスカーレットで残り２体はカスタムのようだ
「カスタム２体は俺が何とかする」
「オッケ～。お願いね～」
グリードはスカーレットを蹴り飛ばし、カスタム２体から引き離す
「じゃあこっちも始めますか」
俺はゼットンの力を纏い、火球で攻撃する
「へぇ、やるじゃん」
２体はペダニウムランチャーから光弾を放ち、俺の火球攻撃を全て相殺した
「流石にキングジョーの改良型なだけはあるな。じゃあこいつはどうだ？」
俺は再度火球で攻撃する。また光弾で相殺されるが死角へと放った火球の軌道を変えて背後から攻撃する
「オラァ！」
怯んだ隙に亜空間からギャラクトロンベイルを取り出し、一体を切りつける。これに

よりペダニウムランチャーを切り落とした。もう一体がペダニウムランチャーで攻撃を仕掛けるが、キングジョーを盾にして防ぐ
「ガイスティウム光線!」
ペダニウムランチャーを破損している方を光線で破壊する。火球、ギャラクトロンベイル、ペダニウムランチャーの攻撃によりダメージを受けていたためいとも簡単に爆発四散した
「これで1体1だな。喰らえ!」
俺は火球の弾幕を生み出し、四方八方からキングジョーカスタムへと攻撃する。銃口がひとつしかないペダニウムランチャーでは火球を相殺しきれていない
「だがダメージは少なそうだな」
ペダニウム合金でできているだけあり流石に硬い
「やっぱさっきみたいに関節を狙うのが丸そうだな」
カスタムは火球の相殺を諦め、銃口をこちらに向ける。そして砲撃を仕掛けた
「そのエネルギー頂こう」
俺は左腕を突き出し光線を吸収する
「イッテ。流石に全部は吸収できないか…」
カスタムの攻撃は強力で全てを吸収できず、ダメージを受けてしまった

「だがかなりのエネルギーを吸収できた。喰らえゼットンファイナルビーム！」
　カスタムに向かって波状光線を放つ。光線を吸収したことにより威力をました光線がカスタムにぶつかるかと思われたが分離により回避された
「まあそうなるよな。だが…」
　地中から火球を発射し機体の接合部へと攻撃する
「弾幕を張った際に何発か隠しておいて正解だったな」
　俺は更なる火球を生み出し、追撃する。弱点の接合部を攻撃され、さらにダメージを与えられたことにより機体は地面へと落下する
「ほう。まだ動けるのか。ペダンのロボットはよくできているな。ガイスティウム光線」
　光線でとどめを刺す。そして残骸に手をかざし俺の体へと同化させた
「ふう、あっちはどうなったかな？」
　グリードの方を見ると悲惨なことになっていた。スカーレットは手足がもがれ、強固なペダニウム合金の装甲にはいくつも穴が開き、胸部には右腕のペダニウムランサーが突き刺さっている
「遅かったわねぇ」
「なぁ俺必要だったか？」

「このポンコツ無駄に連携するじゃない？しかもデータとって増援送ってくるし」
「いや強化されたスカーレットあんなボコし方出来るやつが言うか？」
「まあ裏技的なの使ってるしあんなの誰でもできるわよ。ところでさ、君のところで匿ってくれないかしら？」
「どうせ断ったところで来るんだろ？」
「勿論」
「はあ。わかったよ。代わりに解析してほしいものがあるから頼む」
「うん、わかったわ。じゃあガイストくんのお家にレッツゴー！」
「先が思いやられる…」
　俺たちは地球へと向かった
「大気圏に入る前に人間サイズになってくれ」
　俺たちはサイズを縮小させて大気圏に突入する。そして地上へと降り立った
「あれは…」
　そこには見たことの無いグルジオと倒れふすZ、そしてキングジョーストレイジカスタムの姿があった
「あら、あれサジタリちゃんじゃない。しばらく見ないと思ったらこんなところにいたのね」

「サジタリ?」
「ええ。惑星ｏ―５０でオーブの光に力を与えられたにも関わらず、光に見放され無理な肉体改造によって自我を失った可哀想な娘よ」
　グルジオの力を与えられた例は美剣サキことグリージョが挙げられるがこんなことが起こっていたとは。やはりｏ―５０はろくでもない星だ。グルジオは背中の主砲にエネルギーを溜めＺにトドメをさそうとする。しかし、キングジョーが立ち塞がり、空中へと飛び上がりミサイルで牽制する。分離を駆使して光線をかわし体外に露出したコアへ銃口を当てる。そしてゼロ距離でのペダニウム粒子砲によって倒される
「救われないな…」
「この世の中には不幸な生命なんていくらでもいるわ。そんなのをいちいち構ってたらキリがないわよ」
「わかってるよ。行くぞ」
　消滅するＺの姿を見届け俺たちは帰路についた

14話

「解析完了したわよ」
「早いな」
「正確にはメダルの解析だけだけどね。ライザーの方の解析は私でも難航しそうだわ。全体的な技術はメフィラス星に劣っているけどこういうのを作り出すのはあそこのすごいところよね。命の固形化なんかにも成功してるし」
「怪獣メダルは作れそうか？」
「ええ。メダルの構造自体は割とシンプルだからそんなに時間はかからないわ。素材は何かあるの？」
「こいつをメダル化したい」
俺はちゃぶ台の上に血液の入ったガラス管を置く
「これは？」
「ウルトラマンジードから採取された濃度の高いベリアル因子だ」
「そんなものをどうやって？」
「セレブロっていうやべえ奴のおこぼれをいただいたんだよ」

「ああセレブロね」
「知ってんのか？」
「私も直接出くわしたわけじゃないから何とも言えないけど、いろんな宇宙の星々の文明を破壊して遊んでる悪趣味なやつでしょ？やり方が姑息だからあまり情報は知らないけど」
「なるほどな」
「とりあえず今晩にはメダルの生成装置が完成すると思うからそれまでどこかに行って来たら？」
「わかった。頼んだぞ」
「さてとどこに行くかな」
「ん？この反応は…」
「どうした？」
「面白いものが外に出てきたわよ。私は興味ないから行ってきなさいな」
「面白いもの？」
「ブルトンよブルトン。この星の防衛施設の目の前に現れたっぽいわ」
「じゃあ行ってくるわ」
俺は外に出てストレイジの施設に向かう

「あれか」
そこにはフジツボやホヤのようなぶよぶよとした巨大な物体がいた
「今回こそは俺のものにしてやる。レッドキング!!」
俺は怪人態へ変身しレッドキングの力を纏って巨大化した
「オラァ!!」
俺はブルトンへ一気に接近し、殴りつける。ブルトンは特殊能力こそ最強クラスだが、速度や戦闘能力に関しては並以下だ。攻撃と防御をほとんど完全に特殊能力に依存しているといえる。だからこそ力でのごり押しと不意打ちが効く
「一気に畳みかける」
エネルギーを使い、光の縄を生成してブルトンに巻き付け地面にたたきつける
「投げ技が苦手なんだろう?バリアが割れるらしいじゃねぇか。これでフィニッシュだ」
レッドキングの怪力を生かし、ハンマー投げの要領でブルトンを投げ飛ばす
「ガイスティウム光線!!」
そして必殺光線を放った。しかし、ブルトンは間一髪で繊毛を出し、瞬間移動で回避する
「どこに行きやがった!?」

周囲を見渡すが見当たらない。その時、背中に強い衝撃を受けて倒れる。ブルトンが後ろから体当たりをしてきたようだ
「野郎!!」
すぐに起き上がり、飛び掛かろうとすると、ブルトンの孔から繊毛が現れ俺は光に包まれる
「しまった!!」
あまりのまぶしさに目をつぶる。そして瞼を開いた次の瞬間俺は全く別の場所にいた
「変身が解けてる!?ここはどこだ?」
俺は周囲を見渡す。どうやら日本ではあるようだがどこだろうか。何故か懐かしい感じがする
「ブルトンは相手の深層心理を利用すると聞いたことがある。ということはここは俺の行きたかった場所?正直酒場の方が行きたいんだが」
俺はとりあえず元の場所へと帰るためにここを探索することにした
「それにしても本当にここはどこだ?」
暫く歩いていると公園のベンチにぽっとしない一人の男子高校生がぽつんと座っていた。俺は心臓が飛び上がるようなそんな感覚に陥った

「あれは俺か…？」

どうやらブルトンはこの力を手に入れる前の時間またはその時期の平行世界へと俺をひき飛ばしたようだ

「確か…」

俺は数百年前の思い出したくもない出来事を思い浮かべる

俺はクラスでは少し浮いた存在だった。誰とも話さず、いわゆるボッチというやつだ。そんな俺だったが当時好きになった女がいた。少し地味だがかわいらしく、気配りもうまいやつだった

何が原因だっただろうか、その子はいつのころからかいじめのターゲットになった。俺は怖かったのだ。彼女を何かしら気にかけたり、助けたりすることで自分に被害が及ぶのではないかと。どうやら彼女の周囲の人間も同じ考えだったようで、彼女の周りからは人がいなくなり、次第にいじめはエスカレートしていった。担任もクラスメートも見て見ぬふりをしている。俺もその一人だった

そんなある日のことだった。俺は日直の仕事で普段使われていない倉庫の掃除をすることになった。職員室で鍵を受け取り倉庫に向かう。鍵穴に鍵を入れてまわすとすでに鍵が開いている。おかしいと思いつつ扉を開ける。そこには彼女がいた。首を吊った姿で。愛らしかった顔の面影がないほど苦しむような怒るような形相をし、首は

少し伸びている。手足は力が入っておらず垂れていた

俺は逃げるようにそこを後にし、全速力で家へと帰り、自室に引きこもった。頭の中を様々な感情がめぐる。怒り、悲しみ、憎しみ。めぐりめぐって最後に到達したのは後悔の念であった。自分があの時動けていれば彼女は命を絶たなかったかもしれない。俺は自分を責め立てた

しかし、人間一度寝ると案外落ち着いてしまうもので次の日には学校へ行った。教室につくといじめえお行っていたグループがこちらを見てクスクスと笑っている。座席につき、机に教科書を入れると、くしゃっと紙がつぶれるような音が聞こえた。紙を取り出すと、それはノートの切れ端であり、こそには「死体程度でビビッて帰る腰抜け」と書かれている。いじめグループの方をもう一度見ると笑いをこらえるように口に手を当てている。次のターゲットは俺のようだ

その日を境に、毎日小さな嫌がらせが起こるようになった。画鋲を靴に仕込んだり、机にゴミを入れられたりと、あからさまに周りからは見えないような嫌がらせをされた。俺はその時に悟った「この世には英雄（ヒーロー）なんてものは存在しない」と

「胸糞悪い」

俺はあの時の出来事を一通り思い出し過去の俺を物陰から観察する。すると、過去の俺の目の前に金色のゲートが開かれ、そこから謎の宇宙人が現れた

「あいつは何者だ？」
「あんたは？」
　過去の俺が問う
「我が名はアブソリューティアンの戦士、アブソリュートタルタロス。この宇宙とは別の宇宙からやってきた。貴様の世界では我々の宇宙は空想上のものとされているはずだ」
「まさかウルトラマンの世界から来たとでもいうのかよ」
「ああその解釈で問題ない。貴様の未来を教えてやろう」
　タルタロスは過去の俺に向かって指先から金色の波動を浴びせる。おそらく脳に何かイメージを送っているのだろう
「貴様はこの数週間後、私と同じく別宇宙から飛来した赤い願い球を手に入れ力を手に入れる。そしてこの宇宙から立ち去り、その力を行使し、殺しや違法取引を行う闇の仕事人へと落ちぶれた」
「悪かったな、落ちぶれて」
　俺は物陰から飛び出し、２人のもとへと歩く
「貴様は」
「ああ、そこのガキの並行同位体。てめえが語った未来の姿だ。アリゲラ‼」

アリゲラの力を纏い、過去の自分を抱えてタルタロスから距離を取る
「何が目的だ？」
「そいつを使って我らザ・キングダムの戦力とする」
「ただの地球人のガキが戦力になるとは思わないが？」
「地球人だからこそ使えるものがあるのだ。そいつを渡してもらう」
俺は怪人態に変身する。過去の俺がその姿に驚く
「これが今の俺だ。タルタロスだかタルタルソースだか知らないがこいつは渡さねぇ‼ギャラクトロン‼」
ギャラクトロンｍｋ２の力を纏う
「アブソリュートディストラクション」
タルタロスは腕から分散した無数の光弾を生み出しこちらに攻撃してくる。それに対し、俺も無数の魔方陣を生み出し、そこから光線を放つことで相殺する
「ゼットン‼」
纏う力をゼットンに切り替え、テレポートで背後に回る
「ゼットンファイナルビーム‼」
ゼットンファイナルビームを放ち、テレポートで空中へと移動する。そして、テレポートで放つ場所を移動しながら火球を撃ち続ける

「ふう、この程度か」
ゼットンファイナルビームと火球をすべて食らったにも拘わらず、タルタロスは無傷のようだ
「クソが‼」
俺はZライザーを構えバラバのメダルを読み込む。そしてモーニングスターで殴りつけるが片腕ではじかれる
「どうした？貴様の力はその程度か？」
タルタロスは腕に力を溜める
「バケモンが‼」
『ｔｙｒａｎｔ』
アロー光線と火放射、そしてガイスティウム光線を同時に放つ。しかし、タルタロスはよけることも防御することもなく俺の攻撃をすべて受けきり、攻撃がやんだと同時に光線状のアブソリュートディストラクションで攻撃する
「クッソ吸収しきれない‼」
ベムスターの能力で光線の吸収を試みるもあまりに膨大な力ゆえにさばききれず、吹き飛ばされる
「無様だなぁ。貴様もああなりたくはないだろう？我とともにザ・キングダムへ来い。

そうすれば貴様の望む力を与えてやろう」
　タルタロスは過去の俺へ手を差し伸べる
「ふざけんじゃねぇ‼過去の俺に口出しすんな‼ゴモラ‼」
　俺はゴモラの力を纏う
「俺の本気ってやつをみせてやるよ。オラァ」
　デビルスプリンターを取り出し、ベムスターの口へと打ち込む
『ｓｔｒｏｎｇ　ｇｏｍｏｒａｎｔ』
「これでお前にエンドマークを打ってやるよ‼グラビトロプレッシャー‼」
「何⁉」
　タルタロスに強力な重力波を浴びせ、地面に抑え込む
「ハイパーデスファイヤー‼」
　そしてタイラントの時とはくらべものにならない威力の火炎を浴びせる
「こいつでとどめだぁ‼」
　俺は亜空間から星斬丸を取り出しタルタロスを切りつける。しかし、すんでのところで重力波を抜け出され回避された
「なるほど、やはり危険な因子だ。今日のところはこのくらいにしておいてやる」
　そういうとタルタロスは金色のゲートを開き、この宇宙から去った

「二度と来るなバーカ!!」

俺は変身を解除し過去の俺に近づく。俺にビビッているのか過去の俺は後ずさりする

「そんなに怖がるな。お前に俺からアドバイスしてやるよ。そんなに周りを恐れるな。あんなクソガキどもより今の体験の方がよっぽど恐ろしいだろう?」

「現実味なさすぎるけどな。さっきのやつが言ってた未来って本当なのか?」

「まあ殺しやバイヤーじみたことをやってるのは事実だ。だがこの世ってのは正義も悪も存在しない。それぞれが自分の正義を持ってるし、それに相反する存在を悪とみなす。でもな、俺は本物の正義ってやつを見たくなったんだよ。だからこのこの星を飛び出した。力を手に入れ、この星にある俺に関する記憶をすべて消してな」

「そんなことが…」

「別に後悔はしてねぇよ。いろんな出会いもあったし、うまい酒も飲める。お前…というか俺が歩むべき人生よりも楽しいかもしれない。だが、お前はまだ選択することができる」

「選択?」

「単刀直入に言わせてもらう。彼女は死んだ」

「え…」

「首吊り自殺だ。お前は第一発見者になり、数百年経った今でもなお若干引きずるぐらいにはトラウマになている」
「そんな…」
「さらに次のいじめのターゲットはお前だ。もはや笑えるよな。当時の俺は多分この世の不幸を一身に背負っているような顔をしていたと思うぜ。確かに今の生活は楽しい。俺になりたきゃ彼女を見殺しにするがいい」
「それは嫌だ」
「なら行動しろ。未来は変えられる。お前ならやれる。なんてったって俺なんだからな」
「行動できなかったやつが何を言うんだか」
　過去の俺はクスリと笑った
「わかった。俺頑張るよ。必ず彼女を救ってみせる」
「ああその意気だ。そうだお前にプレゼントをやろう」
　俺は亜空間の穴をあけ、エメラル鉱石を取り出し、その欠片を手渡す
「こいつはエメラル鉱石。特オタだった俺ならわかるだろうが高濃度のエネルギーを含有する鉱石だ。だが、この星にそれを解析したり利用するだけの科学力はない。ただのきれいな石ころってわけだ」

「どうしてこれを？」
「お守りだよ。お前が彼女を守るって決めた誓いの証みたいな？」
「フツ俺って数百年間生きてもそんな下らねぇこと言ってんのかよ」
俺たちは顔を見合わせて笑った
「大切にさせてもらうよ」
「ああ、頑張れよ。あと、赤い球なんだが…」
「それなら俺が何とかしておく。ＴＤＧの映画のやつだろ？本編のとおり球の消滅を願っておく」
「流石俺だな」
「ありがとよ」
「こっちこそ。数百年悩み続けていた霧が晴れた。じゃあな」
俺は夕日を背に手を振り公園を後にする。が、ここで思い出した
「俺ってどうやって帰ればいいんだ⁉」
後ろから俺の笑い声が聞こえる。それと同時に俺は光に包まれた
「ここは？」
目を開くとそこは公園だった
「ブルトンは⁉」

ストレイジ本部の方を見る
「埋まってる…？」
視界にはいってきたのは倒れ伏すキングジョーと地面に埋まって頭だけ出ているＺ、そしてそれを転がり攻撃で踏みつけるブルトンの姿だった
「建物も浮いてるしカオスだな」
ブルトンは再度Ｚを踏みつける。しかし、すんでのところでテレポートによって回避したＺはベータスマッシュに変身し、特殊能力を使うための繊毛をブルトンから引っこ抜いた
「マジで赤い通り魔にしか見えんな…」
そこからはＺが終始圧倒し、先ほど俺がやったように光の縄でブルトンを縛り、空中に投げる。そしてアルファエッジに変身し、Ｍ７８流竜巻閃光斬でフィニッシュ…って
「まずい‼」
俺が気づいたころにはもう遅く、ブルトンは爆発四散した。空間に大きなひずみを残して
「あ～あ。やっちまった。もうどうしようもねぇな…」
俺は空間の歪から聞こえる笑い声を聞き届けその場を後にした
「マジでどうしよう…」

15話

「これでよし。ガイスト君とガディバちゃんの同化した怪獣すべてのメダル化に成功したわ。ついでに私のメダルも」
「ありがとよ。まあ同化してるやつのメダルはあんま使わねぇだろうけどな」
「あとおまけにこれ」
「これは？」
「ショートカット用のタイラントのメダルとジェロニモンのメダルよ」
「タイラントはわかるんだがジェロニモンのメダルは？」
「固形の命を再現しようとしてた時のサンプルのあまりもので作ったの。タイラントとの相性もばっちりだし」
「これはありがたいな。おそらくグリーザももうすぐ現れるだろうし、これは大きな戦力になる」
「でも、あなたと新米坊やが共闘したところで勝てるとは思えないわ」
「その点はジャグラーも介入するだろうし、あれだけ大きな時空の歪が現れたんだから、それを感知したジードあたりが来てもおかしくない」

「…この地球にジャグラーちゃんもいるの？」
「そういえば言ってなかったな。何かあるのか？」
「いやいや普通に言ってるけどあのジャグラーちゃんよ？いくつも星を滅ぼしたり、暗躍してる」
「あいつはこの星の防衛組織の隊長をやってる。セレブロのお遊びに便乗して最強のロボット兵器を作らせてそれを強奪する魂胆らしい」
「なるほどねぇ。それならあんまり表立って行動はできないだろうし私も地球のグルメも堪能できそうね」
「まあやつもライザー持ってるし、魔人態の存在はこの星では周知されてないから何とも言えんがな」
「とりあえずやりたいことやって、とっととここを去った方がよさそうね」
「そうしとけ」
「お出ましみたいよ」
　グリードの端末の警報装置がけたたましく鳴る
「虚空怪獣グリーザ…」
「私はまだやることがあるし、面倒くさいから行かないわ。行ってらっしゃい」
「正直あんたも戦力に入れてたんだが…」

「だってあれには小細工なんて通用しないもの。あからさまな弱点が存在しない相手にメフィラス星人の中でちょっと強いくらいの私がかなうわけないじゃない」
「はあ…。仕方ない、行くぞガディバ」
　俺は部屋を飛び出し、街へと向かう
「もう始まってたか」
　そこで目にした景色は、圧倒的な力で街を蹂躙するグリーザとそれに翻弄されるZとジードの姿だった
「よう」
「ジャグラーか。こうなることは想像していただろう？何故ブルトンの撃破を止めなかった？」
「話はあとだ」
　ジャグラーはダークZライザーを使い、インナースペースへと入っていった
「しょうがない、手伝ってやるか…。ガディバ、お前はゼットンで行け」
　俺はガディバの体にゼットンメダルと強化パッチを埋め込む
「ベムスター!!」
　俺はベムスターの力を纏い巨大化した
「行くぞ!!ガイスティウム光線!!」

俺とトライキング、ゼットンファルクスは一斉にグリーザへ攻撃を開始する
「あの怪獣たちは…手を貸してくれるのか？」
俺たちの光線技はすべてバリアで防がれ、近接戦へ移行する。俺は星斬丸を亜空間かあ取り出し、切りかかるが回避される。それに対しグリーザは光弾で応戦する。俺は左腕に装備したベムスターの腹部を再現した盾によってその攻撃を吸収し、何とか攻撃をさばく。ほかの四人もそれに続いて攻撃するがすべて回避される。Ｚの攻撃に至っては回避の必要すらないのかそのまま受け止められる
「ガディバ‼タイラントで行くぞ‼」
ゼットンファルクスは光の粒子に変化し俺の体に入り込む
『ｔｙｒａｎｔ』
そしてタイラントへと変身した
「こっから反撃だ」
そう意気込んだ直後、グリーザは頭部から強力な音波攻撃であるグリーザアクオンを発生させる
「ク〃ァ〃ァ〃ァ〃ァ〃」
鐘のような強力な音波攻撃は、イカルス星人の耳により増幅され俺に大きなダメージを与える

「クソがぁ!!ふざけんじゃねえ!!ゴモラさん!!ジェロニモンさん!!」
『ｇｏｍｏｒａ』
『ｇｅｒｏｎｉｍｏｎ』
「熱いやつ頼みます!!」
『ＥＸ　ｔｙｒａｎｔ』
「うっわ動きづれぇ。まあいいわ。これでも食らえ!!」
　俺はモーニングスターを射出し、鎖でグリーザを捕らえる
「捕まえれたならこっちのもんだ。てめえを食って同化してやる!!」
　俺は鎖を手繰り寄せて、ベムスターの腹部の口で捕食を開始する。それと同時に、トライキングはファイブキングへと変身し、ガンＱの力でグリーザの吸引を試みる
「マジかよ…。エネルギーが膨大すぎる…」
　一気にエネルギーを送り込まれたことで、強化されたはずのベムスターの力さえもパンクしてしまう。そして鎖が引きちぎられた
「しまった!!」
　拘束を抜け出したグリーザは俺とファイブキングを投げ飛ばし、グリーザビームでとどめを刺そうとする
「ヤッベ!!アリゲラ!!」

俺はとっさにＥＸタイラントの変身を解除し、アリゲラの力を纏う。そして、何とか回避した
「ファイブキングは…、ダメか…」
ファイブキングを撃破したグリーザにジードとＺが強襲する。しかし、効いているようには見えない
「ジードがなんかやる気だな?」
ジードはＺライザーで胸部への攻撃を狙っているように見える
「しゃあない手伝うか」
俺は纏う力をゼットンに切り替え、テレポートでグリーザの背後を取り、羽生いじめをした
「早くしろ‼」
ジードはＺライザーを藻掻くグリーザの胸にねじ込む
「よし‼成功ｄ…」
グリーザはＺライザーが胸に入り込むすんでのことろで背中から光線を放ち、俺の胸を貫いた
「しまった…その攻撃を失念していた…」
俺の変身が解除される

「はあ…はあ…。ガディバ…。とりあえず家までたのむ…」
　俺は意識を失った
「痛っ…グリーザは⁉」
「今は活動を休止しているわ」
　グリードが答える
「よかった…」
「それがそうでもないのよね」
「何？」
「あのジードちゃんだっけ？あの子が一時的にグリーザと融合することで活動を休止しているみたいなの。つまりあの子が完全に融合してしまえば…」
「そういう状態か」
「あなたは動けないし私が出るわ。まだろくにスイーツもラッキョウも味わってないのに壊されたら困るもの」
「大丈夫なのか？」
「まあいざとなったらテレポートでこの星を見捨てるから大丈夫よ。あなたも今のうちに逃げる準備をしておきなさい」
　彼女はそう言い残し部屋を後にした

「ガディバ、このメダルを持ってグリードのもとに向かえ。俺はもう戦力にならん」
　ガディバは彼女のあとを追い、部屋から出ていく
「さて、俺はどうするか…。そういえばジャグラーが何か策があるようなことを言っていたな。行ってみるか…」
　俺は極限まで闘争本能を掻き立てる効能を抑えた宇宙けしの成分を麻酔代わりに体に注射する
「これで痛みは幾分かマシになったな…。あとはマンダリン草を…」
　そしてマンダリン草の実をつぶし、傷に塗る
「これで応急処置は完了だな」
　俺はストレイジ本部へ向かう
「ネロンガ」
　俺はネロンガの力を纏い、透明化能力で基地に潜入する
「よう。お前さんも来たのか?」
「ジャグラー…」
「言いたいことはわかるがちょっとまて。こいつを見ろ」
「これはインナースペースへの扉?」
「俺の部下が今取り込み中でなぁ。これが終わったらセレブロのところに出向いてベリ

アルメダルを強奪しに行こうと思ってる」
「ベリアルメダルを？」
「ああ。あの化け物を倒すには理屈を超えた力が必要だ」
「なるほどな。それでベリアルメダルを…」
「そろそろ終わったっぽいな」
　ハルキがインナースペースから出てくる
「うわぁぁ‼お前はトゲトゲ‼あとガイスト‼」
「俺はついでかよ…」
「話は聞かせてもらったぞ」
「あの中の音って外に聞こえるもんなの？」
「あいにく地獄耳でなぁ。行くぞ」
　ジャグラーは肩をハルキにぶつけながら外へ向かった
「イッテ、どどこに行くんだよ⁉」
　俺とハルキはジャグラーのあとについていく
「駐車場？」
「お前はこいつを運転しろ」
「え？」

「いいからさっさとしろ」
「うす」
「お前も乗れ」
「わかった」
　俺は助手席に、ジャグラーは後部座席に乗り込み、セレブロのもとへと向かう
「ああ、そこ右」
「うす」
　ウルトラＱ的なカオスな光景を見つつ車に揺られていると一つの建物にたどり着いた
「ここだ」
「いったい何をするんだ？」
　ハルキがジャグラーに問いかける
「お前さんの欲しがってるベリアルメダルを手に入れるのさ。武装して乗り込むぞ」
「うす」
　ゲームにいそしむセレブロのもとに閃光弾を投げ入れる。そしてハルキとセレブロの銃撃戦が始まった。両社一歩も譲らない勝負であるが…
「昨日はどうも」

俺とジャグラーが剣をセレブロの喉元に当てる
「ノックぐらいしろよ」
セレブロはそう言って抵抗をやめて椅子に座った
「驚いたよなぁセレブロ。お前のブルトンを倒したらあんなのが出てくるなんてよぉ。このままじゃ地球ごとあいつに消されてお前の遊びも終わっちまうぞ」
「アハハハハッハ。遊びw?遊びw?」
「おい‼」
「何が言いたい?」
セレブロが問う
「ベリアルのメダルを渡せ」
セレブロが笑う
「早くしろ、このままじゃゲームオーバーだぞ」
セレブロは突然立ち上がり、ベリアルメダルを投げすてて消えた
「消えた…」
「ほらよベリアルメダルだ」
「おい、今のは誰だよ?セレブロって言ってたけど昨日の怪獣はあいつが⁉あんたらもグルなのか⁉」

「んなわけねぇだろ。いいから早く変身しろ」
「後でちゃんと説明してもらうからな」
　ハルキはZライザーを構え、インナースペースへと入っていった。ジャグラーは変身を解く
「頼んだぞ」
「俺空気すぎないか?」
「んなことはどうでもいいだろ。俺は帰る」
　ジャグラーは去っていった
「全く…。とりあえずグリードが心配だし行くか」
　外に出るとグリーザが活動を再開している
「半分同化してるっぽいな」
　グリーザは狂ったように街へとレッキングバーストを放つ、それを駆け付けたグリードがバリアで防いだ。グリードはグリップビームで応戦するが全く効果がない。グリーザは再度レッキングバーストを放つ、先ほどよりも威力を増したレッキングバーストがグリードに襲い掛かる
「まずい!!」
　俺は変身してグリーザへ飛び蹴りをする。うまく軌道がずれたようでレッキング

バーストは上空へと放たれた
「あなた何で⁉」
「話はあとだ。今は時間稼ぎをするぞ」
「はあ。わかったわ」
　俺はギャラクトロンベイルを、グリードはZライザーをを取り出し、接近戦に持ち込む。しかし、二人の連携攻撃はいともたやすくよけられ、レッキングリッパーで攻撃反撃される
「大丈夫か？」
「ええ」
　グリーザが再度レッキングバーストの構えに入る
「バリアじゃ受けきれん。光線で押し返すぞ」
「わかったわ」
「「ガイスティウム光線‼（グリップビーム‼）」」
　放たれたレッキングバーストに二人の合体光線で迎え撃つ。しかし…
「だめだわ。威力が足りない…」
　あちらの方が威力は高く押されている
「とにかく時間を稼ぐんだ。威力を上げるぞ」

俺たちは光線の威力をあげる。しかし、それでも歯が立たない
「仕方ない。せーので左右によけるぞ」
「わかったわ」
「「せーの」」
俺たちは光線を撃つのをやめ、左右にわかれてレッキングバーストを回避する
「キツイな…このダメージだと怪獣の力は使えないし…」
「ねぇ時間稼ぎって言ってたけどまだなの？」
グリーザがプラズマ光輪を放つ。俺とグリードはガイスティウム光線とペアハンド光線で相殺する
「もうすぐ来るはずだ」
その時だった。黄金の竜巻のような攻撃がグリーザに当たり、ジードと分離させる
「来た!!」
俺とグリードはジードのもとに向かう
「大丈夫か？」
「何とか…。黄金の嵐…」
ジードは先ほどの竜巻の方を見てそう言った。そこには、新たな姿のＺがたたずんでいる

「とりあえず回復させた方がいいな」
俺はジードにエネルギーを与える。すると、心なしかタイマーのなる速度が遅くなった
「ありがとう」
「悪いな。今の状態じゃお前を完全に回復させることはできない」
「十分だよ。それにグリーザはZが何とかしてくれる」
Zの方を見るとかなり押していた。攻撃がちゃんと通っている。これがベリアルの力…
「Z!!さっき無の中で何かが生まれるのを感じた。今の君たちなら針を取り出せるはずだ」
ZはZライザーをグリーザの胸へ突き刺し、針を抜こうと試みる
「あれは…」
「ベリアル…? いや違う」
Zはグリーザからベリアルのような針を抜き取った
「あの無の世界に僕のベリアル因子が触れ、新しい宇宙の針が生まれたんだ」
「あれが宇宙の針…。エクスラッガーに似ているな…」
グリーザは胸部の修復に手一杯で動けていないしかし…

「なんかあの針地面に刺さったわね…」
　針は地面へと刺さり、抜けないようだ
「何やってんだよ…」
「俺様を手にしてお前はなにをする？」
「剣が…」
「しゃべったわ…」
「俺様は切りたいときに切りたいものを切る」
　Ｚとハルキが何やらあの剣に話しかける
「宇宙の穴か…。面白い、切ってみるか」
　突然剣がすっぽりと地面から抜ける。それと同時にグリーザの修復が完了する
「こんなときに俺たちはいったい何を見せられてるんだろうな…」
「ええ…」
　グリーザは光線をＺに向けて放つ。しかし、剣がそれを吸収し、吐き出す。グリーザはそれを防ごうとするもの防ぎきれない。その後も剣の攻撃に押され、グリーザは切り倒された
「とりあえず倒したっぽいわね」
「そうだな」

「二人ともありがとうございました。お二人がグリーザと戦っていただけなければどうなっていたことか…」
「気にするな。お前にはギルバリスの時の借りがあるしな。グリード、帰るぞ」
俺とグリードは巨大化を解き、変身を解除する
「ようやく終わった。グリードもありがとな」
「どういたしまして。危うく死んじゃうところだったわ」
「すまんすまん。帰るぞ」
「まだよ」
「え？」
「だってここにはグリーザから四散したダークサンダーエナジーがあふれているんだもの。めったに手に入らない代物よ。サンプリングしないでどうするの？」
「はあ…やっぱすげぇよあんたは」
こうして俺たちは夜が明けるまでダークサンダーエナジー集めを行ったのだった

１６話

「まだ食うのかよ…」
　ダークサンダーエナジーを回収し終えた俺たちはスイーツバイキングを訪れていた
「噂には聞いていたけれど地球の食べ物は最高ね！」
「それは否定しないがそんなに食べたら太るぞ」
「レディーにその話は厳禁よ。まあ私は動き回るし頭を使うから太らないんだけどね」
　そういうと彼女はクレープを口いっぱいに頬張る。素体がいいだけあってムカつくほど映ている
「そういえばまだやる事があるとかって言ってたけど何をする気なんだ？」
「へへっほへぇ」
「口のもの飲み込んでから喋ろよ…」
　彼女はクレープを飲み込み、言葉を紡ぎ出す
「こないだヴァルカヌスの商人に会ったの。彼らの美的感覚が面白くてね」
「確か負の感情を美しいと感じる種族だろう？」
　ヴァルカヌス星人は円谷作品の中では比較的マイナーな作品である『ネオウルトラ

Q』に登場した宇宙ビジネスマンの別名を持つ宇宙人だ。正当な取引を行うことで知られている
「ええ。たまたま酒場で遭遇してね、結構ウマが合って話し込んだのよ」
「ほーん。それで？」
　俺はコーヒーを啜りながら話を聞く
「友情の証にって美しさを測るレーダーを貰ったのよ」
「なるほど、そいつを使ってマイナスエネルギーを回収しようってわけか」
「この星の人間はストレスが服を着て歩いている感じだし、土地から採取しても十分なサンプルが取れるはずだわ」
「だが、それだけ濃度の濃いマイナスエネルギー。安定せずに怪獣化する可能性は考えられないか？」
　マイナスエネルギーが実体化してしまえばクレッセントやホーなどといったマイナスエネルギー怪獣が誕生する。マイナスエネルギーは比較的手に入れやすく、かなりのエネルギー量だ。しかしデメリットが多いため、資源として利用された例はほとんどない
「問題はそこなんだけど、それを解決するのがストルム器官なの」
「なるほど。確かにストルム器官なら安定しないマイナスエネルギーを反転させて安定

させることができるかもしれない」
　ストルム器官はストルム星人の持つ反転器官だ。冷気を受ければ熱気を生み出し、右向きの力を与えれば左向きの力を放出することができる。しかし…
「だがストルム星は滅亡し、星の住人は宇宙の各地にちりじりになってるはずだ。それに、ストルム器官を失ったストルム星人は数日で絶命する。簡単に手に入るものではないだろう?」
「その点に関しては大丈夫。人工的にストルム器官を再現するの。アンチマターの表皮の一部をオークションで手に入れておいたから、おそらくそれで作れると思うわ」
「あんたの発想と行動力には毎度驚かせられるよ」
「あっそうだ。この星に太平風土記はあるかしら?」
「多分あると思うが何に使う気だ?」
「これは単純に面白そうだからよ。もしかすると研究資材として使えるかもしれないし。他の星だと超古代の怪獣についての記載とか怪獣災害の予言とか色々書いてあるし、なんならこの間使ったジェロニモンもこれで手に入れたのよ」
「確かにそれは面白そうだ。今調べたんだが、獅子ヶ丘の資料館に太平風土記の一部が保管されているらしい。この後行ってみるか?」
「そうね行きましょう。でもその前に…」

そういうと彼女はパンケーキにかぶりつく。出発はもう少し先になりそうだ
「はあ食べた食べた」
「店員さんドン引きだったぞ」
「でもこの姿だと少し食べづらいのよね」
「メフィラスの姿で食うとトイレの水洗音みたいな咀嚼音出すだろ？あれどうなってるんだ？」
「あんまり気にしたことはなかったわね…。多分メフィラス特有の口内器官のせいだと思うわ」
「そいつが原因か。お、ここみたいだぞ」
資料館へたどり着いた俺たちは中へと入り、太平風土記を探す
「これみたいね。多少欠損部はあるけれど読めないことはなさそうね」
「獅子のような絵が描かれているな…。滅幌…この獅子の名前か？滅幌…ホロボロ…。ホロボロスか!?」
「おそらくそうね。３３３年に一度、金烏が陰りし日、午の刻、荒ぶる滅幌す目覚めるなりって書いてあるわね…」
「金烏は太陽にいると伝承される伝説上のカラスだな。午の刻は正午。要約すると太陽が黒く陰った日の正午にホロボロスが目覚めるってところかな」

「黒く陰るというところは何を指しているのかしら？」
「おそらく太陽黒点だろう。中国の金烏に関する書物に金烏が黒点である説が記されている。それに３００年周期で黒点が拡大する現象が確認されているようだ。ホロボロスの目覚める周期とも一致する」
「なるほどねぇ。ちなみにその黒点の拡大する周期というのは次いつ起こるのかしら？」
「ちょっと待ってろ…」
　俺はスマホを取り出す
「まじかよ…」
「どうしたの？」
「黒点の拡大が最大になるのは明日の正午らしい」
「運がいいのか悪いのか分からないわね」
「伝承が本当なら相当厄介なことになりそうだ。封印の呪文とか書いてあるか？」
「『潮騒のさざめき』これこそが滅幌すを悠久の眠りに至らしめる術なり」
「潮騒のさざめき…。ストレートに捉えるなら波の音か？」
「そうね。でもこの１ページは何かしら？」
　グリードはこちらに漢字が羅列した紙を見せてくる

「文章になってないな。何かの暗号か？でもどこかで見たような…」
「ここだけよく分からないのよね…」
「思い出した！」
「何？」
「これは工尺譜だ」
「コウセキフ？」
「漢字で表されているが所謂楽譜だ。別の地球で昔見たことがある。一部違う漢字が使われているっぽいが間違いない」
「ということは潮騒のさざめきはこの楽譜のメロディってことなのかしら？」
「そうなるな。問題はこのメロディを口ずさむだけでいいのかってところだな。特定の楽器を使用しないと効果が現れない可能性もある。何か書かれてないか？」
「ウーンそれっぽいのはなさそうね」
「それなら仕方ない。これ以上長居しても無駄だろうし帰るか」
「待って」
「なんだ？」
「帰りにらっきょうを買いに行きたいの」
「じゃあスーパーでもよるか」

「いいえ。せっかくだし産地に行きましょう」
「え…」
「ということで鹿児島に行くわよ！」
「マジかよ…」

「ようやく帰ってこれた…」
「念願だった地球のらっきょうを手に入れられたわ！今度帰省して自慢しようかしら」
「メフィラス星人にとってらっきょうってそんなに大きな存在なのかよ…」
　片付けを終えた俺たちは泥のように眠った
「…ん？朝か…？」
　俺は起き上がり時計を確認する
「は？おい起きろ！もう１１時半だぞ！」
　俺は必死にグリードを起こす
「ん～…。な～に～…」
「１１時半だ。あと３０分でホロボロスが目覚める」
「ん～…。ん!?もうそんな時間なの!?早く支度しなきゃ」
　俺と彼女は急いで支度を済ませ、獅子ヶ丘町へ向かう

「あれは…」
獅子ヶ丘に辿り着くとハルキとユカがそこにいた。時刻は１１時５５分
「よう！」
「あなた達は…？」
「ガイストさんじゃん！どうしてここに？」
「面白いものが見れるらしくてね」
「もしかしてガイストさんも…？」
ハルキは太陽を見上げ、時計をみる
「正午です！」
「来るわよ」
ユカの持つ機械からアラームが鳴り出す
「地熱が急上昇！バイタルを確認！」
唸り声と共に地面が揺れ出す
「ヤバい！」
「お出ましだな。豪烈暴獣ホロボロス！」
土煙と共に地底からホロボロスが現れる
「あれがホロボロス…」

「やっぱり実在した！」
「さて遊びに行きますかね」
　俺は怪人態へと変身する
「うわ！」
「いい加減慣れろ。行くか！」
　俺は巨大化しホロボロスと対峙する
「速い！」
　ホロボロスは素早い身のこなしで動きを捉えさせない
「スピードにはスピードだ！アリゲラ！」
　俺はアリゲラの力を体に纏う
「これでスピードは互角のはず…」
　俺はホロボロスに駆け寄りとっ組み合う
「喰らえ！」
　俺は肩のパルス孔から光弾を放つ
「効いてない!?のぁ!?」
　ホロボロスに仕返しだとばかりに殴り飛ばされる
「痛ってぇなぁ！ガイスティウム光線！」

俺は必殺光線を放つ。しかし避けられてしまった
「どうにか動きを止めないと…」
そう考えているとさざなみの音がどこからか聞こえてくる。これに反応したのかホロボロスの動きが止まる。どうやらユカがスピーカーから流しているようだ
「違えんだよなぁ」
ホロボロスは体にエネルギーを溜め、周囲に撒き散らす
「不味い！ギャラクトロン！」
ギャラクトロンｍｋ２に力を切り替え、ホロボロスの周囲に無数の魔法陣のバリアを生み出し、防ぐ
「ヤバい！防ぎきれない！」
エネルギーの一部がグリードたちの方へ向かう
「グリード！任せた！」
「了解」
グリードはバリアを展開し、２人を守ったようだ
「加勢した方がいいかしら？」
「とりあえずは地上の流れ弾の対処を頼む。やばそうなら手伝ってくれ。ゴモラ！」
俺はゴモラに力を切り替える

「力技で行くぞ!」
　俺は亜空間からギャラクトロンベイルを取り出し切りつける。しかし、かわされて体当たりされる。ホロボロスが追撃しようとしたその時、Ｚが現れホロボロスにタックルした
「ナイスなタイミングだ。超震動波!」
　俺はホロボロスに追撃を仕掛ける。超震動波の強力な波動によりホロボロスは吹き飛ばされる
「俺が奇襲するからお前はあいつの相手をしてくれ」
　Ｚは俺の言葉に頷く
「ネロンガ」
　俺はネロンガに切り替え透明化し、攻撃のチャンスをうかがう。ＺとホロボロスはＤで対抗する
「今だ!」
　俺は組み合っているホロボロスの背後に飛び込み、背中に張り付く
「Ｚ!離れろ!」
　Ｚが離れたことを確認し、ホロボロスに電流を流す。するとホロボロスはばたりと倒

れた
「よし、あとはこいつと同化して…」
俺がホロボロスに近づくと突然起き上がり、俺を両腕の鋭い爪で責め立てる。そしてエネルギーを纏った腕で俺を殴りつけた
「ぐぁぁぁあ!」
俺は巨大化を維持出来ず、元の姿に戻る
「派手にやられたわね」
グリードが笑いながらこちらに近づく。どうやら先程の場所に吹き飛ばされたようだ
「まさか死んだフリをされるとはな…。流石にこの星で荒神扱いされているだけの事はあるな。ところで潮騒のさざめきの正体をあのお嬢さんに教えないのか?」
「彼女の悩んでる姿面白いから。それにもう辿り着いたようだし」
俺はユカの方を見る。彼女は巻貝に何やら機械を当てているようだ
「もしかしてホラガイか?」
「そのようね。おそらくあれがホロボロスを眠りにつかせるためのアイテム」
ユカは解析を完了させ、スピーカーから潮騒のさざめきを流す。その独特な音色を聞いたホロボロスはZに噛み付くのをやめ、音に聞き入る

「やっぱり！このホラガイ楽器だったんだ！漢字は古代の楽譜。あの鼻歌は封印のメロディだったのね…。ひいおばあちゃんありがとう」
音色を聞いたホロボロスは優しくひと吠えし地中へと帰ってゆく…と思われたが
「あれは!?」
どこからかホロボロスにふたつのメダルが投げ込まれる。ホロボロスはもがき苦しみながら紫色の光に包まれる
「あれは…」
ギャラクトロンｍｋ２の頭部とギルバリスの腕が装着されている
「何？何なの？」
「怪獣メダル!?ということはセレブロが近くにいるのか!?」
ホロボロスは町を破壊しながらビルの壁を駆け、Ｚに飛びかかる
「仕方ない…。もっかい行くか…」
俺はＺライザーを構える。その時、ユカの機械からアラームが鳴り出す
「荷電粒子反応増大…。荷電粒子砲!?」
「不味い！」
俺は怪人態へと変身しＺの前に飛ぶ。そしてバリアを張った
「流石に人間サイズだとキツい…。早く避けろ！」

ゼットが避けたことを確認し、テレポートで近くのビルに移動する
「キングジョーも来たか…」
キングジョーストレイジカスタムが応援に駆けつける。ペダニウム誘導弾で攻撃するが全て荷電粒子砲によって相殺され、キングジョーも荷電粒子砲で攻撃され機能が停止した
「バケモンが…!」
俺はZライザーを構え直す
『ｔｙｒａｎｔ』
Zと俺はホロボロスを押さえ込む。無理な融合をさせられたためかホロボロスは苦しんでいる
「ぐぁ!」
俺たちはホロボロスの剛腕により振りほどかれる。ホロボロスが殴りかかろうとこちらに近づいてきたその時、潮騒のさざめきが聞こえてくる。それを聞いたホロボロスはその場で悶える
「ウルトラマンZ!ガイストさん!お願い…。ホロボロスを…。ホロボロスを楽にしてあげて!」
Zはデルタライズクローへとタイプチェンジする

『ｇｏｍｏｒａ』
『ｇｅｒｏｎｉｍｏｎ』
『ＥＸ　ｔｙｒａｎｔ』
　ホロボロスはこちらに向かって荷電粒子砲を放つ
「荷電粒子砲は何とかする。お前はトドメを刺せ」
　俺はベムスターの腹部で荷電粒子砲を全て吸収する。そしてＺはベリアロクを取り出した
「しょうがない俺様が終わらせてやる」
　Ｚはベリアロクを構え、デスシウムスラッシュによりトドメを刺した。ホロボロスの魂が天へと召される
「終わったか…」
　俺は怪人態へと戻る。すると上空から砲撃が降ってきた
「痛ってぇ！なんだ？」
　俺とＺは空を見上げる。蝶のような羽を携えた宇宙人が高速でこちらに降りてくる
「あれは…」

17話

宇宙人が地面に着地…を失敗する
「バロッｓ痛って！」
「「え？」」
「アイタタタ。あっ…。聞いて驚け、俺は宇宙の大海賊バロッサ星人。銀河のお宝を奪い尽くす。それが俺たちの掟だ」
「なんなんだ？」
バロッサ星人は地面に落ちているギルバリスの腕を拾い上げる
「お邪魔します」
そしてそれを装備した
「派手に行くぜ！」
バロッサ星人は俺にビームで牽制し、Ｚに殴り掛かる。Ｚはベリアロクで受け流そうとするが、先程の戦闘のダメージが響いているためか吹き飛ばされる
「さぁて、トドメェ！」
バロッサ星人が拳を振り上げるがすんでのところでベリアロクを振るい仕切り直す

「俺のことを忘れちゃいないかい？」
　俺は光弾で攻撃しながら飛びかかり、星斬丸で切りかかる。しかし、上手くギルバリスの腕で防がれる
「ええい面倒臭い！お前の相手はこいつだ！」
　バロッサ星人はそういうと卵を取り出し、ギルバリスの腕からエネルギーを与える
「それは！」
「行け！ブラックキング！」
　多量のエネルギーを与えられた卵は孵化し、ブラックキングが現れた。ブラックキングはヘルマグマを放ちこちらに攻撃する。俺はそれをバリアで凌ぐ
「ホロボロスとの戦いで体力を消耗しすぎたな…。怪獣の力を纏って形態を維持できるか微妙だな。そのままやるしかねぇか…」
　俺は星斬丸を仕舞い、ブラックキングと組み合う
「流石は様々なウルトラマンを苦しめただけの事はあるな。正面からぶつかっても勝てない。だが…」
　俺はブラックキングの頭部に手を当て、ゼロ距離からエネルギーを放出する。ブラックキングは苦悶の表情を浮かべながら唸る。その隙に右腕にエネルギーを纏い、チョップで角を破壊する

「よし！」
　俺は一度距離を取る
「ガイスティウム光線！」
　ブラックキングもヘルマグマで応戦。光線の撃ち合いとなる
「やべぇ…エネルギーが…」
　エネルギーを消耗しすぎたことによりヘルマグマによって押されてしまう。ヘルマグマが俺の数メートル手前まで迫った時…
「何やってんのよ」
　グリードが巨大化し、ブラックキングに飛び蹴りする。それによりブラックキングは吹き飛ばされた
「大丈夫？」
「何とかな…」
「とりあえず片付けるわよ」
「ＯＫ」
　２人でブラックキングを抑え込む。しかし、自慢の怪力で振りほどかれ、尻尾で攻撃する。それをグリードが受け止めた
「今よ」

　俺は亜空間からギャラクトロンベイルを取り出す
「オラァ！」
　そして尻尾を切断した。尻尾を切断された痛みでブラックキングは地面にのたうち回る
「トドメを刺すわよ」
「「ガイスティウム光線（グリップビーム）」」
　２人の光線は混じり合い、ブラックキングの腹部に命中する。そして爆発四散した
「あ。同化のこと忘れてた」
「ある程度残ってればメダルは作れるからそんなに落胆しなくてもいいわよ」
「そういえばあっちはどうなった？」
　俺はＺたちの方を見る。そこにはＺはおらず、残っているのは悔しがるバロッサ星人と地面に突き刺さったベリアロクのみだった
「俺様は斬りたい時に斬りたいものを斬る」
　そういうとベリアロクはどこかへ飛んで行った。俺たちはベリアロクを見送るとバロッサ星人の方を見る
「とりあえず片付けとくか？」
「そうね」

「バロッ!?」
俺は光弾、グリードはペアハンド光線で攻撃するしかし上手く転がられて回避される
「クソォ。一旦退避だ」
バロッサ星人は姿を消した。おそらく人間サイズへと戻ったのだろう
「チッ逃したか…」
「とりあえずあなたの回復が先ね。ブラックキングの肉片を回収して帰りましょう」
「しょうがない…。ガディバ」
俺はガディバを腕から召喚する
「ブラックキングの尻尾と角を回収しろ」
「了解」
ガディバはそのガス状の体で死体に覆いかぶさり同化した。そして俺の元へと戻った
「回収完了」
俺たちは人間サイズへと戻り、人間態へと戻った
「欲を言うならあのベリアロクも手に入れたかったな」
「あの剣気まぐれそうだし扱うのきついんじゃないかしら?それにあなたには武器もあるでしょう?」

「そうだな帰るか」
　俺たちは帰宅した
「そういえばメダルってどういう感じで作ってるんだ？」
　ノワールをモフりながら俺は問う
「う～ん。説明が難しいわね。私も完全に理解しているって訳でもないし」
「大丈夫なのか？」
「大丈夫よ。そうね…。例えばダダの縮小光線銃ってあるじゃない？」
「ああ。何なら持ってるしな」
「あなたはどうして光線を受けると小さくなるかって原理を考えたことはあるかしら？」
「確かに言われてみるとないな…。」
「つまりそういうことよ。構造を理解していなくても使い方さえ分かっていれば使うことはできる。このメダルもそう。ある程度分析をして作り方を断定して、作っているだけ。怪獣の種類が違うだけでほぼコピーしてるだけなのよ」
「なるほどな」
　俺は一人の寄生生命体を思い出した。オーブオタクの懐古厨ことチェレーザは、オリジナルを元にループジャイロの海賊版を作っていた。物語の最中それが故障し、新たに

作り出すことも出来ていなかったのを見ると、彼も構造を理解していなかったんだろう
「もうすぐ出来るわよ」
彼女は端末を操作する。すると液体に満たされた容器の中に浮かんでいた白いメダルにエネルギーが注入され、ブラックキングの姿が浮かび上がる
「おお!」
「完成よ。私流の作り方だから本家大本のものとは違うかもしれないけれど品質は保証するわ」
グリードからメダルを受け取る。すると大きな地響きがなった
「何だ?」
「確認しましょう」
グリードは端末を操作し、俺と彼女の間にモニターを浮かび上がらせる
「あらあの剣取り戻したのね」
Zの手元にはベリアロクが握られている。Zはベリアロクを巧みに操り、バロッサ星人を圧倒する。そしてエネルギーを左腕に集中し、デルタブレイカーでとどめを刺そうとする。しかし、なんとか免れたバロッサ星人は空中へ飛び上がり逃亡を図る。Zはベリアロクを構え直す
「あれは…」

「ベリアルの顔面が出てくるの面白いわね」
　ベリアロクからベリアルの頭部が飛び出し、バロッサ星人をかみ砕く。それによってバロッサ星人は倒された
「大海賊地球に死すねぇ」
「バロッサ星人ってセンスないわよね」
「メフィラスのラッキョウもどうかと思うがな」
「何を言っているの？あれはメフィラス淑女の証よ。これはあなたの頭にたたき込んであげる必要がありそうね」
「ひぃ…」
　この後ラッキョウの素晴らしさについて夜が明けるまで語り続けられたのだった。
裏でセレブロの計画が進行しているとも知らず

18話

「パゴスか…。懐かしいな」
俺は町へ放たれた分子破壊光線をバリアで防ぐ
「ようやく来たか」
ウインダムとキングジョーが現場に到着したようだ
「パゴスは攻守ともに優れた怪獣だが弱点さえつけばあいつらでも倒せる。俺の出番はないか…」
そう考え、戦闘中の彼らに背を向け帰ろうとすると赤い傘を持った昭和風の格好をした女性が建物の陰にたたずんでいた
「おい!そこはあぶねぇから避難した方がいいぞ」
俺は彼女に近づくすると彼女はパゴスに向かって手をかざし、粘性のある液体を飛ばした。すると暴れていたはずのパゴスがそこから消失した
「お前人間じゃねぇな? いや乗っ取ってるって言った方が正しいか?」
俺は腕から振動波を生み出し彼女を吹き飛ばす
「正体を現したらどうだ? 誘拐怪人ケムール人」

「お前人間じゃないな？」
　彼女の顔がケムール人へと変化する
「目的はなんだ？どうせ若い人間の肉体なんだろうが」
「ほう。我々のことを知っているのか？我々の来訪はこれで２度目だ。１度目は５４年前…」
「お前たちは高度な科学力を持ち、大幅な寿命の延長を可能にした。しかし体の老化は防げない。だから地球人の若い肉体を狙った」
「そうだ。私の同胞は日本に降り立ち多くの人間を誘拐した。そして多くの同胞達が人間との合成手術を受けた。しかし私が合成手術を受けた際、事故が起きた」
「事故？」
「人間と混じり合い、２つの肉体を得てしまったのだ」
「なるほど。２度目はその肉体を使って人間に紛れ、人間を誘拐しようって魂胆か」
「理解が早いな。出来れば邪魔をしないでほしい」
「嫌だと言ったら？」
「こうするまでだ」
　彼女の体は完全にケムール人へと変化する。そして頭の先端の突起から液体を撒き散らした。俺はそれをジャンプで回避し、怪人態へと変身した

「やはり人間ではなかったか」
ケムール人は独特な走り方で俺の方へと向かってくる
「肉体改造されてるだけあってかなり早いなだが…」
俺は地面を蹴り、一気にケムール人の目の前まで移動する。ケムール人は液体を撒くが、しゃがんで回避し、それをバネに起き上がりながら腹パンする
「自動車程度の速度なら亀と大差ない」
吹き飛んだケムール人は何とか起き上がり逃走を図る。しかし、突然頭を抱えて苦しみ出した
「なんだ?」
ケムール人の姿が女性の姿へと変化していく
「本来の肉体の持ち主が抵抗しているのか」
しばらくすると完全に人間の姿に戻りこちらに近づいてくる。そして俺の肩を掴んで語りだした
「お願い！私を殺して！意識がある今のうちに！」
「悪いがちょっと事情があってな。俺はこの文明に手を出せない。お前を殺すことは出来ない」
「私の体は半分ケムール人！だから！」

「だが半分は人間だ。俺にはお前たちを分離する術を持っていない。自殺は出来ないのか？」
「何度も試したわ…。でもあいつがそれを許さない」
「とりあえずしばらくあんたの傍にいる。ケムール人は普通の人間にとっては脅威だ」
「ありがとう」
　俺たちはしばらく他愛のない事を話しながら歩く。するとボロい観覧車の見える公園に辿り着いた
「あれは…ハルキか」
　そこには武装をしたハルキが何かを探すように歩き回っていた。おそらくパゴス消失の原因を探っているのだろう
「懐かしいなぁ…」
　ハルキが呟く。すると彼女がハルキに近づき話しかける。俺は物陰から様子を伺うことにした
「ええ…。本当に懐かしい…」
　ハルキが声の方向へ振り向く
「何故…動いてないのかしら…？」
「え？」

「観覧車が…動いてない…」
「止まってもう１０年ですよ。何しろ昭和の大昔に建てられた激渋アトラクションですから」
　彼女は観覧車を眺め続ける
「乗ったことあるんですか？」
「ええ。子どもの頃何度も」
「俺もです！親戚の家が近くにあってよく連れて来てもらってました」
「頂上から見ると街並みがとても綺麗で…」
「夜景がまた抜群なんですよね」
「まるで王女様になった気分」
　彼らの思い浮かべる景色はきっと違うものなのだろう。そう考えながら2人の様子を観察する
「ここに来れてよかった…。これでもう…思い残すことはないわ」
「え？」
　彼女がハルキに背を向け去ろうとする
「ちょっと待ってください！」
　彼女が振り返る

「名前…聞いてもいいですか？」
「カオリ」
「カオリさん。俺ハルキって言います。ストレイジの隊員です。今任務中ですけど、もし悩みがあるならお話くらい聞きますよ」
　おそらくハルキの目にはカオリは自殺願望者に写ったのだろう。あながち間違いではないが
「ストレイジ？」
「あれ？知りません？怪獣退治の専門家。怪獣や宇宙人からみんなを守る。それが仕事です」
「怪獣や…宇宙人から…」
　カオリは傘を落とし、ハルキに掴みかかる
「じゃあお願い！私を殺して！」
「はい!?」
「もうすぐ大変なことが起きる！手遅れになる前に今すぐ私を！」
「カオリさん!?待って落ち着いて」
　すると突然カオリが苦しみ出した
「カオリさん？大丈夫ですか？」

「寄るな!!」
　そんな時ハルキに通信が入る
「聞こえてます!今取り込み中で!」
　カオリがハルキに手をかざす
「不味い!レイキュバス!」
　俺は物陰から飛び出しレイキュバスの力を纏う。そして放たれた液体を火炎で燃やした。不意打ちに失敗した彼女は自身に液体をかけ、その場から消える
「あれ?ん?なんだこれは…」
　ハルキが地面の液体に気がつく
「それに触れるな!」
　俺は地面に散らばる液体に火炎を放つ。液体は可燃性のため、激しく燃え始めた
「うお!?あれ?あんたは!」
「よお。元気か?」
「俺たちのこと見てたのか?カオリさんは?」
　彼女について言ってもいいものか…。おそらく言わなくても後々知ることにはなるだろうが…
「彼女なら消えたよ。さっきのパゴスと同じようにな」

「そんな…」
「正確な答えは自分の目で見るといい。彼女はお前にしか助けられない」
「答え…？それに俺にしか助けられないって？」
「安心しろ俺も手伝ってやる」
　俺はネロンガに切り替え、透明化で姿を消した
「おい！待て！」
　俺はその場を後にした
「へぇ…。ケムール人ねぇ」
　部屋に戻った俺はグリードに今日あったことを話した
「ケムール星は確かメフィラスの支配下にあったはずだろう？」
「ええ。なんだったら人とケムールの合成手術の技術はメフィラス星のものだし」
「２人を分離させる手段ってのはないのか？」
「まず無理ね。合成の技術はかなり高度で細胞レベルで定着させるものなの。そうね…それこそ宇宙の針。ベリアロクみたいな常識から外れたものでゴリ押すしかないんじゃないかしら？話を聞く限り完全な合成をしているわけではないし、希望はあるわ」
「なるほどねぇ…。結局今回の件はＺに委ねられてるって訳か…」
「どの程度かは分からないけど前回の反省を活かして今回はかなり効率よく誘拐するん

じゃないかしら。だから私達も早急に対処しないとケムール星に飛ばされちゃうわ」
「さて、どうしたもんかねぇ…。ケムール人自体の戦闘力はゴミ同然だが能力も厄介だし、器が人間なせいで見つけづらい」
「とりあえず私は監視カメラをハッキングして探すからガイストくんは足で探してちょうだい。監視カメラだけでは限界があるから」
「わかった行ってくる」
俺は部屋を出て先程の公園へと向かった
「やっぱすぐに見つかるわけねぇか」
俺は付近を歩き回る。すると…
「よお。さっきぶり」
ハルキがそこにいた。こいつもカオリを探しているのだろう
「おいさっきのはなんだったんだ!?」
「あれ?まだ全貌をわかってない感じか?」
俺たちが会話をしているとハルキの無線から悲鳴が聞こえ、途切れた。宇宙人の波動を感じる。おそらく無線の相手はケムール人にさらわれたのだろう
「行くぞ」
「押忍」

俺とハルキは現場へと向かう。俺たちは倉庫の中へと入り、床に倒れているカオリを発見した
「大丈夫ですか!?カオリさん！」
ハルキがカオリに駆け寄る
「ハルキくん…」
「さっき自分の先輩の悲鳴が聞こえました！一体何があったんですか!?」
「私またやってしまったのね…」
カオリはおそらくヨウコが被っていたであろうヘルメットを見てそう言った。すると突然ハルキから銃を奪い取り、銃口を自分に向ける
「ちょっ何してるんすか!?」
ハルキは必死に銃を奪い返そうとする
「やめろ！」
ハルキはカオリから銃を奪い取った
「ハルキくん私を撃って！まだ人間として話せるうちに！お願い！何度も自分から命を絶とうとした。でもあいつがそうさせてくれないの！」
「あいつ?あいつって誰っすか!?」
カオリがまた苦しみ出す

「カオリさん。だっ大丈夫すか?カオリさん?」
彼女はハルキを突き飛ばそうとする。俺はハルキの服を引っ張り回避させる
「うお!?何するんすか!?」
「奴を見ろ」
ハルキは彼女の方を見る
「お前…。人間じゃないな?半分は人間、半分は…ウルトラマン!」
彼女の顔が一瞬ケムール人へと変わる
「私と同類だ」
ケムール人は先程の説明をハルキに話し出した
「時を経て、再び地球人誘拐が計画され、私は実行役に志願した。この姿なら、人間達に怪しまれないからだ。おかげでスムーズに計画のテストを行うことができた」
「それじゃあ…さっき自分を撃とうとした…。あれは…」
「地球に戻った途端、制御したはずのカオリの精神が時折主導権を奪うようになったのだ。故郷を思う人間の気持ちは実に強いものらしい。だが、そんな抵抗は無意味だ」
カオリは完全にケムール人へと姿を変える。そして突起からハルキに向けて液体を発射する
「危ねぇ!」

俺はバリアで液体からハルキを守る。弾かれた液体が地面に落ちている銃に当たり、消滅した。ハルキがそれに驚いている隙にケムール人は独特な走り方でその場から逃げ出す

「待てぇ！」

俺とハルキはケムール人を追いかけ外に出た。ケムール人は観覧車の前に辿り着くと、怪光線を腕から放ち、装置を取り付けた。ハルキが銃口を向ける。するとケムール人からカオリの人格が現れた

「ハルキくん！ケムール人は観覧車の頂上で爆弾を爆発させるつもりよ！」

「カオリさん！」

「あの中には人間を転送させる液体が詰まってる。爆発したら雨雲と混じりあって東京中に降り注ぐわ！」

「なるほど。そいつは効率がいいな」

「人間め！邪魔をするな！」

俺が感心しているとケムール人がカオリから主導権を奪い返す。そして観覧車を起動させる。ハルキはZライザーを構え、インナースペースへと入っていった。ケムール人も巨大化する

「俺も行くか…」

俺は怪人態へと姿を変え、巨大化する
「おいＺ！あいつらを分離するにはお前のベリアロクしか方法はない。街への被害はできるだけ俺が守ってお前をサポートする。お前はそいつで叩き切れ」
Ｚは頷きケムール人の元へと駆け出す。ケムール人もＺに向かって走り出しお互いに戦闘を開始する
「やはりケムール人の戦闘力は低いな」
Ｚはケムール人を圧倒的する。しかし、カオリのことを心配してか上手く攻撃できていない。ついにはケムール人のタックルによって吹き飛ばされてしまった。するとケムール人が苦しみ出し、カオリの人格が現れる
「ハルキくん！私に構わずこいつを倒して！転送された人達を助けるにはそうするしか！」
彼女に諭されるがＺは躊躇してしまう
「ハルキくん！」
ケムール人の人格が戻り、液体で攻撃し始める
「ギャラクトロン」
俺はギャラクトロンｍｋ２の力を纏い、魔法陣状のバリアでケムール人の攻撃を全て防ぐ

「早くしろ！」
　Ｚは地面に刺さったベリアロクを引き抜くとケムール人に向かってそれをかざした。ベリアルの目から怪光線が放たれケムール人に命中する。おそらく分離光線なのだろう。しかし…
「ダメだその程度の力ではあいつらを分離しきれない！」
「ハルキくん！」
　カオリの人格が現れる
「ハルキくん！」
　先程の分離光線の影響か、カオリはケムール人から上半身を抜け出し、ケムール人を抑えつつ観覧車の動きを止めた
「俺も手伝うか」
　俺は腕にエネルギーを集中させ、輪っかを作り出しケムール人の動きを封じる
「ハルキくん！」
　カオリの叫びに決心したＺはデスシウムスラッシュで２人を引き裂きく
「ガイスティウム光線！」
　俺はケムール人に光線を放って撃破し、Ｚはデルタクロスショットで爆弾を観覧車から離した。爆弾はデスシウムスラッシュによって生まれた異次元の穴に吸い込まれ、そ

のまま爆発した
「終わったか」
ケムール人が倒されたことで消滅した人々とパゴスは元の場所へと帰っていった
数日後俺はとある施設に忍び込んだ
「調子はどうだ?」
「私は元気よ。センターの人にも良くしてもらってるし」
「悪かったな。俺はお前を助けることが出来なかった」
「そんなことないわ。あなたがいなければ街にもっと被害が及んでいたかもしれないし、ケムール人を抑えることも出来なかったかもしれない」
「そう言われると少し報われる。お詫びと言っちゃなんだがお菓子を持ってきた」
「ありがとう。開けてもいい?」
「どうぞ」
「これは?」
彼女は箱からお菓子を取り出す
「そういえばそれが流行し始めたのは比較的最近だったな。それはマカロン。卵白を使った焼き菓子だ。食べて見てくれ」
「美味しい!」

カオリの顔から笑みがこぼれる

「そいつはよかった」

俺たちはマカロンを食べながら談笑を楽しんだ。５４年の空白。俺には計り知れないものだが彼女ならきっと大丈夫だろう。そう思いながら小さなお茶会を楽しんだのだった

19話

「市街地にベムスターが出現したみたい」
俺がノワールをモフっているとグリードがモニターを見ながらそう言った。俺もモニターを覗く
「ベムスターぐらいならあいつらでも倒せるだろ」
突然グリードの持つ機械から警報がなる
「強力なエネルギー反応を検知」
「ベムスターにそんな力はないだろう?見た感じデビルスプリンターに侵されているわけでも無さそうだし」
「違うわ。反応があるのは…」
すると空にヒビがはいった
「ヤプールか…」
ヤプール。かつてウルトラマンエースと戦った異次元人。怪獣を超えた怪獣である超獣を従え、様々な宇宙で暴れた。しかも厄介なのは、たとえヤプールを倒しても知的生命体のマイナスエネルギーをエネルギー源としているため、完全に消し去ることが出

来ない。怨念として存在し、復活することが出来る
「厄介だな…」
「これだけの高エネルギーとなるとヤプールの残留思念かそれに準ずるものの可能性が高いわね。その辺の野良超獣とは比べ物にならない強さだと思った方が良さそうね」
「そんなレベルのやつが来るのか!?」
「ええ。場合によっては私もでないと不味いかも」
「とりあえずそっちで計測を続けてくれ。俺はいつでても良いように現場に向かう」
「わかったわ」
　俺は部屋を飛び出し、市街地へと向かった。そこには既にキングジョーが分離して待機している
「さすがに用意がいいな。かなりヒビも大きくなってるし俺も準備しておかねぇとな」
　俺はZライザーを構え、その時を待つ。空からバリバリとガラスの割れるような音が聞こえ始める
「来たか」
　空に穴があき、そこから一筋の稲妻が地面へと降り注いだ。地面が爆発し、黒い煙が立ち上る。その煙はまるで逆再生でもしたかのように小さくなって消え、そこから超獣が姿を現した

「お前か…。殺し屋超獣バラバ！」
バラバは鼻から強力な火炎を放射し、街を破壊し始める。キングジョーとウインダムは一斉射撃を開始し、キングジョーはロボットモードへ移行する
「俺も行くか…」
俺はＺライザーのトリガーを押し、インナースペースへ入る
「ベムスターさん」
『ｂｅｍｓｔａｒ』
「闇の力お借りします！」
俺はベムスターの力を纏う
「さあ始めようか」
俺は亜空間から星斬丸を取り出す
「喰らえ！」
俺は星斬丸でバラバに襲いかかる。しかし、攻撃しても全く怯むことはなく、右腕のモーニングスターで振りのけ、火炎放射で攻撃してくる。俺は左腕に装備したベムスターを模した盾で火炎を吸収し、一度距離を取る
「超獣が痛みと恐怖を持たないことを失念していたな…」
俺を振り払ったバラバはウインダムを執拗に攻撃する

「エース…エース！」
「喋った!?ウインダムをエースだと思い込んでいるのか?」
　キングジョーは馬乗りになってウインダムに攻撃するバラバに砲撃を開始する。しかし、その攻撃は全てバラバが生み出した異次元の穴へと吸い込まれてゆき、逆に異次元の壁を破ったエネルギー波によって倒されてしまう
「遠距離攻撃はあれで防がれて近距離も怯まないから隙が出来ない…。厄介だな…」
　俺は再度バラバに接近し、切りかかる。しかしモーニングスターで防がれ、鎌で切りかかられる
「危ねぇ!ガイスティウム光線!」
　何とか鎌の攻撃を回避した俺は光線をバラバに叩き込む。しかし…
「効いてない!?」
　バラバは至近距離からの火炎放射で俺を攻撃し
「痛!敵に回すとこんなに厄介なのかよ!」
　そこにウルトラマンZデルタライズクローが登場し、ベリアロクから放った光線でバラバを吹き飛ばす。しかし、バラバはすぐに起き上がり、テリブルブレードでZの持つベリアロクを吹き飛ばした。ビルに刺さったベリアロクをZは回収するために走るが、バラバが腕からチェーンを放ち、Zを手繰り寄せる

「ゼットン！」
　俺はゼットンの力に切り替え、テレポートでベリアロクの元へ移動する。ビルから抜こうと柄に触れると電流が流れた
「痛ってぇなぁ！」
「俺様を手にしてお前は何をする？」
「めんどくせぇ…。俺は別の宇宙で人間に絶望し、運良く手に入れた力で宇宙を放浪し本当の正義ってもんを見ることにしたんだ。目的を達成するために利用出来るものはなんでも利用し、障害を排除する。俺と同化した怪獣もお前もそのための道具に過ぎない」
「気に入らねぇが面白い。俺様を手にするがいい」
　俺はベリアロクを抜き、刃にエネルギーを溜める
「避けろZ！」
　俺はバラバに向けて三日月形のエネルギーを放つ。それによりZの腕に絡みついたチェーンを斬ることに成功した。Zが体勢を立て直すためこちらに後退する
「おい！ベリアロクを返しなさいよ」
　Zがベリアロクを返すようこちらに迫る
「後で返してやる。とりあえずこいつを片付けるぞ」

Ｚは渋々頷き構える。バラバは俺たちに火炎放射をしてくる。それをベリアロクで吸収する

「Ｚ。俺が吸収してる隙に背後から攻撃しろ」

Ｚはバラバの背後へと周り、ゼスティウム光線を放つ。しかし、異次元の穴に光線は飲み込まれ、スネークヘルサンダーで反撃される。バラバは火炎放射を止め、吹き飛ばされたＺにデスミサイルショットで追撃し、デルタライズクローを解除させた。それと同時に俺の持っていたベリアロクも消滅する

「最初から俺のところに来る気はなかったのかよ…」

俺はテレポートしてバラバの元へと移動しゼットンファイナルビームで攻撃する。しかし、テリブルブレードによって弾かれ、振り回されたテリブルブレードによって吹き飛ばされてしまった

「やべぇ！」

そのままの勢いでテリブルブレードがＺへと突き刺さる…と思われたが、何者かによって放たれたエネルギー波によってそれは防がれた

「弱気になるな！Ｚ！」

俺は声のした方向を見る。赤い玉が銀河連邦を遥かに超えて光と共にやってくる。大きなとさかにウルトラホールを携えたシルバー族のウルトラマンがそこには佇んで

いた
「ウルトラマン…エース…」
「エース兄さん!?」
「メダルの力が私をこの地球へと導いてくれた」
どうやらZの所持するメダルの波動を辿り、ここまで来たようだ
「エース…エース!死ねぇ!」
バラバがチェーンをエースに向かって放つ
「させるかよ!」
俺は火球をチェーンに浴びせ、軌道をずらす。その隙にエースは額のウルトラスターからパンチレーザーを放ち攻撃する。しかし、バラバはそれを鎌で防ぐ
「どんな生き物も攻撃を受ければ痛みを感じ、恐怖を覚え隙が産まれる。だが超獣はそんなものは感じ無い」
エースはバラバの攻撃を防ぎつつ多彩な技で応戦する
「すげぇ…流石はウルトラ兄弟。ここまで強いとは…」
「大丈夫かしら?」
グリードが巨大化し俺の元へとやってくる
「ウルトラマンエースのおかげでなんとかな…。これは俺たちの出る幕はなさそうか

な」
「それがそうでもなさそうなのよ」
「エース…エース！」
　バラバは空に異次元の穴を生成し、そこから超獣を呼び出した
「一角超獣バキシム…」
「バラバはあの２人に任せてこっちを対処しましょう」
「そうだな…。ゴモラ！」
　俺はゴモラの力を纏い、超震動波でバキシムを吹き飛ばし、バラバから引き離す
「こっちは俺らが対処する。バラバは任せた！」
　俺とグリードは吹き飛ばされたバキシムの元へと向かう。バキシムは起き上がると、背中の結晶体を発光させ、両腕からバキシクラッシャーを放つ。俺はバリアでそれを防ぎ、グリードはペアハンド光線を無数に放ち、バキシムを攻撃する。しかし、バキシムは怯むことなく、バキシクラッシャーを撃ち続ける
「不味い！」
　俺のバリアにヒビがはいり始める
「はあああ！」
　グリードは高速でバキシム接近し、飛び蹴りでバキシムを吹き飛ばす

「ナイスだ！レッドキング！」
　俺はレッドキングの力を纏い、接近戦に持ち込む
「オラァ！」
　俺はバキシムの腹部を殴り続け、グリードは上空からペアハンド光線を撃ち続ける。しかし、有効なダメージは与えられていないようで、俺は鋭い棘の付いた腕によって殴り飛ばされ、グリードはユニコーンボムによって撃墜される
「クッソ、強えぞこいつ…」
「この個体自体にはヤプールの残留思念は入っていないようだけど改造でも施されているのかしら？」
「なんにせよ強いことには変わらない。俺に考えがあるあいつを何とか引き付けてくれ」
「わかったわ」
　グリードは空中へ浮かぶとペアハンド光線を撃ってはテレポートで少し離れた所へ移動し、ペアハンド光線を撃つというのを繰り返す
「やるか」
　俺はZライザーを取り出し、メダルをスキャンする
『ｂｅｌｉａｌ』

「これでエンドマークだ!」
　俺はトリガーを押し、ベリアルの力を纏う
「くたばれ!デスシウム光線!」
　俺は腕をクロスし、禍々しい黒い光線をバキシムに浴びせる
「オラァ!」
　俺は光線を撃ち続けたままバキシムに接近し、ゼロ距離攻撃する。ついに耐えられなくなったバキシムは爆発四散した
「Ｚライザーである程度安定しているとはいえ、流石にベリアルの力を単体で使うのはきついな…」
　俺はベリアルの力を解除する。俺たちはＺたちの元に向かった。エースはバラバをストップリングで拘束する
「俺も手伝うか」
　腕にエネルギーを溜め、縄状に成型し、バラバに巻き付ける
「今だＺ!スペースＺだ!」
「スペースＱの類似技か?俺たちもエネルギーを分けるぞ」
　俺とグリード、そしてウルトラマンエースはＺのウルトラホールにエネルギーを集中させる。Ｚはエネルギーをボール状に固め、バラバに投げつける

「ヤプール死すとも…超獣死なず」
バラバは捨て台詞を吐くと体が真っ二つになり、左半身から崩れるように倒れ、爆発した
「終わったか」
「みたいね。バキシムのサンプルも回収したことだし帰りましょうか」
「そうだな」
俺たちは変身を解き、帰路に付いた。その夜、俺は部屋でくつろぎ、グリードがバキシムメダルの生成に勤しんでいると突然インターホンが鳴った
「珍しいな。お前何か頼んだのか?」
「いいえ。あなたじゃないの?」
「俺も違う。とりあえず出てみるか…」
俺は玄関の扉を開ける
「夜分遅くにすまない」
「あんたは!」
そこにいたのは北斗星司。ウルトラマンエースの人間態だった
「何故あんたがここに?」
「聞きたいのはこちらの方なんだがな。上がっても?」

「どうぞ」
　俺は北斗を部屋へと案内する
「そちらのお嬢さんは先程のメフィラス星人かな？」
「あなたウルトラマンエースね？」
「さて本題に入ろうか。君たち２人は宇宙でも訪ね者扱いされている存在だ。我々宇宙警備隊やギャラクシーレスキューフォースの方でも注視している。そんな君たちが何故ここに？」
「俺は依頼でこの星に潜伏しているとある生命体を抹殺するために来た」
「私はペダン星人に追われて潜伏してる感じね」
「なるほど…。この星の住人や文明に手を出すつもりは？」
「ないですよ。こいつも俺も目的が達成されればこの星を出ていく」
「そうか。なら今回は君たちを見逃すことにするよ」
「そんな簡単に見逃していいのかしら？私もガイストくんも結構色々やらかしているわけだし」
「君たちに敵意がないのは伝わった。それに君たちが無差別に生命を殺戮した記録はない。だから今回は見逃させてもらう」
「そいつはありがたい」

「だが少々提案したいことがあってね」
「何かしら？」
「事が済んでからでいい。２人をこちら側に勧誘したい」
「光の勢力に付けってことですか？」
「ああ。最近はこちらも人手が足りていない。待遇もなるべく君たちが望むものにしよう。どうかな？」
「まさかウルトラ兄弟の１人からスカウトされるとはね。少し考えさせてほしいわ」
「俺もこの場で決断は出来ない。仮にこっちの勢力からそちらに行くのなら色々と面倒なことがあるしな」
「わかった。もし了承してくれるなら光の国のウルトラスペースポートに来てくれ。話を通しておく」
「わかった」
「それじゃあ他の任務が残っているからお暇させていただく。今日はありがとう」
　そう言い残し、エースは地球を去っていった
「光の勢力か…」
　俺はベットに寝そべり呟く
「なんにせよセレブロを片付けなきゃ始まらないからな…」

俺は目を閉じ、眠りについた

２０話

「世界初の人工生命「Ｍ１号」を産んだ若き日本人生物学者稲葉瑠璃氏ねぇ」
　俺はスマホでネット記事を眺める
「どこの地球も人工生命を作り出すとオランウータンみたいな姿になるものなのか？」
　Ｍ１号はウルトラＱに初登場した人工生命であり、当初はゼリー状の物質だったが記者がカメラのフラッシュをたいたことにより自己進化したといわれている。後に同一個体とおぼしきＭ１号がウルトラマンＸに出現した。しかし、この地球の個体は文章を読んだ感じこの姿で生み出されたようだ
「そんなのある程度の科学力のある星ならどこにでもあるわ。それよりこっちを見て」
　グリードはモニターをこちらに見せてくる
「これは…、太平風土記か？この前のホロボロスのものとは違うようだが？」
「この記載を見る感じ、おそらくエンマーゴだと思うの。現世に現れし闇魔亜呉、地上に災厄をもたらさん」
「エンマーゴか…。正直俺が倒せるか微妙なんだが…」
　エンマーゴはウルトラマンタロウに登場した闇魔大王をモチーフにした怪獣で、スト

リウム光線をも無効化するほどの強固な盾と、岩をも切り裂く刀を所持する恐ろしい怪獣だ。タロウの首を切断するなどかなりインパクトが強い。地蔵の神通力により動きを封じ、復活したタロウによって倒されたと記憶している
「たぶんなんとかなるわ。あなたも私も相手を拘束する技くらいはあるし、あなた確かルグスの花粉を持っていたでしょう？動きを封じさえすれば倒せるはずよ」
「何でわざわざこいつをたたき起こして倒す必要があるんだ？」
　俺はグリードに疑問をぶつける
「諸事情でエンマーゴの刀が必要になったのよ。本体はあなたにあげるわ」
　劇中では使われなかったがエンマーゴは天候を操ったり、地震を引き起こしたり、催眠術をかける能力を持っている。こいつと同化することが出来れば相当な戦力アップになるだろう
「よし。その話乗った」
「じゃあ今からいきましょう」
　俺たちは奥多摩町へ向かった
「奥多摩は来たことなかったけどいいところだな。ゆっくり観光したい」
「そんなのは後よ、日が昇っているうちに片を付けるわよ」
「しゃあないな」

俺達は山道を進んで行く、しばらく進むと開けた場所に出た
「何だこれ？」
そこには地蔵がところ狭しと並べられている
「あそこに階段があるわ。行ってみましょう」
階段の両脇にも無数の地蔵が並べられ、何だか不気味だ
「夜に来なくてよかったわ。不気味過ぎる」
階段を上り終えると、視界の奥に倒壊寸前の小屋が見えた。壁はつる性の植物がびっしりと巻き付き、そこら中にコケが生えている
「ここっぽいわね」
「そういえばどうやってエンマーゴをよみがえらせるんだ？別の地球ではエンマーゴを封印した地蔵の怒りをかってしまって地蔵が人間を懲らしめるために封印を解いたらしいがここにある地蔵をすべてぶち壊す訳にもいかないだろう？」
「封印されている正確な座標さえ分かればそこにエネルギーを注ぎ込んで復活させられるはずだわ。たいていの封印は一定以上の付加がかかると壊れるか一時的に消えるはず。エンマーゴが自力で脱出できないほど弱っていれば考え直さないといけないけれど記載を見る感じ普通に封印してるだけっぽいから封印さえどうにかすればいいはずよ」

「なるほど…。じゃあこの寂れた小屋で文書でも探すか？」
「あなたはそうしてちょうだい。私は超音波とかを使ってここ一帯を調べてみるわ」
　俺は小屋に入り、それらしいものを探す
「カビくせえな…。本当にあるのか？うわっ!?」
　突然床が抜け、地下室に落ちてしまう
「痛ってぇ…。ここは地下室か？」
　地下室は非常に狭く、おいてあるものも金庫のようなものだけであった
「とりあえず開けてみるか…」
　俺は鍵を壊し、無理矢理金庫をこじ開けた
「これっぽいな」
　そこには闇魔のようなものが描かれた紙と、それを封印したと思われる山の場所が記されていた
「見た感じ向かいの山の頂上っぽいな。あいつに伝えるか」
　俺は小屋を出てグリードの元に戻る
「収穫はあったかしら？この山にはそれらしい空間とかは見つからなかったわ」
「それらしいものを見つけた。向こうの山の頂上に封印されているらしい」
「通りで見つからなかった訳ね。じゃあ行きましょう」

俺達はそこに向かう
「じゃあ早速始めるか…」
俺は地面に手を当て、エネルギーを送り込む
「地中にある結界らしきものが消滅しかけているわ。もう少しよ」
俺はエネルギーを送り続ける。すると突然地面が揺れ出し、黒雲が山の上空に立ちこめ、落雷が鳴り響く
「地中から膨大なエネルギー反応を感知。出るわよ」
俺達はその場からジャンプで飛び退く。すると一際大きな稲妻が俺達のいた場所へと降り注ぎ、山が崩れ、エンマーゴが姿を現した
「こいつがえんま怪獣エンマーゴ…」
エンマーゴは低く唸ると、周囲を見渡す。そして、俺達を見つけると、黒い煙で攻撃してきた。俺達はテレポートで空中へと逃げる。煙の当たった場所を見ると、草木が枯れ、見るも無惨な姿になっている
「あれがエンマーゴのブラックスモーク…。グリード変なことされる前にとっとと始末するぞ」
「ええ」
俺達は巨大化し、エンマーゴに対峙する。エンマーゴは驚くそぶりも見せず、刀を構

え、こちらに突撃してきた。エンマーゴは俺をめがけて刀を振り下ろす
「ゼットトン」
俺はすんでのところでゼットトンの力を纏いゼットトンシャッターで攻撃を防ぐ。しかし、ダイヤモンドすら切ることの出来る刀だけあり一撃でヒビがはいってしまった。エンマーゴは何度もゼットトンシャッターを切りつけ、そのたびに亀裂が大きくなってゆく
「おい！早く拘束技を使えよ！」
俺はグリードに怒鳴る
「もう少し攻撃のデータが欲しいのよね」
「クソが！」
俺はエンマーゴが刀を振りかぶった瞬間にゼットトンシャッターを消し、テレポートで背後に回る
「ゼットトンファイナルビーム！」
俺は両腕から波状光線を放つ。しかし、その攻撃は盾で防がれてしまう。そしてエンマーゴは剣を天に向けて掲げる。すると黒雲から俺めがけて落雷が落ちてくる
「危ねえ！」
俺は雷を回避するがたたみかけるように落雷が俺に襲いかかる。さらに、エンマーゴは俺の周囲に地震を引き起こし、バランスを崩したところに落雷で攻撃してきた

「あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟」
俺はもろに落雷をくらってしまう。走ってくるエンマーゴから逃れようと起き上がろうとするが、強力な電気を浴びたせいか体がうまく動かない
「マジかよ…」
エンマーゴが目の前に来て刀を振り上げる。しかし、刀は俺に当たることなく吹き飛び、近くの山に突き刺さった。グリードがエンマーゴの右手に攻撃したようだ
「加勢するのが遅くありませんかねぇ…」
俺はグリードの近くにテレポートする
「データはとれたしあなたは助かった。おまけにあいつの近接武器をなくしたんだからいいじゃない。後は私がやるわ。サポートお願い」
「はいはい分かりましたよ。ギャラクトロン」
俺はギャラクトロンｍｋ２に力を切り替える。怒り狂ったエンマーゴは周囲に雷を発生させる。そして右腕から炎を出しながらグリードに迫る
「動きが単調なのよ」
グリードは炎を難なく回避すると近距離から三発のペアハンド光線を脇腹に放ち、いったん距離をとる。エンマーゴは右腕を天に掲げ、振り下ろすモーションをとると、無数の雷がグリードへと放たれた

「こいつは任せろ」
俺は魔方陣バリアを複数展開し、雷をすべて防ぐ。そのすきにグリードは空中に飛び上がり、スワローキックをエンマーゴに食らわせる。エンマーゴは盾でキックを防ぐが、大きくのけぞってしまう
「今よ」
「ああ」
「「ガイスティウム光線（グリップビーム）」」
左右から放たれた光線に対し、エンマーゴは周囲の地面を隆起させ、なんとか防ごうとするが、最大出力で放たれた光線により、隆起した地面は砕かれ、直撃した。エンマーゴの体には大きな風穴が二つ空き、力なく倒れた
「ようやく痺れがとれてきた…」
俺はエンマーゴの死体へ歩く。そしてエンマーゴの背中に手を当てた時だった。死んだと思っていたエンマーゴが俺の足首をつかむ
「うお!」
だが、グリードがペアハンド光線を腕に放ち、首を山に刺さっていた剣ではねたことにより完全に絶命した

「油断しちゃダメよ」
「マジで危なかったぁ…」
俺は安堵し、もう一度背中に手を当てる。すると、エンマーゴの体は光の粒子となり、俺の体内へと入っていった
「刀も手に入れたし、これで終わりね」
「疲れた…。体中痛たいし、観光しようと思っていたが土産だけ買って帰るか」
俺達は下山し、土産ものをたくさん買い込んで帰路についた

２１話

「ったく人使いが荒いんだから…」
　先日のエンマーゴ討伐を祝してグリードと酒盛りをすることになった。俺は近場で酒とつまみを探し、あいつは全国各地のらっきょうを買い漁っている
「全く…。メフィラス星人ってのはどうしてこうもらっきょうに拘るのかねぇ…。土産買ってこなかったらぶん殴ってたところだ」
　まあ、彼女には敵わないが。そんなことを考えながら会計をし、店を後にする
「あの娘…」
　夜道を歩いていると、前方に長い黒髪に真っ白なワンピースを着た女子高生らしき女性がゆっくりと歩いていた。その足には本来あるべき靴が履かれておらず、素足だ
「何かがおかしい…」
　彼女からは何かただならぬ雰囲気が漂っている。怪獣とも宇宙人とも違う何かが…。彼女が大きな橋の丁度中間地点にたどり着くと、立ち止まって手すりに手をかけ川を眺め始める。すると、彼女は手すりを登り、川に飛び込む。一瞬彼女の姿が２重に見えたが、気にする余裕もなく、俺は怪人態へと変身し、落下する彼女を抱え、向こう岸まで

ジャンプする
「全く…。最近は自殺願望者が多いな…」
俺はケムール人と融合したカオリの顔を思い出す
「おい大丈夫か?」
「どうして止めたの…」
「目の前で死なれちゃ気分が悪い。これから酒盛りなんだよ。それよりもっと突っ込むところがあるんじゃねぇのか?」
俺は今怪人態だ。普通、自殺を止めたことより俺の姿や身体能力に驚くはずだ。にもかかわらず彼女はひどく落ち着いている
「あなたのことは知っている。この間奥多摩で猫みたいな宇宙人と一緒に闇魔みたいな怪獣と戦ってた」
「何故知っている?お前は見たところ普通の人間だ。それにあの山には誰もいなかったはずだ」
「幽体離脱って知ってる?」
「肉体と精神を分離して精神体で自由に行動できるようになるあれだろう?まさか!?」
彼女は自身の過去を語り始めた
「私の父は科学者だった。脳に関する研究を長年続けていた。ある日、私のお母さんが

死んだの。その日以来、父は狂ってしまった。毎日酒に溺れ、ものに当たるようになった。そんな毎日が続いていたんだけど、父はとんでもない事を思いついてしまったの。それは脳に特殊な音波を当てて、シナプスの一部を破壊し、肉体と精神を分離させるというものだった」

　彼女は震えながら語り続ける

「父は私を実験体にして精神体にすることでお母さんの精神を探し出すつもりだった。幽体離脱の実験には成功した。でも…」

「何があったんだ?」

「精神体での行動の制御が出来なくなったの。意識は残っているのに体が勝手に動く。私の精神体は父を殺した。それ以降、深夜の12時を過ぎると、私の精神は私の体を離れて行動するようになった。まるで子供がイタズラをするように、人の前に実体化して驚かせたり、ものを盗んだり…。ついには昨日、運転中のトラックの前に現れて事故を起こさせてしまった。これ以上精神体が行動すればきっと死人が出る…」

「だから自分で死のうってわけか」

　俺は似たような怪異を思い出す

「俺の連れが解決出来るかもしれない。着いてきてくれないか?」

「わかった」

彼女は頷くと俺と共に歩き出す
「ただいま」
「おかえ…何がその娘？誘拐してきたの？」
「物騒な事を言うな！」
俺は先程起こった事をグリードに話す
「なるほど…。地球人にしてはかなり面白い発想ね」
「関心してんじゃねぇよ。で治せるのか？」
「ええ。シナプスの欠損具合によってはちょっと面倒くさいけど。とりあえず彼女の脳を調べないことには分からないわ。お嬢ちゃん、こっちにいらっしゃい」
彼女はグリードの元に歩く。グリードは彼女の頭に手を当てる
「結構損傷が激しそうね…。ちょっとまってて」
グリードは奥の部屋へと入っていった
「玄関にいてもあれだからとりあえず上がれ」
彼女をリビングに座らせ、俺はコーヒーを入れて彼女に手渡す。グリードが買ってきたであろうらっきょうを齧りながら待っているとグリードは機材を持ってリビングにやってきた
「これでお嬢ちゃんの脳にジアテルミーを浴びせるわ。これでシナプスの欠損は止めら

れるはず」
　グリードは機材を彼女の頭部に取り付け、ジアテルミーを放射する
「これで完了。ついでにメフィラスボットを入れておいたから、欠損したシナプスに関しては大丈夫よ」
「メフィラスボットって巨大化させるやつじゃないのか？」
　かつてｍ７８宇宙の地球に現れたメフィラス星人はフジ隊員の全身の細胞にメフィラスボットを埋め込み巨大化させていた。パラレルワールドの小説ではそれが影響し、ウルトラマンｆが誕生した
「ええ。確かにメフィラスボットに特定のパターンの電磁波を浴びせると体が肥大化するわ。でも本来のメフィラスボットの使い道は医療目的が主なの。以前にケムール人の話をしたでしょう？人間とケムールの細胞を継ぎ接ぎするのもこれが応用されているわ」
「本当に大丈夫なのか？」
「相当特殊な電磁波だから大丈夫よ。それに余程近くで電磁波が発生しない限りは巨大化はしないはずだわ」
「ええ…」
「そんなに不安なら熱原子Ｘ線を放出する装置でも渡しておきましょうか？」

「そうしてくれ。万一ハルキや俺がこいつの近くでZライザーを使ってしまえばどうなるか想像にかたくない」
「わかったわ。プラズマソウルって持ってる？」
「ああ。これをエネルギー源に使うのか？」
　俺は亜空間からプラズマソウルを取り出しグリードに渡す
「これだけのエネルギー量ならお嬢ちゃんが1日1回巨大化したとしても数百年は持つはずよ」
　グリードはブレスレットのような装置にプラズマソウルを嵌め込む
「出来た。お嬢ちゃん、これを肌身離さず持っていなさい」
「ありがとうございます。お二人のお名前を伺っても？」
「俺はガイスト」
「私はグリードよ」
「私はリリィ。本当にありがとう」
　聞き覚えのある名前だ。どうやらどの宇宙でも似たような怪異や超常現象は起こるようだ
「もう明け方だが送ってくわ」
「あの…そのことなんだけど…」

「ん？何かしら？」
「私身寄りがなくて…」
「マジかよ…」
「いいじゃない。うちに住めば」
「簡単に言うなよ…。本来は1人でここに住む予定で資金もすごいある訳じゃない。それに年頃の女の子を住まわせるとか本当に誘拐犯になっちまうだろ」
「資金に関しては大丈夫よ。株かハッキングで儲ければいい」
「おいおい物騒だな」
「最悪その娘の戸籍をいじれば大丈夫よ。それにこの国では年間８万人が行方不明になってる。１人くらいいなくなっても問題ないわ」
「そういう問題じゃなくね？」
「それに、あなた数百年は生きてるんでしょう？」
「いや肉体は２０前後で止まってる訳だし不味いだろ」
「あなた私と住んでもそんな素振りを見せないじゃない」
「あんたにかなうわけないからだよ。それに面倒だしな」
「ならいいじゃない。ね？リリィちゃん？」
　リリィはクスクスと笑い出す

「仲がいいんですね」
「正直俺たちと関わるとロクなことにならねぇぞ。危険なことに巻き込まれるだろうし」
「さっき助けてくれたでしょ?あんなことできるのあなた達かウルトラマンくらいでしょ。きっとここにいた方が安全だと思う。だから私をここに住ませてください」
　リリィは頭を垂れる
「全く…。なんで俺の周りには自分勝手なやつばっかなんだよ…。いいよ。ここに住むといい。だが、俺たちはいつまでこの星にいるか分からない」
「あなた達がこの星を離れることになったら私も…」
「やめとけ。こいつは見てくれは良いがマッドサイエンティスト。俺はある種殺し屋みてぇな事をやってる。普通の人間がいられる環境じゃない」
　グリードがこちらを睨むが気にしない
「そっか。でもあなた達と一緒にいてみたい。こんなに人の温もりに触れたのはお母さんが死んで以来なかったから…」
「とりあえず俺の依頼が終わるまでだ。いいな?」
「ありがとうございます」
「これで一件落着ね」

なんだかんだですっかり日が登り、腹が減ってくる
「流石に腹が減ったな。何か作って来るから待ってろ」
俺がキッチンに向かおうとするとどこからか強いエネルギー反応が伝わってくる
「何だ!?今のエネルギーは…。グリード」
「今調べてるわ」
「何が起こったの?」
リリィが俺に問う
「どこかで怪獣のかもしれない…。場合によっては俺が行く」
「見つけた。これは中ノ鳥島の衛星からの映像よ」
グリードはモニターを空中に映し出す
「酷い…」
「半径１ｋｍ程が空間ごと吹き飛んでやがる。まさかまたヤプールか?」
「いいえ。これはこの星の防衛組織の兵器のようね。ほら」
モニターを操作するとそこにはｄ４と書かれた爆弾が設置されている様子が映し出されている
「セレブロの計画も佳境ってところか…。おそらくジャグラーもそろそろ動くだろう」
「私達も準備しておかないと不味そうね。流石にこれを真正面から喰らえば私もあなた

もおしまいよ」
「そうだな」
「あの…」
「ん?どうした?すまんなこっちの話ばかりで」
「いや違くて…」
何やら恥ずかしそうにそういうと彼女のお腹がぎゅるぎゅると鳴り出した
「なるほどな。じゃあ適当に作ってくるから待ってろ」
赤面するリリィを背に俺はキッチンへ向かう。ジャグラーにセレブロ、そしてｄ４。おそらくストレイジがウルトラマンを超える兵器を近いうちに完成させるだろう。決戦の日は近い

２２話

「流れ星…?」
　リリィが窓の外を眺め、そう言う
「「来たか（わね）」」姿が
　流れ星は南東方向へと落ちていく
「こないだのｄ４の場所か?」
「ええ。映像を出すわ」
　グリードは空中にモニターを出す。そこにはｄ４によって滅茶苦茶になった中ノ鳥島に隕石がポツンと存在している様子が映し出されている。隕石から黄色い光が漏れ出す。すると、隕石の姿が変形し、怪獣の姿が形成された
「やはり来やがったか…。宇宙凶険怪獣ケルビム」
「隕石が怪獣に!?どういうこと?」
　リリィが困惑しながら問う
「この怪獣はケルビム。強いエネルギーに引き寄せられ、その場所に寄生し、繁殖する。餌が無くなれば別のエネルギーを辿って新たな餌場を探す怪獣よ」

「卵の状態で来やがったってことは親がいる可能性が高いな…。グリード、見つけられるか?」
「う〜ん…。反応がないわね…。いないのか、それとも上手く隠れてるのかしら…」
「あ!」
リリィが画面を指さす。ケルビムが体内の反重力器官を使い、飛び立ったようだ
「マザー探しは後だ。ケルビムの進行方向を出してくれ」
「わかったわ」
グリードは端末を操作し、地図を映す。ケルビムを表す赤い点は真っ直ぐ東京を目指している
「このまま真っ直ぐ行くならこの星の防衛組織のところね」
「d4の残弾でも狙ってるのかね。とりあえずグリードはここでマザーの捜索を続けて、見つけたら連絡してくれ。俺はストレイジの本部に向かう」
俺は部屋を飛び出し、ストレイジの本部へと走った
「不味いな…」
走りながら空を見上げると無数の隕石もといケルビムの卵が地上に降り注ぐ。そしてケルビムも到着したようだ。ケルビムは耳の第2発声器官から重力波を発生させる
「させるかよ!」

俺は変身して巨大化し、飛び蹴りを食らわせる。ケルビムは大きくのけぞりながらも、的確に俺に向かって火球を放つ
「熱！流石に知性が高いだけあるな…」
俺はケルビムの火球を躱しながら反撃のチャンスを伺う。そこにキングジョーが現れ、ケルビムの攻撃を後退しながら回避し、ミサイルで攻撃する。しかしケルビムは好きをみて再度重力波を発生させ、複数の卵を孵化させた
「チッ。孵っちまったか…」
俺は孵化したばかりのケルビムを相手取る。しかし、俺の攻撃を受けても気にもとめず、キングジョーの元へと向かった
「俺のことは眼中にねぇってことかよ！ガイスティウム光線！」
俺はキングジョーに夢中になっている一体を光線で破壊する。しかし、残りの２体が尻尾と腕でキングジョーを強襲する。その時、ウインダムが颯爽と現れ、一体を吹き飛ばした
「いいタイミングだ」
どうやらキングジョーとウインダムは一斉攻撃で一体ずつ処理するつもりらしい
「こっちもやるか」
離れた場所で孵化した２体に向かって走る。キングジョーへ突進する２体のケルビ

ムの片方の首を脇に抱え、もう一方を蹴り飛ばす
「確かお前は耳が弱点だったな?」
俺は抱えているケルビムの両耳を引きちぎり、右手にエネルギーを集中させ、威力を増したチョップで角を破壊する。隙ありと言わんばかりにもう一体が火球を放つ
「そのぐらい読んでるんだよ!」
俺はケルビムを掴み、俺の体の前に移動させ、盾替わりに火球を防ぐ
「トドメだ!ガイスティウム光線!」
火球を受け、グロッキー状態のケルビムに光線を放つ。光線は目の前のケルビムを貫通し、もう一体に当たり、二体まとめて倒すことに成功した
「まだ湧きやがるのか…」
周囲の卵が次々と孵化していく
「エンマーゴ!」
俺はエンマーゴの力を纏う
「これでどうだ」
俺は地面に手を当てる。するとケルビムの真下の地面が針のような形状に隆起し無数のケルビムを串刺しにする
「仕上げだ!」

俺は背後に黒雲を発生させ、ケルビム達に向かって雷を放つ。串刺しにされ、大きなダメージを負ったケルビム達は雷に耐えることが出来ずに絶命する
『マザーの居場所がわかったわ』
グリードがテレパシーを使い語りかけてきた
「一体とこにいるんだ？」
俺は降り注ぐ隕石を光弾で落としつつ聞き返す
「大気圏外のデブリに隠れてるらしいわ。今イメージを送る」
頭の中に宇宙空間の映像が流れ込む
「でけぇ…。一体何メートルあるんだよ!?」
『３００ｍはあるみたい』
「プラズマ怪獣級かよ。早いとこマザーを潰したいが…」
キングジョー達の方を見る。やはり苦戦を強いられているらしい
「あいつらの負担を減らすためにもとりあえず目の前のやつを潰さねぇと…」
孵化したケルビムがまたキングジョーへ向かって行く
「行かせねぇよ！」
俺は左腕から炎を放ちながらケルビムの元へと走る
「喰らえ！」

亜空間から星斬丸を取り出し、ケルビムを一刀両断する。そして剣にエネルギーを纏わせ、もう一体のケルビムへ放つ
「新月斬波!ってな」
再度キングジョー達の方へ目を向けると、ウインダムが倒され、ケルビムがキングジョーに襲いかかろうとする
「不味い!」
俺は再び星斬丸にエネルギーを溜める
「新月ｚ…うわ!?」
背後からまたケルビムが現れ、俺に体当たりしてきた。星斬丸は吹き飛ばされ、俺は地面に倒される。絶対絶命の状態にＺが現れ、キングジョーの周囲のケルビムと戦闘を開始する
「こっちも負けてられねえな」
馬乗りになっているケルビムを蹴り飛ばす。地面に刺さった星斬丸を亜空間へと仕舞う
「レッドキング!」
俺はレッドキングに力をチェンジし、亜空間からギャラクトロンベイルを取り出す
「こっからはゴリ押しでいかせてもらおうか」

俺はＺとキングジョーへ向かうケルビムの数を減らすべく、ケルビムの群れへと突進する
「オラァ！」
ギャラクトロンベイルを振りかぶり、一体を絶命させる。そしてそれをブーメランのように投げつけ複数体のケルビムを屠る
「ガイスティウム光線！」
そして投げたギャラクトロンベイルの軌道上にいない個体を光線で仕留める
「一丁上がり」
戻ってきたギャラクトロンベイルをキャッチし他の群れへと向かう
「キリがねぇ…」
俺はケルビム達の火球による一斉攻撃射撃をギャラクトロンベイルを盾にして防ぎ、空中に飛び上がる。俺はギャラクトロンベイルを仕舞い、１箇所に固まっているケルビムに向かって腕から爆発性の高い岩石を放ち、その場にいたケルビムを一掃する。その時、Ｚが空へと飛び立った。おそらくマザーの討伐に向かったのだろう
「もうひと踏ん張りしますかねぇ…」
俺はＺライザーを構える
『ｖａｋｉｓｈｉｍ』

「闇の力ぁ…お借りします！」
俺はバキシムの力を纏う。こちらへ飛んでくる火球を異次元の穴を開けて防ぎ、ケルビムの背後に異次元の穴を発生させ、火球を当てる。俺は腕からバルカン砲を放ち追撃する
「オラオラァ！」
棘の生えた腕でケルビム達を殴る。そして一体を空中にぶん投げる
「ユニコーンボム！」
頭部の角を発射し投げたケルビムを倒す
「バキシクラッシャー！」
そして周囲のケルビム達に破壊光線を浴びせ蹴散らした
「はぁ…はぁ…。そろそろ限界が近いな…。ん？不味い！」
キングジョーが４体のケルビムに向かって銃口を向けている。膨大なエネルギーがペダニウムランチャーへと溜まり、空間にヒビが入っている
「ゼットンさん！キングジョーさん！ベリアルさん！」
『ｚ―ｔｏｎ』
『ｋｉｎｇｊｏｅ』
『ｂｅｌｉａｌ』

「これでエンドマークだぁ！」
『ｐｅｄａｎｉｕｍ　ｚ―ｔｏｎ』
　ｄ４の余波を防ぐためにゼットンシャッターをはる
「つぶねぇ！」
　バリアには僅かにヒビがはいったものの何とか防ぐことが出来た
「次元崩壊が起きてやがる！何とかしねぇと」
　俺は倒れているキングジョーとウインダムを掴み、テレポートで少し離れた場所へ移動させる。そして上空へと再度テレポートする
「ベリアルさん！」
『ｂｅｌｉａｌ』
「闇の力ぁ…もうちょっとお借りするぜぇ！」
　俺はペダニウムゼットンの変身を解除し、ベリアル単体の力を纏う
「マザーは片付けたようだなぁ？」
　Ｚが隣に現れ頷く
「とりあえずあれを何とかするぞ」
「崩壊を食い止めるぜぇ！」
　Ｚがゼスティウム光線を放つ

「はあああ！」
　俺は全身のエネルギーを両腕に集中させる
「デスシウム光線！」
　Zに続き、崩壊する空間へ光線を放つ
「出力を上げるぞZ！」
　俺たちは光線の出力を上げる。そして何とか次元崩壊を押し返すことに成功した
「はぁ…終わったのか…？」
　限界を迎え、ベリアルの力が消える。そして何とか地面へと着地した
「お疲れ様」
「グリードか…」
「私のテレポートで帰るわよ。変身を解いて」
　俺とグリードは人間大に縮小し、変身を解いた
「さあ帰るわよ」
　グリードは俺の肩に手を置き、テレポートをする。帰宅した俺は、最低限の治療を施し、泥のように眠った

２３話

ピンポーンとインターフォンの音が部屋に響く。何か頼んだか？
「はーい」
リリィが確認のために玄関へと向かう
「ピザの配達？誰か頼んだのかな？」
「一体誰が来たんだ？」
俺は玄関に向かう
「なんかピザの配達に来たみたいなんですけど頼みました？」
「いや…。俺じゃないな。あいつもまだ寝てるはずだし」
俺は深く帽子をかぶったピザの宅配員をまじまじと見る。こいつからは明らかに人間ではない闇の波動がにじみ出ている
「何の用だジャグラーさんよ」
ジャグラーは帽子を取る
「よぉ。元気？メフィラス星人と人間のお嬢さんを侍らせてずいぶん楽しそうじゃないか」

「まさかそんなことを言うために来たんじゃないだろう?」
　俺はジャグラーを部屋に上げ、本題に入るように問う
「この間のケルビムの件は覚えているな?」
「ああ。あんたのところのｄ４とかいう兵器のせいで危うく次元崩壊するところだった」
「あの戦いで俺達は上層部の意に背いたことで解散になった」
「まさか転職の報告でも?…冗談だよ」
　無言でジャグラーがにらみつけるがすぐに会話を再開する
「今あそこは上層部がストレイジの後継組織になってる。ｄ４を安定的に発射するための新型ロボットを開発している」
「そういえばあんたの狙いはウルトラマンの力を超えた兵器だったな」
「ああ。ロボット自体はほぼ開発が終わっているようだが肝心のｄ４の制御機能が完成していない」
「で?その制御機能とやらはどうやったら完成するんだ?」
「完成の鍵になるのはウルトラマンの光線だ。あいつの光線を解析し、活用することでロボットは完成する」
「なるほどねぇ。だがどうやるつもりだ?怪獣にでも変身してＺをおびき寄せるつもり

か？」
「だいたいはそんな感じだ。だから手伝え」
「全く…。分かった手伝ってやる。リリィ、留守は頼んだ」
「う、うん」
「じゃあなお嬢さん」
　ジャグラーはひらひらと手を振り、俺を連れて部屋を出た
「どこへ行くんだ？」
「ＧＡＦＪの管理する博物館だ。ちょうどいい道具がいるらしいからな」
「道具？」
　俺はジャグラーに先導され博物館へと向かう
「道具ってのはあれのことか？」
　俺の指さした先にはこそこそと建物へ侵入を試みているバロッサ星人がいた
「ああ。あいつに暴れてもらう」
　バロッサ星人に続き俺達も建物に侵入する
「おまえはあいつらに顔が割れてる。ここで待ってろ」
　そういうと人間サイズのＺとバロッサ星人の戦闘に乱入し、バロッサ星人をかばった
「このまま倒してもらっちゃ困るからなぁ」

バロッサ星人はこの状況に困惑しつつもどこからかタピオカドリンクを取り出した
「地球のデンプンがぁバルバル細胞を活性化させるバルゥ！」
そう言うとバロッサ星人はタピオカを取り込み、巨大化した
「なるほど。あいつらはデンプンを摂取することで巨大化できるのか」
そうこうしているうちにバロッサ星人は破壊活動を開始した
「何が目的でこんなことを!?」
「さあな」
ジャグラーがその場を去る
「こいつは俺も外に出た方がよさそうだな」
俺は気配を消しながら建物から脱出する
「この後はどうするんだ?」
俺はジャグラーと合流し、この後の作戦を聞く
「とりあえずしばらくはあれに任せる。もしダメそうなら俺達が出てうまいことZに光線を出させる」
「分かった」
こうしてしばらくはバロッサ星人とZの戦いを観戦することになった。バロッサ星人はゴロン棒を振り回してZに攻撃するがうまくいなされている

「あのバロッサ星人弱すぎねぇか？」
　追い打ちをかけるようにセブンガーが登場し、ベータスマッシュにタイプチェンジしたＺとともにバロッサ星人を追い詰める
「ようやく来たか」
　ジャグラーが眺める方を向くとキングジョーが現場に到着した。キングジョー、セブンガー、Ｚの連続攻撃を食らい、バロッサ星人はダウンする
「チッ。使えねぇやつだ。仕上げは俺達でやるか…」
　俺達はダークＺライザーとＺライザーを取り出し、それぞれ変身する
『ｔｙｒａｎｔ』
『ｔｒｙｋｉｎｇ』
「とりあえずＺの相手をするぞ」
「了解。久々にウルトラマンとの戦闘だな。骨がなる」
　俺はモーニングスターのついた腕を回しながら体をほぐす。トライキングはセブンガーを殴り飛ばす
「オラァ！」
　俺もモーニングスターでＺに殴りかかる。Ｚはのけぞったもののすぐに体制を立て直す

「へぇやるじゃん。あの頃とは違うってかけか?」
俺は再度Zへと攻撃をしかける。しかし、うまくいなされる
「何やってるんだ」
トライキングが背後からZに攻撃をしかける
「サンキュー」
「とにかくあいつに光線を撃たせるぞ」
「分かった」
トライキングはZに接近戦をしかけ、俺はアロー光線で援護する。少しずつZにダメージが蓄積されて行く。今の戦況に痺れを切らしたのかZは俺達から距離をとり、ベータクレセントスラッシュで攻撃する
「あっぶね!」
その攻撃を回避した俺達に追い打ちをかけるため、Zはエネルギーを溜め始める
「ゼスティウム光線!」
「来た」
「今だ」
俺は腕からチェーンを放ち、キングジョーを無理矢理俺達の目の前に移動させる。キ

ングジョーはシールドをはって光線を防ぐが、すぐに限界が訪れ、分離してしまった
「これでいいのか？」
「ああ。これで解析には十分なサンプルが提供できたはずだ。あとは適当にあしらって退場といこう」
『ｇａｎｑ』
『ｒｅｉｃｕｂｕｓ』
『ｆｉｖｅｋｉｎｇ』
　ジャグラーはガンＱとレイキュバスのメダルを追加で読み込み、ファイブキングへと変身する。そして、両腕と頭部から光線を放つ。しかし、デルタライスクローに変身したＺのベリアロクによって切り裂かれてしまう

「こりゃあ援護に徹した方が良さそうか？」
　Ｚはベリアロクに愛想を尽かされたのか単身でファイブキングに挑む。お互い多彩な技を駆使し、お互いの技を防ぎつつ攻撃している
「援護する隙もねぇな」
　そうこうしているうちに、Ｚはガンマフューチャーへと変身し、ガンマイリュージョンでパワータイプのティガとストロングタイプのダイナを召喚し、デラシウム光流とガ

ルネイトボンバーで攻撃する。しかし、ファイブキングはガンQの能力でそれらを吸収し、レイキュバスの力で反撃する。Zはその攻撃をバリアで防ぎ、今度はガイアを召喚する。ガイアはファイブキングにフォトンエッジを放つ。ファイブキングはガンQの力で吸収を試みるがフルパワーのフォトンエッジにより目つぶしされ、ギャラクシーバーストによって爆発四散した

「ジャグラーがやられたか…」

Zがこちらを向く

「まさかここまで強くなっているとはなぁ。成長ぶりに感動させられるねぇ。だが簡単にはやられねぇよ。久々に暴れられる機会だしなぁ！ベリアルさん！ゴモラさん！」

『ｂｅｌｉａｌ』

『ｇｏｍｏｒａ』

「これでエンドマークといこうじゃねぇか」

『ｓｔｒｏｎｇ　ｇｏｍｏｒａｎｔ』

俺はストロングゴモラントへと変身し、Zに挑む

「ハイパーデスファイヤー」

口から強力な炎を放ちながらZと距離を詰める

「食らえ」
　そして、思いっきり殴りつける。さらにラッシュでＺを追い詰める。分が悪いと感じたＺはテレポートで距離をとり、ベータスマッシュに変身する
「ベータレーザー！」
「そんなもん食らわねぇよ」
　俺は光線をベムスターの腹部で吸収し、羽を使って空中に飛び上がる
「グラビトロプレッシャー！」
　頭部の三本の角から重力波を放ち、Ｚを地面にたたきつける
「とどめだ！ガイスティウム光線！」
　身動きがとれないＺに口から光線を放つ。しかし…
「面白そうなのと戦ってるじゃねぇか」
　突如現れたベリアロクによって光線が吸収され、重力波はたたき切られた
「チッ。いいところで邪魔が入りやがった…」
　Ｚはベリアロクを握ると、再度デルタライズクローへと変身する。ここから一気に形成が逆転し、ベリアロクの連激によってダメージが蓄積していく
「とっとと決めないとまずいな」
　俺はアロー光線、冷却ガス、火炎放射、スネークヘルサンダー、ツインスパーク、ホ

ワイトダール、岩石、そしてガイスティウム光線を同時に射出する
「食らえ!」
しかし、すべてベリアロクによって切り裂かれる
「デスシウムスラッシュ!」

「やっべ」

とっさにシールドを目の前にはるが、耐えきれず攻撃を受けてしまった
「いってぇ…」
大きなダメージを受け、変身が解除された俺はアスファルトにたたきつけられる
「どうやらこっちには気づいてないようだな」
ストロングゴモラントを撃破したZは空へと去って行く
「俺もとっとかえるか…」
自宅へと足を向け、歩き始めたそのとき、銃声が響き、俺の腕に直撃する
「おいおい誰だよ。一般人に銃を放ちやがったのは」
銃弾が飛んできた方を見ると軍服を着た小柄なおっさんがそこには立っていた
「誰だ?!」

「そのベリアルメダルをよこせ」
「なるほどセレブロか…。最悪なタイミングだな」
セレブロは再度銃を放つ。俺はバリアでそれを防いだ
「このメダルは俺のものだ。レイキュバス」
俺はレイキュバスの力を纏い、霧を発生させ。姿を隠す
「ネロンガ」
さらに、ネロンガの力に切り替え、体を透明化しその場から去った
「あの服、さっきのＧＡＦＪのものだったな…」
見た感じ階級も高そうだ。寄生した人間の地位をうまく使い、ストレイジを解散させ、さっき言っていたロボットを作らせているのだろう
「ジャグラーがうまいことやってくれると祈るか…」
俺は足を引きずりながら帰路についた

２４話

『…以上の理由でストレイジは解散。第一特殊空挺機甲群を新たに編成し、今後はこの部隊が対怪獣ロボット兵器運用することとします』
「セレブロ…」
　何気なくテレビをつけるとストレイジの後継団体の会見放送が行われていた
「今はこのおじさんがセレブロなの？」
「ああ間違いない。この間ベリアルメダルを狙って襲われた。あれを見る感じろくな武器は持っていなさそうだがな」
　俺は先日のことを思いだしながら語る
「そういえばセレブロって何なんです？」
　リリィが人数分のコーヒーをお盆に載せて会話に混ざる
「ああ…。そういえば言ってなかったな。本当はあまり人にしゃべっていい内容ではないがリリィにはいいだろう。セレブロは俺達と同じく別の宇宙からやってきた寄生生命体だ」
「寄生生命体？」

「ああ。文字通り有機生命体に寄生して、行動出来る。やつはその性質を利用して、様々な星の文明を滅ぼしながら渡り歩いている」
「そんなことをしてるのに捕まったりしてないのは何でなの？」
「セレブロのやっかいなところは人間に寄生することなの。それに文明を破壊すると言っても、外部から見れば人間の手に余る兵器によって自滅しているようにしか見えないの」
「やつは星に恐怖を植え付け、強力な防衛兵器を次々と作らせる。そしてその兵器を奪い取ってすべてを破壊する。俺はセレブロを抹殺するためにこの地球へやってきた。もっとも、ジャグラーのせいでろくに動けてないがな」
　俺はテレビをもう一度見やる。いつの間にかセレブロは横にはけ、気の強そうな女がウルトラマンについての解説を行っていた
『…彼らのデータを徹底的に解析し、ついに人造ウルトラマンとでも言うべき最強のロボット兵器の開発に成功したのです。その名も…ウルトロイドゼロ』
　画面にはウルトラマンゼロを模したと思われるロボットが映し出される。胸部には巨大な射出口がついており、おそらくｄ４が装備されているのだろう
「趣味が悪いわね」
　グリードがコーヒーをすすりながらそういう

「ああ。ロボットウルトラマンなんて基本ろくなことにならない」
俺はスフィアに乗っ取られ、火星で暴れた人造ウルトラマンを思い浮かべる
『ウルトラマンと同等のパワーを持つこのウルトロイドゼロは、ｄ４レイを完璧にコントロールすることが出来るのです』
女とセレブロが入れ替わり、セレブロが再度語り始める
『このウルトロイドゼロが皆様の安全を守ります。地球は！我々人類の手で守らなければならないのです！ウルトロイドゼロの起動テストを今週末に行います。その日こそ、人類にとって平和への偉大なる一歩となるでしょ…』
俺はテレビの電源を消す
「今週末か…」
「人造ウルトラマンとｄ４レイ。もし起動したなら、周囲の怪獣が反応して目覚める可能性が高いわね…」
「むしろ怪獣どもにどうにかしてもらった方がありがたいんだがそうもいかんだろうし…。とりあえずテスト区域近くに眠っている怪獣の座標を調べてくれないか？」
「分かったわ」
グリードは端末を取り出し、手早く調べ始める
「さて、おやつでも作りますか」

「手伝うよ」
「いや、そんなたいしたものは作らないしノワールの相手でもしててくれ」
　俺はキッチンへ向かいパンケーキを作り始める。すべてが焼き終わり、パンケーキを乗せた食器をもっていくとすでに作業は終わっていたようだ
「早いな」
「メフィラスボットを周囲にばらまいて超音波で確認した結果がこれよ」
　グリードは地図を空中に映し出す。そこにはいくつか赤い印が付けられていた
「形状から予測しただけだからどの怪獣が出るかは正確には分からないけどおそらく鶴河湾にキングゲスラとタッコング。葛葉山にデマーガ、ゴメス、パゴス。そして芦ノ湖付近にグリーンモンス、ツインテール、チャンドラーが眠っているようだわ」
「やっかいそうな芦ノ湖から行った方が良さそうだな。チャンドラーは怪力と羽以外は目立った能力を持っていないから大丈夫だがグリーンモンスは強力な毒を持つし、ツインテールは水中だと無類の強さを誇る。うまく対策しないとやっかいだな…」
「他の地区の状況に関してはその都度報告するわ」
「おまえは参加しねぇのかよ…」
「ちょっと忙しいのよ。研究しなきゃいけないことも残っているし」
「はあ…分かったよ。とりあえず芦ノ湖の怪獣の正確な座標を俺の端末に送っておいて

くれ」
　俺は送られてきたデータを元に対策を講じることにする。そしてあっという間に時は過ぎ、ウルトロイドゼロの起動テストが開始された

『始まったみたいよ』
　グリードからテレパシーで起動テストの開始が伝えられる
「始まっちまったか…。だが、準備は出来ている」
　グリードからの一報があってから5分も経たないうちに地面が揺れ始めた。近くの山が2カ所崩れ、チャンドラーとグリーンモンスが出現する
『他の2カ所にも怪獣出現。パゴスとゴメスはまだ眠っているみたい』
「ツインテールは眠ったままか?」
『水中に巨大な生体反応があるからおそらく目覚めているはずよ』
「結局芦ノ湖のは全部起きやがったわけか…」
　俺は怪人態へと変身する
「ガディバ」
「何だ?」
　俺の腕からにゅるにゅるとガディバが現れる

「ムスカリに変身してチャンドラーの相手をしてやれ。俺はグリーンモンスをやる。あと、水中にツインテールがいるから引きずり込まれないように注意しろ」
「了解」
「木っ端みじんにしてやる。ディノゾール」
　俺はディノゾールの力を纏い、巨大化する。それに習ってガディバもイカルス星人の姿になって巨大化した
「行くぞ」
　俺達は、２体の怪獣の元へと走る
「食らえ！ハイドロプロパルサー！」
　俺は爆発性の高い流体焼夷弾を放つ。しかしチャンドラーは空へと飛び上がって回避し、グリーンモンスはその柔らかい体を生かし、避ける
「チッ。ガディバはアロー光線で追撃しつつ空中で戦え」
「分かった」
　ガディバは指示通り行動する
「うおぁ」
　グリーンモンスから放たれた触手が俺の足に絡みつき、俺の体を引きずる
「はあ！」

スクープテイザーで触手を切り刻み、体勢を立て直すために一度距離をとる。グリーンモンスは何本も触手を出し、構えている
「痛ぇ…」
先ほど触手が絡みついた箇所から血が出ている
「これスフランじゃねぇか。あのグリーンモンスはスフランを取り込んだ変異種か？」
理由は分からないがどうやらこのグリーンモンスは吸血植物のスフランを体に有しているようだ。スフランが空中で戦っているガディバへと伸びる
「危ねぇ！」
俺は再度スクープテイザーを使い、空中に伸びたスフランをすべて切り刻む
「思ったよりもディノゾールは扱いが難しいな…。訓練が必要そうだ。エンマーゴ」
俺はエンマーゴの力を纏う
「オラァ！」
襲いかかるスフランを焼き尽くしながらグリーンモンスを殴りつける
「うえっきもちわりぃ」
グリーンモンスの体表からは大量のムチンがあふれ出し、体が柔らかいことも相まって打撃が通らない。グリーンモンスは、スフランで俺の体を拘束し、至近距離から毒ガスで攻撃してくる

「やべぇ…息が…」
　血液が大量に失われ、さらに毒ガスを浴びせられたことで意識がもうろうとしてくる
「…てめぇなんかに負けてたまるかよ！」
　俺はグリーンモンスの真下の地面を勢いよく隆起させ、串刺しにする
「食らえ」
　頭上に黒雲を発生させ、雷を落とし、生えているスフランをすべて焼き切った
「ガイスティウム光線」
　そして光線で絶命させた
「ふう…。危なかった」
　俺はムチンでぬめぬめのグリーンモンスの体表を触り、同化した
「きめぇがこいつの能力はなかなかのものだ。いただいておこう」
　完全に同化し終えたそのとき突然触手のようなものにつかまれ、湖に引きずり込まれる
「しまった！完全に忘れていた」
　水に引き込まれた俺は地上とは比べものにならない速度で移動するツインテールに苦しめられる
「うわ！」

ツインテールの連続体当たりを受け、岩石にたたきつけられる
「エビのくせにこんなに強いのかよ…」
ツインテールが噛みつこうと鋭くこちらへと突進してくる。それを紙一重で回避した
「よし!うまく刺さりやがった」
あまりにも速いスピードで突進したツインテールは岩石へと突き刺さり、身動きがとれない
「おまえが変な能力を持っていなくて助かったぜ。ガイスティウム光線」
光線を受けたツインテールは木っ端みじんとなった。俺は湖から上がる
「そっちも終わったみたいだな」
アロー光線を受けたのであろう焼け焦げて右腕をもがれたチャンドラーが横たわり、それにガディバが座っている
「こいつを俺と同化させてもいいか?イカルス星人よりかは近接戦に優れているようだし」
「かまわんよ」
ガディバは体をガス状に戻し、チャンドラーの体に同化する。そして俺の体へと戻っていった

「お疲れさん。グリード。他の状況はどうだ？」
『パゴスとゴメスが目覚めてデマーガとともにウルトロイドゼロと交戦。さらに、ウルトラマンＺを退いた鶴河湾の怪獣が葛葉山に到着Ｚも今遅れて到着したわ』
「分かった。ゼットン」
　俺はゼットンの力を纏い、テレポートで葛葉山へ向かう
「到着っと」
　俺は手始めにデマーガを蹴り飛ばし、状況を確認する
「へぇ。ベリアロクとＺライザーの二刀流か。かっけぇじゃねぇか」
　その後、デスシウムスラッシュとデスシウムファングを食らった２体は鶴河湾へと帰って行った
「暴走が解けたか。じゃあ後はあっちだけ」
　俺はウルトロイドゼロの方を向く。胸部の射出口にエネルギーを溜めている
「まさか…」
　ウルトロイドゼロはｄ４レイを発射し、３体の怪獣は跡形もなく消え去った
「あの威力の光線を完全にコントロールしてやがる…」
　しかし、反動が大きいのかウルトロイドゼロは地面へと倒れた。Ｚが駆け寄り、中の人間を救出する

「これにて一件落着…とはならんよな…」

ウルトロイドゼロの搭乗口に誰かが飛び乗った。彼は緑色に目を光らせると魔人態へと変身する

「ジャグラー…」

２５話

「ジャグラー…」
　ジャグラーに気をとられていると、背後から光線が放たれた。光線は俺の体に直撃し、変身が解除される
「ファイブキング…。セレブロか…」
　どうやら不意打ちをしかけたのはセレブロのようだ。ジャグラーのウルトロイドゼロ強奪を阻止すべく攻撃してくる。それに応戦するためにジャグラーはゼッパンドンへと変身した
「巨大化は無理か…」
　どうやら力を使いすぎたようだ。俺はこの戦いを観戦することにする。激しい打撃と光線の撃ち合いが続く
「セレブロ、今はそいつの中にいるのか…?」
「ようやくおまえの目的が分かったぞぉ!ジャグラスジャグラー!俺が人類に作らせた最終兵器を横取りするつもりだったのかぁ!」

Zがヨウコを安全なところへ置き、デルタバーンキックでファイブキングを蹴り飛ばす
「よおハルキ。手伝ってくれんのか?」
「その怪獣もあんただったのか隊長!一体何が目的なんすか!?」
「昔…大きな木を切ったことがあってな…」
「はあ…?」
「戦争を止めるため、自分の正義を貫くためだった…。だがすべてを否定されたんだ。だからそのおもちゃがいるんだ。自分の正義が絶対だと思ってる連中にその正義の危うさを味合わせるために」
ジャグラーはバリアで攻撃を防ぎつつファイブキングへ接近する
「話は終わってないぞ!」
Zの元にベリアロクが現れ、ジャグラーとともにファイブキングへ攻撃をしかける。しかし、これまでの戦闘によって力を使い果たし、変身が解除された。ジャグラーはこの隙を逃さず、ファイブキングをマガオロチの尻尾で貫く
「終わったのか?」
ジャグラーはウルトロイドゼロを掴み、ここを去ろうとする
「選択肢は二つだ!」

「生きてやがったのか!?」
　ファイブキングの方を向くと、ガンＱの腕をハルキへ向け、今にも光線を放とうとしている
「そいつを奪って目的を達成か、それともこの小僧の命を助けるか」
　以前のジャグラーならば間違いなくウルトロイドゼロを手にしただろう。だが、ジャグラーはハルキを救うことを選んだ。２体の怪獣の光線が交差し、巨大な爆発が起きる。どうやら同士討ちのようだ
「あぁ…またやっちまった…」
「よお」
「ガイストか…」
「立てるか?」
　俺はジャグラーに手をさしのべ、状態を起こす
「やつはハルキのベリアルメダルを奪い、ウルトロイドゼロでこの星を破壊するだろう…」
「こいつを飲め。ある程度の傷は癒えるはずだ」
　俺はマンダリンジュースを手渡す

「俺のライザーは壊れちまったしどうするか…」
「他のロボット兵器を奪い取って応戦するしかないんじゃねぇか？」
「そうだな。俺はストレイジのメンバーを集めることにする」
「集めたら連絡くれ。俺も準備する」
「わかった」
　俺は怪人態へと変身し、自室へと戻った
「ただいま」
「派手にやられてたわね」
「助けてくれてもよかったんじゃねぇか？」
「言ったでしょう？やらなきゃいけないことがあるって」
「とりあえず二人とも入ってご飯にしましょう」
　エプロン姿のリリィが出迎える
「ああ」
　俺達は食卓につき、食事を始めた
「メフィラスボットで観察した感じ、あのウルトロイドゼロはｄ４レイのエネルギーが逆流して、反動で動けなくなったっぽいわ」
「だがどうせすぐに改良されるんだろう？それが終わったらセレブロが動くはずだ」

「今の彼らなら一日もあれば改良を終わらせるでしょうね」
「猶予は一日か…」
「大丈夫…何ですよね…？」
「なんともいえないな…。安定してｄ４レイが射出出来るようになったならＺと俺らが力を合わせても厳しいかもしれない」
「そんな…」
「そのためにちゃんと策を練る必要があるわ」
　今回ばかりは本当に厳しい戦いになりそうだ。万が一のサイにはアレを使うことも検討しないとな…
「とりあえず使えそうなものを集めておくか」
　俺は空間にひずみを作り、亞空間の収納スペースから様々な資材を取り出す
「エメラル鉱石にプラズマソウル。エネルギー資材として使うならここら辺か…」
「そうね。ガディバちゃんを出してくれる？」
　俺は手のひらからガディバを召喚する
「何の用だ？」
「Ｚライザーの姿になってくれるかしら」
　ガディバはガス状の体を変形させ、Ｚライザーへと姿を変えた

「何をするつもりなんだ？」
「外付けのエネルギー機関を付けるのよ。ウルトラ族と違ってあなたには制限はないけれどあって損はないでしょう？」
「確かにな。半分ほど残しておいてくれ。いざというときに使いたい」
「分かったわ」
そう言うとグリードは黙々と作業を続ける
「俺もやるか…」
取り出した資材からいくつかかき集め、すり鉢に入れてすりつぶす
「何をやっているの」
リリィがノワールを抱えてこちらに顔を覗かせる
「いざというときの最終兵器的な？」
俺は疑問符を浮かべたままのリリィを無視し、資材をすりつぶし続ける
「こんなものかな。後はこれとこれを混ぜて…」
様々な資材を混ぜ、俺は完成した赤色の液体を容器に詰める
「これで完成っと…」
俺は容器を亞空間に収納する
「出来たわ」

どうやら向こうも完成したようだ。ガディバが元の姿に戻り俺の体に入ってゆく
「これで巨大化の持続を大幅に延長出来るはずだわ。ついでに肉体の耐久性もあげられる。さっきの不意打ちくらいじゃ変身は解けないようになってるわ」
「サンキュー」
「私はまだ作業があるからあなたたちはもう寝なさい」
「そうさせてもらう。明日が決戦の日になる可能性は高いからな」
俺は寝室へと向かい、ベットに体を沈める
「これまでの依頼もやばいのはあったが今回ばかりは死ぬかもしれないな…」
俺はかつて受けた依頼を思い出す。野良化して惑星に住み着いたレイキュバスの討伐、とある星の王族の護衛、エレキングの強奪。怪獣ラッシュに惑星エスメラルダのエメラル鉱石の強奪、ウルトラ戦士と戦いになって命化ながら逃げたこともあったな…。地球を捨てて数百年。様々なことがあった
「やめよう…。あまり死亡フラグは建てるもんじゃない」
俺は目を閉じ眠りについた
「はやく起きなさい」
「もう朝か…？」
「監視カメラをハッキングして確認した感じもう改良は済んだようよ」

「思ったよりも早いな…」
　俺は顔を洗い、完全に目を覚ます
「よし…」
　俺は朝食を作るためにキッチンへと向かう
「おはよう…」
　髪の毛がはねて寝ぼけたままのリリィがやってきた
「リリィか。今日は朝食の当番じゃないのに早いな」
「だって、やばいのと戦うんでしょう…？」
「そう簡単にくたばってたまるかよ」
　俺はリリィの頭に手を置く。身長差があまりないためかっこがつかない
「朝食出来たから運ぶの手伝ってくれ」
「うん…」
「今のところ動きはないみたいね…」
　グリードがパンをかじりながら端末を確認する
「せめて腹ごしらえくらいはさせて欲しいが…」
「作戦を確認するわね。やつが行動を起こしたらテレポートでやつの元へ移動。戦いやすい場所にたたき落として。拘束技で行動を抑制して胴体以外のパーツをすべて破壊

してスクラップにする」
「ああ。おそらくやつは人間に寄生したまま搭乗するはずだ。人間に危害を加えずに倒すなら、コックピットのある胴体を残してすべて破壊するのが合理的だろう。ただ…」
「Ｄ４レイね」
「そうだ。Ｄ４レイは胸部から放たれる。仮に胴体だけになっても打つことが出来るかもしれない。上手く射出機構や燃料庫だけを壊せればいいんだが…」
「この戦い自体、賭けみたいなものなんだしやる価値は十分にあると思うわ」
「以外だな。あんたは確実に勝てる戦いにしか参加しないものだと思っていたが」
「本当はそのつもりだったわ。でも…」
　グリードはリリィのことを見つめる
「この星を…いや。この娘を守るっていう理由が出来た以上は私も戦うわ」
「そうか…」
　どうやらこのマッドサイエンティストもこの地球という星に影響されてしまった用だ
「片付けは私がやっておくので」
　リリィが空になった俺とグリードの食器を奪い取り、流しへと持って行く
「お言葉に甘えさせてもらうか」

「ええ」
　来る戦いに備え、俺は瞑想をして心を落ち着かせ、グリードは最後まで端末をいじり、何かの調整をしているようだった。そして…
「ウルトロイドゼロが基地から発進」
　グリードの端末から警報音がけたたましく鳴り始める
「行くか…」
「ええ」
「二人とも…」
　ノワールを抱えたリリィが不安そうにこちらに駆け寄る
「大丈夫よ。必ず帰るわ」
　グリードはリリィを強く抱きしめる。二人から抜け出したノワールは俺の肩に飛び乗り俺の頬を舐めた
「おまえも応援してくれるのか？」
　さわり心地のよい毛皮をなでると頷きながら返事をしてきた
「リリィを頼んだぞ」
　もうひとなでするとノワールは俺の肩から飛び降り、リリィの足下へと戻った
「行ってくる」

「いってらっしゃい」
リリィの声を聞き届け、俺達はテレポートで決戦の地へと移動した
「もう北海道まで飛んでやがるのか…」
俺達は北海道の上空へとワープした
「いたわよ」
ウルトロイドゼロが飛行機雲を発生させながらどこかへと向かっている
「やるか…。レッドキング！」
俺はレッドキングの力を纏い、変身した
「はあああああああ！」
レッドキングの怪力と落下する勢いを使いウルトロイドゼロを地面へとたたき落とす
「ああおまえか。正直陰が薄かったから覚えてなかったよ」
「うるせぇ！てめぇをここでたたきのめす！」
「ふん。ゲームの余興としては丁度いい。完成した地球人の最終兵器の力を味わうと…」
グリードが高速で接近し跳び蹴りでやつを吹き飛ばす
「格好つけてるとこ悪いが一気に決めさせてもらうぞ！」

『ｓｔｒｏｎｇ　ｇｏｍｏｒａｎｔ』
「グラビトロォ・プレッシャァァァー！」
俺は頭部の角から強力な重力波を発生させ、やつを地面へとたたきつける
「今だ！」
グリードが空中へと飛び上がり、爆弾をウルトロイドゼロに浴びせ、グリップビームで追撃する。俺もアロー光線で援護し、やつの周囲は砂煙が舞い上がる
「やったか？」
煙から二つの高エネルギーカッターが俺へとはなたれる
「くっ…」
ストロングゴモラントのでかい図体では上手く回避できずにもろに攻撃を食らってしまう
「ガイスト！あの装甲、ペダニウム合金じゃなかったの!?」
煙の中からウルトロイドゼロが飛び出しグリードの元へと上昇。お返しとばかりに地面へとたたきつけた
「クソ・アリゲラ・」
俺は高速でブレードを展開しとどめを刺そうとしているウルトロイドゼロの元へ移動し、グリードを抱え、一度距離をとる

「大丈夫か？」
「なんとかね…」
「あはははっはっっはははは！キエテカレカレータァ！」
「小細工は通用しねぇってわけか…。俺がしばらくやつの相手をする。それまで体力を回復させてチャンスをうかがえ」
「わかったわ」
「ふう…。上手くいくかは分からないがやってみるか！ベムスター！エンマーゴ！」
俺は二体の怪獣達の力を纏う。エンマの衣装にベムスターの盾を構えた姿へと変身した
「Ｚライザーのおかげかそれとも俺自身の強さが増しているのか…」
俺は以前はＺライザーを介さなければ複数の怪獣の力を扱うことは出来なかったが今回は上手くいったようだ
「行くぞ！」
俺は亞空間から星斬丸を取り出す。やつも両腕にブレードを展開する。蹴りを交えたやつの連続攻撃を、剣と盾で受け流す。そして隙を突いてやつは額からメーサーを発射した
「その攻撃いただいた！」

俺はベムスターの盾でその攻撃を防ぎ、そのエネルギーを利用してやつの背後に黒雲を発生させる
「食らえ!」
黒雲から無数の雷がウルトロイドゼロに降り注ぐ。しかしその攻撃はすべてバリアによって防がれた
「チッ。ゼットンシャッター並の強度だな…」
エネルギーを吸収されることを嫌ったかやつは実弾攻撃に切り替える
「そのぐらい対策してるんだよ!」
俺はエンマーゴの力を使い目の前の地面を隆起させ、バリケードを作り攻撃を防ぐ
「ゼットン!ネロンガ!」
俺はゼットンとネロンガの力を纏う。胸部にオレンジ色の発光器官が現れ、体には黄色い稲妻状の模様と頭部に角が現れる。先ほど作ったバリケードに身を隠しながら透明化し、やつの背後にテレポートする
「くたばれ!」
俺は火球でやつの腕の関節部を狙って攻撃する。透明化したままテレポートで移動し、様々な角度から火球で同じ場所を攻撃し続ける
「硬てぇ!」

「うぜぇんだよぉ！」
　ウルトロイドゼロはミサイルやメーサーを周囲に向けて一斉放射する。その一部が被弾し、俺は打ち落とされてしまった
「はあ…はあ…」
「お前らを確実に片付けるために下準備をしようか」
　ウルトロイドゼロは飛び立ちどこかへと飛んでいく
「グリード大丈夫か？」
「だいぶ回復したわ。追いかけるわよ」
「ああ」
　俺達はやつの後を追い、飛行する
「ここは？」
　どうやら防衛組織の施設の一つのようだ。ウルトロイドゼロはある建物に目を付けると腕を突っ込む
「大きな生命反応を確認。あいつ怪獣を吸収してるわ！」
　クレッセントの断末魔が消えるとやつはこちらを向いた
「殺されに来たのか。とっとと逃げていれば殺されずに済んでいたかもしれないのに。いいだろう。丁度クレッセントの生体エネルギーを吸収したところだ。人類最強の必

殺兵器の威力をとくと味わうがいい！」

ウルトロイドゼロの胸部にエネルギーがたまってゆく

「まずい！」

俺はレイキュバスとエレキングの力を纏う

「ガイスティウム光線（グリップビーム）!!」

俺達二人の光線に冷気と炎、電気が混じり合いウルトロイドゼロへと放たれる

「ｄ４レイ。発射」

しかし、ｄ４レイの強力なエネルギーに押し返される

「やべぇ！俺に同化したすべての怪獣達よ！俺に力を！」

俺の体に怪獣達の力があふれる

「はあああああああ！」

一気に出力を上げた光線によってｄ４レイを押し返す

「いけるぞ！」

「そいつはどうかな？」

奇怪な音とともにウルトロイドゼロの体にエネルギーが纏われる

「マイナスエネルギーだわ！」

「さっきのクレッセントか!?」
「死ねええええ!」
マイナスエネルギーを帯びたｄ４レイは俺達の全力の光線を押しのける
「後は頼んだわよ」
「え?」
グリードは俺を突き飛ばし、シールドでｄ４レイを防ぐ。しかしすぐにそれも割れ、空間ごと…
「グリード!?なあ!返事をしろ!グリード!」
「ははははっははは。あのキチガイ女が仲間をかばって死ぬとはなぁ!」
セレブロの高笑いが響く
「…さん。お前だけは絶対に俺が殺してやる!」
俺はベリアルの力を纏い、一気に接近するしかし…
「なぜだ…体が…。外付けのエネルギーで持続性はある程度増しているはずなのに…」

「それだけダメージを負えば動けないのも当たり前だろう。そうだお前を殺すのは最後にしてやる。この星が滅び行く姿を見ながら死を待つといい！キエテカレカレータァ！」

ウルトロイドゼロは空へと飛び立つ。おそらく他の怪獣を吸収しに行くのだろう

「ま…待ちやが…れ。てめぇ…は…俺…」

俺の意識はそこで途絶えた

２６話

目を開けるとそこは廃倉庫のような場所だった
「あいつは!?」
俺はガバッと体を起こす。すると体中に激痛が走った
「もう少し大人しくしといたほうがいいぜ」
俺は声の主の方へと顔を向ける
「ジャグラーか」
ジャグラーがさび付いた階段の手すりに手をかけながらこちらに話しかける
「とりあえずストレイジのメンツは全員集めた。そこで寝てるハルキも含めてな」
周囲を見渡すと整備員らしきやつらが十人ほどと貫禄のあるおっさん、ユカ、そして眠っているハルキがいた
「俺が眠っている間にどうなったか聞かせろ」
ストレイジのメンバーは顔を見合わせる。そしてユカが話し出した
「ウルトロイドゼロはあなた達を倒した後世界中の休眠状態の怪獣を吸収した後にＺと交戦」

「吸収した怪獣とメダルの力をウルトロイドゼロに纏わせ、殲滅機甲獣デストルドスになりやがった。今頃は世界中の主要都市を破壊して回ってやがる」
かぶせるようにジャグラーが語る
「あんたのライザーは壊れ、グリードは消滅し、こいつは寝てやがる。今巨大化出来るのは俺だけか…」
俺はグリードが消滅した瞬間のことを思い出す
「クソ！」
俺は地面をたたく
「今この星でやつに対し有効な攻撃が出来るのはお前とZ、そしてロボット兵器だけだ」
「あんたらはロボットの強奪に行くんだろう？」
ジャグラー達は静かに頷く
「強奪と整備にどれだけ時間がかかる？」
「整備は俺達の誇りにかけて１時間。いや３０分で終わらせてみせる」
貫禄のあるおっさんがそういった
「制圧自体は１０分もあれば出来るだろう」
まあジャグラーがいれば制圧に時間はとらないだろう。移動も含めれば一時間は必要だろうか

「デストルドスの正確な座標を教えろ」
　俺の端末へ座標が送られる
「お前らが準備する一時間…。俺が死ぬ気で稼いでやる」
　俺はボロボロの体に鞭を打ち、起き上がる
「ガディバ」
　俺の手にZライザーが握られる
「もし俺が帰ってこなかったらリリィのことを頼む」
「ガイスト…」
「あばよ…」
　俺は手を振り、先ほど見た座標へとテレポートした
「こいつはひでぇな…」
　映し出された光景はまさに地獄絵図だった。あらゆる建物は破壊され、戦闘機はビルに突き刺さり、水道管から水が噴き出し、そこら中で火災が起きている。デストルドスの足跡の中央には踏みつぶされたのであろう原型をとどめていない死体があり、周囲からは悲鳴と泣き叫ぶ声が聞こえる
「マ〃ミ〃イ〃」
　瓦礫によって顔のつぶれた女性の体を小さな女の子が揺すりながら泣きわめく。そ

れに気づいたデストルドスは耳障りに感じたのかデストルドサンダーブラストを放った
「やめろおおおお!」
俺はゼットンの力を纏って巨大化し、ゼットンシャッターでなんとか少女を守った
「死に損ないがまた殺されに来たのか?見ろ!この美しい姿を!この星をゲームを終わらせるにふさわしい力だぁ!」
「それがどうした!俺がここでお前をぶっつぶす!」
『ｅｘｔｙｒａｎｔ』
「この地で死んだ怪獣達、そして人間達の魂よ!この俺に力を!」
ジェロニモンの能力で死んだ者達の魂を俺の体へと吸収させる
「お前達の力ァ!お借りします!」
『ｄｅａｔｈｂｏｎｅ』
「さあ始めようか」
怨念を吸収しデスボーンとなった俺は怨念を纏いながらデストルドスへと突進する
「食らえ!」
俺はモーニングサンダーをたたきつけ、続けざまに怨念火炎放射を放つ。どうやら攻撃は通っているようだ

「貴様ァ！」
　デストルドスはデストルドブレスを放つ。その攻撃は腹部で吸収する
「っはあはははははは！その攻撃は邪魔な口をふさぐおとりに過ぎん！死ねぇ！」
　デストルドスは全身からデストルドサンダーブラストを放つ、それにより、角は折れ、肩が砕け、腕がもげてしまった
「どうだ思い知ったかぁ！」
　セレブロが高笑いする
「バーカ」
「何だと？」
　俺は再度周囲から怨念を吸収する。すると先ほど損傷した箇所がみるみるうちに修復していく
「こいつはいいな」
　怨念を集めれば無限に再生され、そのたびに力を増してゆく。時間稼ぎにはぴったりだ
「クソがぁ！」
　デストルドスは様々な飛び道具を放ちながら突進してくる。俺は回避することなくその攻撃を受け止め、反撃する。そんな攻防が２０分ほど続いた時のことだった

「まずい！日差しが！」
　どうやらこの国の日の出の時刻が訪れたようだ。俺の周囲の怨念が太陽の光によって消えてゆく
「よく分からんが再生はもう出来ないようだなぁ！くだらん能力で長引かせやがって。これで終わりだｄ４レイ発射！」
　デストルドスの胸部からｄ４レイが放たれる。俺はとっさに体内の怨念をすべて出し、バリアを張る
「クッソ！耐えれねぇ！」
「逃げろ」
　怨念達がそう言った気がした
「…すまない。お前達の復讐はきっと果たしてみせる」
　俺はゼットンの力を纏い、テレポートでその場を脱出した。怨念達によって形成されたバリアは空間ごと跡形もなく消え去った
「ようやくくたばりやがったぁ！後はこそこそネズミみたいに動いてやがる日本支部だけだ！キエテカレカレータ！」
　デストルドスは日本に向けて飛び去って行く
「ダメージは大きいがなんとかいけるな…」

俺はアリゲラの力を纏い、デストルドスを追いかける
「もう日本までたどり着いてやがるのか…」
デストルドスはすでに日本列島の上空を飛行し、ストレイジの基地を目指していた
「お前の相手は俺だぁ！」
俺はゴモラの力を纏い超振動波で地面に叩きつけ、周囲の山をディノゾールの舌で切り刻み、生き埋めにした
「いい加減うぜぇんだよ！」
土砂崩れた土砂からトゲのような誘導弾ガはなたれ俺に直撃する
「ぐあぁ」
それにより俺は地面にたたき落とされた
「決着を付けてやる」
俺はベリアルの力をベースに同化した怪獣たちの力を纏う
「クソがぁ！」
デストルドスは全身からエネルギーを放出し、周囲の土砂を吹き飛ばす
「はあああああ！」
俺は全身のエネルギーを両腕に集約する
「俺を形成しているすべての怪獣達よ！感謝するぞ！ガイスティウム光線！」

俺の光線にデスシウム光線と怪獣達の特殊能力が交わる
「そんなものおおおお！」
デストルドスの胸部からｄ４レイが射出される
「「うおおおおおおおお」」
二つの光線がぶつかり合い激しい振動波が発生する
「負けてたまるかあああ！」
さらに出力をあげ光線を放つ。しかし、俺の光線はやつに届くことなく相殺され、大きな爆発を起こした。俺はその衝撃波によって近くの山に叩きつけられる
「グァ！」
肺から空気が抜ける。だがやつもかなりのダメージを受けているはずだ。俺は正面を向く。すると目の前にやつの顔が現われた。心なしか笑っているようにさえ見える
「今度こそ死ねぇ！」
「あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟」
俺の胸にデストルドスの巨大な爪が突き刺さる。それと同時に体内から何かが奪われるような感覚が訪れる
「…にたくない…。俺はまだ…」
デストルドスの爪が引き抜かれる。その手には赤黒いトゲトゲの球体が握られてい

る

「ぜん…しんに分散した球が…最大出力を出すために…俺の胸部に再結晶しやがった…のか…？」

デストルドスはそれを吸収しようと口を開く。しかし、入る前に願い玉は粉々に砕け、光の粒子となって空へ消えた。俺の変身が解除される

「こひゅう…」

地面に叩きつけられたことで肺がつぶれたのか上手く発声できない。デストルドスがエネルギーを溜め始める。万事休すか…

「全く…だらしないわね」

声の方向を向くとそこにはリリィと足下にノワールがいた。リリィは俺を掴むとテレポートでデストルドスの攻撃から避ける

「ガディバちゃん出てらっしゃい」

俺の体からガスが発生し、蛇のような形を形成する。もう何が何だか分からない

「このこと完全に同化して傷を癒やしてあげなさい」

「なるほどそういうことか。ガイストの旦那。これまで楽しませてもらって感謝するぜ」

ガディバは胸部の風穴から俺の体に入り込み、全身へと分散する。欠損した臓器が修

復されているのを感じた
「さていくわよリリィちゃん、ノワールちゃん」
リリィの体が一瞬ブレたようにみえる。彼女はどこからかZライザーを取り出す
「あなたはここで休んでなさい」
そう言うと怪獣メダルをノワールに投げ入れる。ノワールがいつも甘えるような声とはまるで違ううなり声を上げると黒いホロボロスの姿になった
「わたしも」
リリィは複数のメダルを読み込むとエンマーゴの剣を天にかざす
「これが私の研究の集大成よ」
リリィはメフィラス星人へと姿を変え、全身に鎧を纏う
「いくわよ二人とも!」
「…お前。生きて…?」
肺が再形成されようやくしゃべれるようになる。どうやらリリィは今グリードと融合しているようだ
「はあああ!」
グリードの剣がデストルドスを襲う。それに続き、ノワールも鋭い爪で攻撃し、巧みな連携による連続攻撃でやつを追い詰める

「攻撃がほとんど通っていないみたいね…。ノワールちゃん大丈夫かしら？」
　ノワールは低く唸り、返答する
「ちょっと苦しいかもだけど出力を上げるわよ」
　グリードは二つのメダルをノワールに打ち込む。するとノワールの体にギルバリス、ギャラクトロンｍｋ２の要素が現われる。▪寄生破滅獣メツボロスだ
「リリィちゃん。あなたの力も借りるわよ」
　グリードの姿が二つに分裂する
「わたしも戦います！」
「幽体の力を使ったのか」
　パワーアップをした３人は再度デストルドスに挑む。先ほどよりも攻撃の回数が増えたことでさらにダメージをあたえてゆく。しかし、戦闘になれていないリリィを狙い、マグネリュームメーサーが放たれ吹き飛ばされる。その隙に他の二人も殴り飛ばされた
「不味いわね…」
「すみません…グリードさん…」
　デストルドスがｄ４レイの射出体勢に入る
「こいつを使うしかねぇか…」

俺は昨日作った薬品を注射で首筋から注入する
「ガディバと同化したから質量に関してはクリアしているはず…。宇宙ケシの麻酔効果のおかげで痛みもたいしたことはない…」
俺は亞空間からプラズマソウルとエメラル鉱石を取り出すと体へと打ち込む
「エネルギー面もこれでＯＫだ…。後は…」
続いて今所持しているすべてのメダルとデビルスプリンターを取り込む。すると体が引き延ばされるような感覚とともに巨大化し、怪獣達の要素が体中にちりばめられた醜い姿へと変貌してゆく
「こっちを向きやがれ！」
俺は体から無数の触手を生やし、無理矢理デストルドスの方向を変える。それによりｄ４レイは空中へと放たれ、不発に終わった
「おのれぇ！」
デストルドスがデストルドサンダーブラストで攻撃してくるのを、触手や火球、雷でなんとか相殺する
「今のうちに逃げろ！」
「わかったわ」
グリードはノワールとリリィを連れ、テレポートで退避する

「逃がすか！」
　デストルドスはデストルドヘルファイアを放つがテレポートの方が早く、上手く逃げられた
「クソがぁ！」
「ふん…。ざまぁねぇな」
　そろそろ１時間経っただろうか？融合のしすぎで正直まともに動くことが出来ない。次ｄ４レイを撃たれたら終わりだろう
「手間をかけさせやがってええ！」
　デストルドスがｄ４レイ以外の武装をすべて放ってくる
「クッソ！相殺仕切れねぇ」
　エンマーゴの力で地面をバリケードにし、エレキングとネロンガの雷、レイキュバスの冷気、ゴモラの振動波、ゼットンの火球、イカルス星人のアロー光線。他の怪獣達の光線も一斉に射撃し、攻撃を防ごうとするが、この弾幕もかいくぐられる
「弾幕を維持するのに精一杯でバリアも張れん…。仮に張れてもすぐ割れる…」
　次々と襲いかかる攻撃によって俺の体はぼろぼろになってゆく。そして、攻撃の嵐が止む。デストルドスの胸部にエネルギーが溜まってゆく
「イタチの最後っ屁だ…。ガイスティウム光線」

残ったエネルギーを体中からかき集め、右腕から光線を放つ。もはや自分の光線にすら体が耐えられておらず、腕の肉が張り裂け、骨が見え始める
「せめて…やつにダメージを与えてあいつらを楽に…」
ｄ４レイがじりじりとこちらに迫ってくる
「もう…ダメなのか…？」
そのときだった。デストルドスにどこからか青白い光線が放たれ、はじき飛ばす。それと同時に何かが俺の体を掴み、空を飛んでその場から退避した
「誰だ？」
俺をつかんだ何かを見る。女性とおぼしきヒューマノイドタイプのエイリアンで黒とシルバーを基調とした体表に青い瞳、胸部には結晶体が埋め込まれている。これはまるで…
「ウルトラ族…？」
デストルドスがこちらに向かってくる
「とりあえずジャグラー達のところまで逃げるわよ。セレブロは彼らに任せましょう」
聞き覚えのある声だ
「お前…グリードなのか…？」
「私もいますよ」

リリィの声もテレパシーで届いてくる
「お前らどうやって…」
「説明は後…とにかく逃げるわよ」
スピードが上がる。それに対してデストルドスはデストルドサンダーブラストを放ちながら追いかける
「テレポートは使わないのか？」
俺はデストルドスの攻撃をバリアで防ぎながら逃げているグリードに問う
「この形態を維持するのは結構きついのよ。テレポートをしたらおそらくエネルギーが無くなるわ。それに誘導してあれをジャグラー達に押しつけられるでしょう？」
そうこうしているとストレイジの基地とキングジョー、ウインダムの姿が見えてきた
「あとは頼んだわよ」
グリードが地上にたどり着くと同時に胸部のタイマーが鳴り始め、顔にヒビが入り始める。そして、殻が割れるように元の姿へと戻った。キングジョー達はデストルドドスを市街地の方へとたたき落としたようだ
「さて。あなたをどうするかよね」
グリードが人間サイズへと戻る
「とりあえず痛みをなんとかしてくれると助かる。宇宙ケシの効果が切れかかってて

な」
「とりあえず私の生命エネルギーをわけるわ」
そう言うとグリードは俺に手をかざし、エネルギーを分け与える。ある程度傷が癒え、だんだんと楽になってゆく
「だいぶ楽になった。ありがとう」
「さすがにきついわね。次はその図体ね」
「熱原子X線を浴びせれば元のサイズには戻れるはずだ」
「でもあなた地球人なんでしょう?」
ウルトラ族と同化した人間はアイテムを用いることで巨大化による体への影響を最小限に抑えている。しかし、巨大モルフォ蝶をはじめとした巨大化因子と怪獣メダルを使って無理矢理巨大化しただけのため、そのすべはない
「まあ戻れたとしてもこの姿だしあいつらが倒されたら戦わなければならんからとりあえずはこのままでいいんじゃないか?」
「はあ…。分かったわ。本当に無茶するんだから…」
「本当ですよね」
グリードとリリィがあきれながらそういう。俺は二人の小言を無視し、デストルドスの戦いを見ることにした

ウインダムとキングジョーは同時に光線を放つが、デストルドサンダーブラストによってカウンターされ、倒れてしまった
「おいおい不味いんじゃねぇか？」
デストルドスはｄ４レイの射出準備を始める
「クッソ。間に合え！」
俺はスフランを地中へと突き刺し、デストルドスの方へと伸ばす。だが俺のスフランが届く前に何かがデストルドスを吹き飛ばした。俺は引き飛ばされたデストルドスを地面に拘束する
「セブンガーか!?」
どうやらデストルドスを攻撃したのはセブンガーのようだ。セブンガーをウインダムに追加のバッテリーを補充する。その間にデストルドスは俺のスフランによる拘束を引きちぎり起き上がる
「チッ、抜けられたか…。俺も向こうに行ってくる。グリードはここを頼んだ」
俺はグリードの制止する声を聞き届けずにテレポートでデストルドスの前へと瞬間移動する
「ようお前ら。手伝いに来たぜ」
「あんたは!?」

「ガイストか」
「俺は何をすればいい？」
「俺達でやつの動きをなんとしてでも止める。その間にハルキはヨウコを救出しろ！」
「了解（押忍！）」
『超硬芯回転鉄拳装着』
セブンガーの腕にドリルが装備される
「よし！行くぞおおお！」
デストルドスがこちらに向かって光線を放つ。俺は後方からゼットンシャッターでキングジョーを守る。そのすきにキングジョーはタンクモードへと変形し、ミサイルで反撃を開始。さらに両脇からセブンガーとウインダムが挟み撃ちで攻撃をする
「さすがに碌にダメージが入ってないな」
デストルドスがウインダム達を軽くあしらっている隙に俺はデストルドスの周囲に無数の魔方陣を形成する
「食らえ！」
魔方陣からデストルドスに向けて無数の火球が放たれる
「おまけにこいつも食らえ！」
俺はデストルドスの地面に冷気を纏わせ下半身を凍らせる。さらにセブンガーとウ

インダムが両腕を掴み拘束する
「ガイスティウム！（ペダニウム粒子砲！）」
「光線！（発射ァ！）」
　この攻撃によりデストルドスの胸部が破壊される。セブンガーとウインダムが再度両腕を拘束し、俺もスフランを使って足の動きを封じる
「今だ！ハルキ！」
「やっちまえ！」
「押忍！」
　キングジョーがロボットモードへと変形する
「ロボットモードォオ！チェストォオオ！」
　キングジョーのペダニウムハンマーがデストルドスの胸部へと伸びる。おそらくあそこにヨウコが乗っているのだろう。だが、抵抗するようにデストルドスはデストルドサンダーブラストを放ち、セブンガーとウインダムをダウンさせる。俺はとっさにスフランを分離させ、ハイドロプロパルサーを放ち、爆風を使って距離をとることで何を逃れた
「先輩！絶対に助け出します！」
　キングジョーがデストルドスを掴んだまま飛翔する。キングジョーは空中でコック

ピットを引き抜いた
「よし!」
しかし、デストルドスがデストルドサンダーブラストを放ったことでコックピットがキングジョーの手からこぼれ落ちてしまう。さらにキングジョーもかなりのダメージを受けているようだ。ハルキがヨウコを助けるため、キングジョーを捨て、飛び降りる。デストルドスが二人に目を付け攻撃態勢に入る
「させてたまるかよ!」
俺はテレポートでデストルドスの目の前に移動し、持てる火力をすべて使い、攻撃を相殺する
「テレポートに今の攻撃でエネルギーを使いすぎたな…」
デストルドスが邪魔な俺を排除するためにｄ４零の射出体勢に入る
「なけなしの光線で１秒でも時間を稼いでやるか…」
もはやほとんど残っていない出がらしのエネルギーを右腕に集中する。そのとき、俺の体内で何かが大きく膨れ上がるような感覚がした
「ベリアルの力か?」
大きな二つのエネルギーがベリアルの力に注ぎ込まれる
「力が…あふれる…」

俺の両腕に黒いエネルギーが纏われる
「ガイスティウム…アトロスバーストォ！」
黒いエネルギーを帯びた光線がｄ４レイとぶつかり合う。巨大なエネルギー同士の衝突で大爆発が起き、俺は地面へと叩きつけられる
「痛ェ…。だが時間稼ぎには成功したようだな」
デストルドスの前にデルタライズクローに変身したＺが佇む
「援護は…無理か…」
もはや俺の体は腕すら持ち上がらない状態になっていた
「後は頼んだぞ…」
Ｚはベリアロクを駆使し、デストルドスへ着実にダメージを与えてゆく。しかしデストルドスの攻撃によりベリアロクが弾かれ、その隙に胸部が再生されてしまった
「不味いな…」
デストルドスはｄ４レイを放つ。Ｚはベリアロクを再度召喚し、ｄ４レイを吸収させる。そして無理矢理胸部にベリアロクを突き刺すことでなんとか防ぐことに成功した。しかし、その代償としてベリアロクが消滅し、デルタライズクローからオリジナルへと変身が解けてしまう。おまけに相当なダメージを負ったようだ
「立てぇ！俺が何のために死にかけたと思ってやがる！立たなきゃぶち殺すぞ！」

Ｚに人々からの声援が光の粒子となって吸収され体内にあふれた
「疑似グリッターか…」
人々の声援によって立ち上がったＺはデストルドスと激しい肉弾戦を繰り広げる。Ｚは光線をもろに受け大きなダメージを負うが、強力なパンチでデストルドスの牙を砕く。しかし、デストルドスはすぐさま起き上がり、ｄ４レイを放つ
「ゼス！ティウム！こうせぇぇぇぇん！」
両者の光線がぶつかり合い周囲にエネルギうーが飛び散る
「チェストォォォ！」
全力で放ったゼスティウム光線によりＺが押し始める。そしてＺはゼスティウム光線で巨大なＺの文字を空中に描き、それを一気に放出した。完全に押し負けたデストルドスは爆発四散した
「これで終わったか…」
俺は安堵のため息をつく
「いいえ。終わってないわ」
どこからか俺に向かって光線が放たれる。すると俺の体はみるみるうちに縮小された
「全く…。私がせっかく回復させてあげたのに無茶するんだから」

リリィとノワールが現われ、ノワールが俺のそばへと駆け寄り、俺の頬を舐めてきた。どうやらダダのミクロ化機を使ったようだ
「今の声はリリィじゃなくてグリードだよな？完全に一体化したようだな。それより終わってないってのは？」
「セレブロがまだ生きてるみたいなんです」
今度はリリィがしゃべり出し、俺の目の前にモニターを映し出す。そこには物陰に身を隠す黒焦げになった生物がいた
「あの野郎…イテテ」
全身に激痛が走る
「無理矢理怪獣達と同化して不安定な肉体になってたたでさえ地球人の体には負担が大きいのにあれだけダメージを受ければそうなるわよ。ジャグラーとストレイジのお嬢ちゃんが向かってるみたいだしそっちに任せましょう。優先すべきはあなたの体ね」
リリィもといグリードは俺の体を観察する
「ここまで同化が進んでいるとメフィラスの技術じゃ切り離すのは難しいわね…」
「願い玉が消滅しちまったせいで肉体の変化を無理矢理自然な状態へねじ曲げることも、延長した寿命もなくなっちまったしな…。どうせあと数十年しか生きられないならこのままでもいいよ」

「そんな…」
　リリィがこちらを見つめてくる
「そいつはどうかな?」
　声が響くと同時に空に別宇宙へとつながる穴がひらく。そして顔がうるさそうなウルトラマンが現われた
「ウルトラマンゼロか」
「よう」
　ゼロがいつものポーズでこちらに挨拶をしてくる
「何の用だ?俺はこの気持ち悪いキメラの姿で人間の寿命を全うすると決めて絶賛落ち込み中なんだよ。おまけに全身痛くて動けねぇし」
「おお忘れてた。ほい☆」
　ゼロはブレスレットから三つの光のエネルギーを出し、俺とリリィ、ノワールに分け与える
「動ける…。体の痛みもない…」
「キングの爺さんに頼まれてな。お前達を光の国へと連れて行く。Ａからもスカウトされているようだしな」
「はあ?!」

ゼロは俺達をバリアで包み、持ち上げると時空の穴へと飛び去った